COBALT-SERIES

ロマンチックSF傑作選

豊田 有恒 編

小松 左京
平井 和正
田中 光二
筒井 康隆
高斎 正
山田 正紀

眉村 卓
荒巻 義雄
河野 典生
豊田 有恒
星 新一

集英社文庫

〈人魚姫の昇天〉海中に墜落した宇宙飛行士を愛して、宇宙に自らの生命を散らした水中人種、マヤの悲恋！〈ラブレター作戦〉美しい字でラブレターを書きたいとペン習字を始めた美代子は、見知らぬ少女から、字のうまく書ける自動修正装置付き万年筆を贈られた。その少女とは、意外にも美代子の曽孫であったとは！——現代SF小説界の人気作家11氏がSFファンに贈る傑作11編を収録！

愛と青春を描きつくす！
ティーンのためのノベル・マガジン
小説ジュニア JUNIOR
毎月9日発売　集英社

COBALT-SERIES

ロマンチックSF傑作選

豊田 有恒 編

小松 左京
平井 和正★
田中 光二
筒井 康隆
高斎 正
山田 正紀
眉村 卓
★荒巻 義雄
河野 典生
豊田 有恒
星 新一

集英社文庫

ロマンチックSF傑作選　豊田有恒編

集英社文庫　花　23—A　￥240

SHUEISHA COBALT-SERIES

0193—610091—3041　￥240

集英社文庫　コバルト・シリーズ

好評発売中

かりそめの恋	富島健夫
吹雪のなかの少年	富島健夫
十七歳の夢	富島健夫
秘密はふたりのもの	富島健夫
雪と山と若者たち	佐伯千秋
風にきいた旅	佐伯千秋
春の祭り	吉田とし
花あんずの詩	清川　妙
愛さずにはいられない	三木澄子
白鳥に告げた言葉	三木澄子
水色の愛の挽歌	川上宗薫
明日は会おうね	川上宗薫
幸福に散った人	諸星澄子
愛のぶらんこ	藤木靖子
微笑みのうしろに	佐藤愛子
ロマンチックＳＦ傑作選	豊田有恒・編

カバー絵／村松　誠
装　丁／三谷明広

COBALT-SERIES

ロマンチックSF傑作選

豊田有恒　編

集英社文庫

ロマンチックSF傑作選
豊田有恒編
集英社文庫

COBALT-SERIES

ロマンチックSF傑作選

豊田有恒・編

集英社文庫

目次

人魚姫の昇天……小松左京 5
死を蒔く女……平井和正 11
世界樹の高みに……田中光二 33
レモンのような二人……筒井康隆 71
ラブレター作戦……高斎正 93
薫煙肉のなかの鉄……山田正紀 101
青白い月……眉村卓 127
スネーク……荒巻義雄 173
巨鳥モア……河野典生 181
帰還者……豊田有恒 205
キューピッド……星新一 229
解説……252

人魚姫の昇天

小松　左京

海の中は、暗く、冷たく、湿っていた。水深四十メートルの岩棚に腰をおろしていると、あたりはまったく静かだったが、正午という時間におけるその暗さと、頭上からかすかにつたわってくる水の動揺が、海面上で、いま嵐が吹きあれていることを示していた。

マヤは、岩棚に鳥のように軽くとまって、長い脚を組んだ。人工鰓(えら)から平静に水中の酸素を呼吸し、人工皮膚は15度Cの水温の中で彼女の体内を流れる血液温度を完全にまもってくれている。身体をしめつける4気圧の水圧は、これはむしろ彼女の育った環境のなかで、もっとも普通で、もっとも快適な圧力に属するものだった。

胸をしめつけるのは、むしろ海水生活の単調さと、この半年のあいだに、故もなく心の中にうまれた憂悶だった。海底居住区の娯楽センターにおけるダンスも、水中を60ノットでつっぱしる魚雷(トーピー)のり(ドゥ・ライディング)も、なぜか少しも彼女の心を晴らしてくれなかった。マヤはいつしか、海の中の生活が、うとましくなってきていた。といって、海上の、あまりに強すぎる光、あまりに低い圧力下での生活をやってみたいという気はなかった。

美しくふくらみ出した胸の底の、鬱々(うつうつ)とした思いをかかえて、マヤは今日もまた岩棚から海淵を見おろしていた。――水中救助隊(レスキュー)に所属する〝改造イルカ〟たちの一隊が、せわしなく甲高い声で鳴きかわしながら接近してきても彼女のうつろな眼には、何らの関心もあらわれなかった。すぐ傍

を、仔イルカの時から知りあいの一匹が通りかかったとき、やっと彼女は、何かあったのかたずねた。

「地球掃討中の宇宙船が故障を起こしたんです」とそのイルカは、イルカ特有の、ちょっと舌たらずな、しかし流暢な〝海中語〟で答えた。「ひとりだけ脱出カプセルでとび出したんだがどうやらこの海域におちるらしい。何しろ上は、たいへんな嵐なんでね。あなたも注意してください」

そういうと彼―イルカは、移植された人間そっくりの指をもつ手で、水中用のVLF(超長波)通信器を、忙しく操作しながら泳ぎ去っていった。

――頭上にかすかな衝撃を感じたのはそれから間もなくだった。

ゆっくり視線をあげると、着水の衝撃で飛んだらしいドアのようなものがひらひらと沈んできた。ついで浸水して沈んでくるカプセルと、それともつれ合うように四肢をのばして落ちてくる人型のものと……。

マヤはゆっくりと岩棚を蹴った。

「無茶なことを!」海底居住区の年老いた女医は、眼をむいて叫んだ。「だめよ! そんなことしたら、きっと……きっと死ぬわ」

「おねがい! おばさま……」マヤは涙を流しながら、それでも一歩も引かぬ風情でいった。「死んでもいいの。だって、このままだったら、私苦しくて自殺するわ」

「そんなに……」といいかけて女医は一瞬言葉をのんだ。「そんなに、あなたの助けた宇宙飛行士

に惚れたの？」
マヤは、ただ黙って涙を流し、うなずいた。
「いいこと……」と女医はさとすようにいった。「私は、あなたを赤ン坊の時から親がわりに育てたから、よく知ってるの。あなたは私などのように中途半端な存在とちがって、〝水中人種〟の第三世代の傑作なのよ。身体の内分泌から、循環系、体温調節、すべてにわたって、赤ン坊の頃から水中生活に適応するように、微妙に調節されながらつくりあげてきたの。いま、この身体で宇宙に行くなんて……無茶だわ」
「でも、宇宙むけに調整しなおすことは、できるんでしょう？」
「ゆっくりと、慎重にやればね。――それでも恐ろしく苦しいわよ。やったところで、どんな障害が起こるか……自信がないわ」
「どのくらいかかります？」
「三年か四年――それ以下ではだめ」
「だめよ！　そんなに長く待てないわ。――彼はどこかへ行ってしまう……」突然マヤはメスをつかんで、自分の心臓のうえにつきつけた。「一週間でやって！　おねがい！　でなければ、今すぐ死ぬわ。本当よ」
「ばかなことはおやめなさい！」
そう叱りつけたものの、女医は、マヤの眼にかがやく、激しい光にうたれて絶句した。鋭いメスの先は、娘のむき出しの豊かな乳房を傷つけ、糸のような鮮血が、その薄緑色のなめらかな皮膚の

うえを流れ落ちはじめていた。

月面上の晴れの海宇宙港（スペースポート）で、その宇宙飛行士はゲートから飛びこんでくると、ひとめで月面育ちとわかるほっそりした娘に、しっかりと抱きつかれた。
「さあ、もう泣くんじゃないよ。この通り帰ってきたんじゃないか」と宇宙飛行士は娘のふるえる肩をやさしくたたいた。「衝撃による記憶喪失も、ほとんどなおったんだ。まだ完全じゃないが、すぐまた飛べるようになる。そしたら、約束通り、火星へハネムーンだ」
彼の視野の片隅に、別便でついた乗客が別のゲートから吐き出されてくる光景がうつっていた。――その乗客の中から、一人の真ッ青な顔の娘が、よろめきながら、彼のほうに駆けよってきた。青みがかった緑色に近いギョッとするような顔色の、しかし充分に美しい顔立ちの娘だった。娘は彼の傍までくると、大きな眼をいっぱいにあけて、立ちすくんだ。何か哀願するように腕をさしのべ、口をパクパクあけた。――だがその口からは声が出なかった。
「この娘さんは？」と許婚者（いいなずけ）は、驚いたようにふりかえった。
「知らん……どこかで見たような気もするが――」そういいかけた彼は、娘のさし出した細い指の間に、みずかきを切除した痕跡を見つけてハッとした。
そのとき、必死になって何かいおうとしている娘は、苦し気にノドをおさえると、くずれるように床にたおれた。――呆然と見おろす二人の耳に、病院船（アンビュランスシップ）の到着をつげる警報が鳴りわたった。
「おそかったわ！」宇宙救急医たちといっしょにかけつけた海底都市の老女医は、マヤの傍により

ながら叫んだ。

「なんて無茶な子！——第一段階適応室から、わずか三日で逃げ出すなんて自殺行為だわ」

「それにしても、あの海底からここまで、よく持ったわ」と救急医が嘆息した。「強い紫外線、乾燥、稀薄な100パーセント酸素、低圧……若い娘の恋の力ってものは、現代でも、まだこんなに強いものですかな」とつぶやく彼に「幼なじみのイルカをつかって、あなたが陸上の病院を退院して、ここへこられることを聞き出し、矢もたてもたまらなくなったのですわ」と老女医は、何もかも二人に話し、マヤの身体を抱きしめながら、涙のあふれた眼をあげた。

「もし……もしおいやでなかったら……この子の遺髪を、火星か、どこかもっと遠くの星へ持っていってやってくださいナ。——〝人魚姫〟の魂は、たしか死んだあと、空にのぼって星になったんでしたわね」

死を蒔(ま)く女

平井　和正

精神病医は、その女の去った戸口に眼を据え、しゃちほこばって座っていた。胸中にむかつくような虚ろな空洞が生じ、無力感を感じていた。その空洞の中に氷の結晶が現われ、急速に成長して行くようだ。

やがて、それが彼の五体の内部をそっくり占領すれば、医師のかたちをした氷の像が椅子の上に残ることになるような気がする。

医師は声をあげて看護婦を呼んだ。

「猫の死骸の臭いがする。きみはあれをどうしたんだ？」

ポニーテイルの看護婦は、隣室から仕切戸を押して、けげんそうな顔をのぞかせた。

「もう下へ持って行きましたけど。どうかなさったんですか？」

「臭（にお）うんだ。きみはなにも感じないのかね？　胸がむかついてくる」

医師は汗を額に光らせていた。

「そうでしょうか。あたくし、べつに感じませんけど、窓をあけて空気を入れ替えます？」

「そうしてくれ。たのむよ」

声は苛立ち、鋭い調子をおびていた。看護婦は、医師がいくらか神経質になっている、と思った。

可愛がっていた猫が急に死んだせいかもしれない。ほんとに突然、わけのわからない死にかたをした。あんなに元気のいい、お調子ものの猫だったのに……

彼女は窓をあけた。

都心の高層ビルの十五階にある窓。灰色の舗石は、はるか下に遠い。冷えた空気が室内に流れこむ。

「これでよろしいですか、先生？」

「あ、ああ……結構だ」

医師は手の甲で、濡れそぼった額を押し拭った。看護婦はミニの白衣から、すっきりした恰好（かっこう）のいい脚をみせ、ポニーテイルの髪を一振りし、小造りの身体をきびきびと揺すって、部屋を横切って行く。気の利くいい娘だ。万事につけて不確かさというものがない。事務用品のように現実的だ。

「ちょっと、きみ……」

医師が衝動的に呼びとめる。

看護婦は振りむき、黒いボタンのように光っている眼をむけた。医師は汗にまみれた手を振った。

「いや、もういい。用事はない」

看護婦は目礼して隣室へ去った。

医師は、ひどく抑制を欠きはじめた自分を知った。すんでのところで悪夢にうなされた子どもみ

たいに振舞うところだった。ひとりにされたくなくて、看護婦をひきとめておきたかったのだ。

焦燥が耐えがたい苦痛になりはじめた。居ても立ってもいられない。弾かれたように椅子を立ち、脂汗を身体中に滲ませながら、室内を意味もなく歩きまわる。

胸中の氷塊の重みで、ほとんど呼吸困難だ。

医師は、自分が怯えている事実を認めたくなかった。それは、子どもを死ぬほど脅やかす暗黒の恐怖だ。ただ、むしょうに恐ろしい。理性ではひたすら反抗し、否定しつづけ、しかも完全に否定し去ることができない。魂の芯が虫食い歯のようにむしばまれているのだ。無力感で身体が萎え痺れ、鋼鉄の指が心臓を絞めあげる。

子どもや未開人は、この恐怖だけで死ぬことすらある。

ふいに医師は立ちどまった。自分の唇が自然に動いているのを感じたのだ。

――そんなはずはない。そんなこと、常識ではとても考えられない。あなたは、自分の想像を現実ととり違えてしまうんですな。強迫観念はだれにもあります。心配はいりません。治療すればよくなります。それで、頭がひどく痛んだり、失神したりするようなことはありますか？

――ありません。ありません。ありません！

その女の暗く熱っぽい声がまざまざと聞こえた。女がそこで喋っているような、明瞭な声音。

幻聴であった。背筋に氷の指がふれたように、全身が鳥肌立った。医師は顔面をひきつらせて立ちすくんだ。

――そんなこと、全然ないんです。ただ……こわいんです。居ても立ってもいられないんです。

我慢できません。とても我慢できません！　先生、たすけていただきたいんです。

暗く思いつめた、女の顔の幻影が、患者用の椅子の上に現像された。想像力がせっせと働きだし、記憶の映画フィルムを映写しはじめたのだ。

折れそうなほど痩せほそった女の体つき。長い黒髪にかこまれた蒼白な顔。膝の上にかぼそい指が、絶えず、組まれ、ほぐされ、組まれ、ときおり発作的に力がこめられて、手の甲に白く腱が浮きあがる。

ただの想像ですよ、人間を呪い殺すなんてことは。そんなこと、あるはずがない。

――そうじゃないんです。だからこわいんです……あたし、ほんとに思っただけで、生きものを殺せるんです。

――ブゥードゥー教の妖術師みたいに？　迷信深い無知な黒人は、呪われていると知っただけで神経衰弱になって死ぬこともあるそうですがね。

医師の職業的な冷静な声音に、いくらかうんざりした響きがまざっていた。

――日本にも、丑の刻参りという俗信呪法があります。神木に、憎い敵を象るワラ人形を五寸釘で打ちつけ、呪い殺すというんだが、まさか、あなたは……

――いいえ、そんなことはしません！

――ふうむ……で、あなたは、その恐ろしい能力を、実際に応用したことがあるのですか？

医師は辛抱をつづけていた。好き勝手な長話を我慢して聞いてやり、投薬し、適当な食餌療法の指示を与えてやれば、彼らはけろりとして帰って行くものだ。近代人はだれしも強迫観念の妄想に

とり憑かれているのだ。都会生活の自己疎外は、おびただしい神経症患者を生む。

——……。

女の声が小さいので、医師は聞きかえさねばならなかった。

——あるんです。人が死にました。あたしの憎んだ人が……あたしが殺したんです。

——殺した?! まあ、よろしい。では、最初から筋道をたてて話してごらんなさい。

女の烈しい痛みに耐えているような表情に、微かな熱意が浮きあがった。

クリスマスが迫った街路はひどい雑踏。商店街の店頭に明滅する色とりどりの豆ランプ。金銀のモール飾り。舗道に散乱する造りもののヒイラギの葉。

ショーウィンドーの豪華なデコレーションケーキが子どもたちのもの欲しげな視線を吸い寄せている。ガラスに白くぺしゃんこに押し潰された小さな鼻。曇っては晴れ、晴れては曇るせわしないガラスの吐息。

クリスマス・ツリーの枝々を震わせる途方もない音量のジングルベル。

道行く人々は、コートのえりを立て、凍てつく空気の歯に犯されまいと、白いマスクの後ろに隠れ、押しあいへしあい右往左往、街路を流れて行く。だれもが他人に無関心。通りは白々しい喧騒と混雑と光の洪水。

連れ立った若い娘たち。コートのすそから輝くような若い脚をむきだして、ハイヒールのかかと

が舗道を足早に踏んで行く。腕にはハンドバックも埋もれた大きな買物の包み。顔にはこすっからく光る眼のふちを黒く彩るマスカラ。ピンクの口紅。

ものほしげな若い男。しゃれた服装に有金残らずはたいて、安あがりな女の子をはって歩く。

赤鼻の酔いどれ。けばけばしい水商売の女。笑いさざめく家族連れ。生活に疲れた中年男の眼鏡を曇らす、白マスクの中のいきれ。

——あの男は死んでしまった……死んでしまった……

群衆。繁く交錯する脚の群れ。舗石のへこみに光る水たまり。勢いよくまたぎこして行く。

無感動に水たまりに踏みこみ、波紋を生む頑(かたく)な、孤独な歩行のハイヒール。急ぎもせず、浮きたちもせず、活発な人波に逆らう孤独な女の靴。

——裏切者。ろくでなし。やくざな卑劣漢。ちゃちな女たらし。

でも、もう死んでしまった。あたしの預金通帳の残高がゼロに近づいたと同時に、古いハンカチのようにあたしを捨てて、他の女に乗りかえた男。あたしの憎んだ男。でも、もう死んでしまった……あたしの憎しみが毒液になって、男の血管を腐らせたように。腐ったはらわたが現実化して、腐って死んだ。朽ち木のように。

もし、人の怨みで、他人を殺せるものなら、あたしがあの男を殺したのよ。

こんなにも、あたし、痩せてしまって、幽霊のよう。燃え尽きた残滓(ざんし)のようなあたし。そうだわ。あたし、あの男を焼き殺してしまったのよ。自分を燃やして、怨恨(えんこん)の炎で。

せめて、あの男にさよならをいおうか。いえない。とてもいえないわ。あたしの憎しみがまだ燃

えつづけているから。もう死んでしまったのに、あの男の肝を、緑の火で焼いている。あたし、こんなに痩せて醜くなってしまった。あの憎い男、あたしをこんなにしてしまって……

女は歩く。顔は白く死んで眼も虚ろ。その身体は、細く、耐えかねる高圧を負わされ、もろく灼け溶けそうな電線、いまにも崩折れそうな。乱れた長い髪はえりを這い、外套の尖った薄い肩にもだえている。

眼窩(がんか)の闇に、冷たい夜空の星々のようにネオンの光芒が流れ去る。

女の足がとまる。地下鉄の入口は、地下の暗闇にはりめぐらされた迷路に続く穴だ。

女は浮游物(ふゆうぶつ)のように流れこむ。見知らぬ夢の無縁の人々が肩をこづき背を押して女を呑みこみ、運んで行く。

女は、構内に満ちあふれる轟音を聞く。さながら身も世もない歯ぎしり、生きながら押し潰される者の凄まじい絶叫を聞く。もはやそれは地下鉄の車輌ではないようだ。滑り来る神の碾臼(ひきうす)だ。走り来り、走り去り、走り来り、走り去る。

女の蒼白な顔。その眼は、生あるものはなにひとつ映しださない。右往左往する人間たちは、女の瞳に操り人形として映っている。生命のない人形たち。

人形のひとつが女に近づく。薄汚い中年男。血走ってアルコールの靄(もや)に泳ぐ眼。すえた口臭。

——つきあわねえか、ねえちゃん……

女は答えない。中年男は狎(な)れなれしく女の身体に手をかける。浅ましいみだらな笑顔。

——淋しそうだな、ねえちゃん。おれがいいことしてやるからよ……

——むこうへ行って。

女の唇が動く。頼んでいるのではない、ただ、物を一方から他方へ移す動作を思わせる声音だ。

——な、行こうよ。ふたりでいいことしよう。

酔漢の執拗さで、男がくりかえしている。

——むこうへ行って。

女の唇から嫌悪(けんお)の声が出る。

——手をはなして。だれがあんたなんか……

——そうかい。

中年男は断念し、毒づく。

——お高くとまりやがって。どうせ、こっちが一生けんめいやったって、なんにも感じやしねえんだろうが。不感症の役立たずよ、きまってるさ。

——ほっといてよ。

——図星だろうが。え、不感症のねえちゃん。おツユもろくに出ねえんで、男にすてられやがったんだろう。ざまみやがれ、不感症。

女の顔がゆがんだ。屈辱のにがい涙が顔をよごした。中年男はニタニタ笑いながら、卑猥(ひわい)な手で女の腰を押した。

女は憎悪にわれを忘れた。

死ね。死んでしまうといい！

なにかが女の内部で音もなく変質した。女は凶暴な殺意の奔流に身をゆだねた。轟然(ごうぜん)とホームに車輛が滑りこんでくる。白熱の光の幕。きしむ車輪。滑り来る巨大な重量。凄まじい金属の咆哮(ほうこう)。中年男がよろめいた。背後から押してくる目に見えぬ手に抗しながら、背をかがめ、身をねじまげ、ぎくしゃくとホームの際へ、ホームのへりまで。中年男は反抗する。みずからの脚の裏切りと争う。信じがたい肉体の裏切り行為だ。男の口がぽっかり開いた。男の顔は恐怖にねじけ、ひきゆがみ、末期の声なき絶叫を放っていた。耳をつんざく警笛の悲鳴が、男の絶叫を、単なる顔にひらいた穴に変えてしまっていたのだ。

男は落ちた。ステッキみたいに硬直してもがきもせず。そこへ途方もない重量が滑りこみ、あっさり挽いてしまう。白い水蒸気が狂気のようにきしみあう車輪の下から舞いあがった。

女は叫んだ。秩序を一瞬にして喪失した凄まじい轟音の中、女の口がいつまでも叫び声をあげていた。すべてが色褪(あ)せてしまう、この瞬間に。

女の口はぽっかりあいていた。いまだに声なき叫びをあげているように、虚しい驚愕(きょうがく)と不信を形造っていた。膝上の掌の指は力のかぎり広げられ、必死の拒否をつづけていた。

暗黒の未知なるものへの恐怖と懊悩(おうのう)をこめて。

——死にました……

女の声はかぼそく戦(おのの)いた。

——しかし、それは……

医師がなだめる。

——それこそ単なる偶然ですよ。男は酔っていた。たまたまそこへ事故が起きた。それだけのことだ。あなたはその酔っぱらいに指一本ふれはしなかった……

——でも、あたしが殺したんです。あたしが酔いどれの死を望んだから……それが起きたんです。あのひとも——あたしを裏切った男も死にました。あたしが死を望んだから……

女の魂が恐怖に耐えきれず、うめき声をあげているのだった。

——偶然が重なっただけのことです。

医師はゆずらない。

——そうじゃないんです。本当のことなんです。

女は力なく抗議した。

——他にも死んだ人たちがいるんです。あたしがそう望んだために……

死んでしまう。みな死んでしまう。わたしが望むと人が死ぬ。犬も、鳥も、虫たちも、花も、木も。わたしは死を蒔(ま)いて行く。すべて生命のある者は、わたしの往く道往く道に、わたしのふり蒔く死に触れて、首うなだれ、膝をつき、崩折れる。

わたしは死の風、吹きすぎたあとは、瓦礫(がれき)の廃墟。

わたしは冬。すべてものみな死に行く季節。わたしの眼窩（がんか）にひそむのは死神。巨大な鎌をふるい、根こそぎ生命を切り倒して行く。

わたしは闇。虚無。虚空。

わたしはいつか、なにも知らないあなたのかたわらを通りすぎる。あなたが恋人と待ちあわせる、あなたの座るベンチのかたわらを。

街はみぞれまじりの氷雨（ひさめ）に濡れそぼっている。凍え死んだ灰色の街並。立ち並ぶ裸木の葬列。指揮者を失った交響楽団は、車群の警笛。行き交う人々は、傘に顔を隠す亡命者の群れ。

白くやつれた女の顔に、雨滴が無感動に伝い流れる。絶えざる恐怖に追われ、女はさまよいつづける。女は冬だ。その氷の溶ける未来はない。

女の世界は閉ざされた果てしない灰色の回廊。伴侶は吹き荒れる木枯しと永劫の夜。光あふれる生命の世界へは再び戻れない。

舗道にさまよいでた女を冷淡なクラクションで押しのけ、車が走りすぎる。ハンドルに片手をかけ、残る手を娘の肩にまわした若者。外界の冬を拒んで、彼らの世界は人工の春だ。荒涼たる女の顔は、無力な羨望にゆがむ。女が彼らの傲慢な無関心を憎むのはたやすい。

車の消え去る街角で、女の眼窩から解き放たれた死の矢が追いすがり、追いついた。空しくスリップした車のタイヤが宙にもがき、横あいから現われた丈高いトラックの巨大な重量と速度の下へ、あっけなく巻きこまれた。

金属の押し潰され、へしゆがむ凶暴な大音響の後は、蒔かれた死の静寂。

そのデパートの屋上へと、女は登る。この出口のない息詰る世界から逃れようとして。降りつもった雪は汚れ、見おろす下界は閉ざされた灰色。

女はコンクリの柵（さく）にもたれ、震え、うちひしがれた。メリーゴーランドも木馬も飛行塔もただ雪に埋もれ、身じろぎもしない。笑い声もざわめきも死に絶えて、逃れようのない女の荒野だ。

女は、凍てついたコンクリートに頰を押しつけた。痺れた無感動な顔をすじひいて、冷たいきらめきが落ちる。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。あたしにはわからない。人が死ぬ。あたしにはなんのかかわりもないはずなのに。なぜそれがあたしのせいなのか。

破壊するもの、虐殺するもの、それがあたしの十字架なのか。せめてものことなら、あたしを見ないで。あたしに声をかけないで。あたしを見捨ててしまってほしい。あたしなぞこの世に存在しないもののように。

女の色褪せた唇がぽっかりとあく。声は出ずに手があがり、それをふさぐ。死は多くを語らない。女の前には果てしない荒野の旅が待っている。

女はエレベーターの前に立っていた。黒い凶兆の鳥のように。手に手に買物包みを抱えた人々が、大烏（おおがらす）にも似た黒衣の女を横眼にちらと掠（かす）めて行く。おや、あれはなんだろう？　幽霊みたいな

気色の悪さ。雪女みたいにからっぽの顔。まるでエレベーターに乗るのがこわいといった様子で。まあどうでもいいさ。

露出過度の鈍い脳裡に、もう大鳥に似た女の姿は痕をもとどめず、小さな鋼鉄の檻に身を閉じこめて、明滅するインディケイターの光の点と化す。化粧ののりのいい可愛いエレベーター係の顔にみとれて、昇降する鉄の函に身をまかす。

快い照明とBGMとスピーカーにやわらかいアナウンスの女声。

黒衣の女は身じろぎもせず、不吉にたたずんでいる。

あたしがあなたを憎み、その死を望めばあなたは死ぬ。でも、憎まなかったら？　ただ思念しただけでも、あなたは死ぬだろうか？　もしそうだとしたら、あたしは人間ではない。人間の形をした死神だ。

もしそうでないとしたら、あたしはまだしも人間らしくいられる。憎悪や怨恨という人間のきずなで結ばれる。それでもあたしは人間でいたい。

女の虚ろな眼は、必死の祈りにも似て、わずかに生きかえった。

女は祈る。その異様な力の根源へと。

再びエレベーターの扉が開き、待ちかねた人波がどっと押し入り、扉が閉じられる。女の賭けた彼らは、輝く光の点と化した。女の大きくみひらかれた眼がそれを追う。光る数字が走りすぎる。はじめは緩やかに、しだいに加速して。女の身体が烈しくわななく。かたく折りまげられた指は雪のかたまり。ふくれあがった喉の血脈は苦悶する小さな鳥。電光のように閃めき移る光点はとどま

ることを知らない。異様な叫喚がはるか下方から舞いあがってくる。光る痙攣が突如終焉し、ものの潰れる無気味な大音響が、空虚な暗渠を突きぬける。

女の顔が虚ろになる。女の賭けは敗れた。女は殺戮する怪物、死神そのものであった。

医師は心の中で肩をすくめた。女の妄想はあまりにもとてつもなさすぎた。

——悪夢の中の出来事だ。

——悪夢だったらよかったのに。でも本当のことです。

女は椅子に、なおさらいじけ、ちぢこまっていた。

——大勢人が死にました。あたしのために……先生、たすけてください。もう我慢できません。あたしのうしろにいるんです。目には見えないけれど、なにか恐ろしいものが……たしかにこの背中のうしろにいるんです。いるんです！　あたしには感じられるんです！

——おちついて、さあさあ、おちついて。椅子にお座りなさい。わたしがついています。

医師の声音は、信頼を生じさせる確信にみちていた。

——たすけてくださいます？

女は医師にその眼でとりすがった。

——あなたは、恋人の死を望む願望と恋人の死が偶然重なったために、大きなショックを受けたのです。異常に鋭くなった神経が、とんでもない幻覚をつくりだした。つまり、あなたは幻想と現

実をとり違えてしまったわけです。

——幻覚ですって？　あたしが夢をみているとおっしゃるのですか？

女の顔が不信に硬ばった。医師への信頼に冷たい夕靄が降りた。

——やっぱり、あたしの頭がおかしいとお考えですのね？

——そんなことはありません。ただ、あなたの場合、夢と現実を混同してしまう傾向があるようですね。

医師はなだめかすような微笑を浮かべた。

——夢ですって？

女は信じがたいというようにくりかえした。

——その通りです。夢なんですよ。もし、それが信じられなかったら、いまここで、あなたの能力を試してごらんなさい。

医師は懐柔の調子を声に響かせた。

——いやいや、なにも恐れる必要はありません。試してごらんなさい。気が晴れればれしますよ。はじめはちょっとこわいかもしれないが、なにも起きやしません。わたしが保証します。

医師の回転椅子の脚に、居眠りに飽きた猫が身体をすりつけた。思わず医師の顔がほころびる。猫を抱きあげて、滑らかな毛並を愛撫した。

——たとえば、この猫ですが、これを相手に試してみたらいかがです？　しかし、本当にあなたが生物を念力で殺す能力の持主でも、この猫は九回殺さねばならないかもしれませんな。ほら、猫は九つの生命を持つというでしょう？

——できません。あたしにはできません！

女は老婆のようなしゃがれ声でいった。

——心配はいりませんよ。どうということはないのだから。

と、快活に医師。

——あたしに、そんなことをさせないでください。どうか、そんなこと……

女はまぎれもない恐怖と嫌悪に身体を震わせた。膝の上の指が小蛇の群れのようにうごめきはじめた。

——ほんとに、お願い……

女が弱々しく抗議する。

——元気を出して。さあ。

医師は身をかがめ、猫を床にはなした。猫は背を伸ばし、あくびした。

——やめて！　猫をどこかへ連れていって！

女の声は悲鳴にちかかった。

——お願い。やめて！　あたしに殺させないで！

女ははじかれたように椅子を立ち、恐れと苦悩にみちた顔を医師にむけた。

——夢ですよ。みんな想像力のつくりごとです。安心して忘れてしまいなさい。

医師が微笑しながらいう。

——ちがいます！　夢じゃないんです！

女の顔には、相反する二つの感情、激烈な恐怖の念と、医師に信じさせたい願望が争っていた。その顔がゆっくり変化した。異常に大きく眼がみひらかれ、口は更に大きく、悲鳴のかたちにひらいた。

——やめて！　あたしにそんなことさせないで！　あたし、先生にたすけてもらいにきたのに。もうおそい！　おそいわ！

絶望的な声だった。

医師は、女がみるみる骸骨のような顔になるのを見て愕然とした。

なにかが床で生じていた。

床に目をやった医師の顔が、耳の下まで色を失った。歯が咬みあって鳴った。

猫が四肢をぐんにゃり伸ばし、床に転がっていた。吐瀉物(としゃぶつ)をまきちらし、だらりと舌をはみださせた猫は笑い顔だった。

——死んだ……

——死んだ？

医師は呆然自失した不確かな声でささやいた。

女は刺すような小さい悲鳴をあげはじめた。眼には虚ろさにかわり、ガラスの破片のような冷たいきらめきがあった。

——あなたがむりにやらせたのよ。

女は告発した。

——あなたのせいだわ。あたし、やりたくなかったのに。ほんとにやりたくなかったのに。あなたのせい、あなたのせい、あなたのせい！

女は双手をさしあげて絶叫した。

——あたしじゃない！　あたしのせいじゃない！

女の死にもの狂いの糾弾は、震えながら、しだいに音階が高く吊りあがって行くヒステリックなサイレン。部屋中を震えおののかせ、空気を沈痛な罪科の思いでいっぱいにして行く。女の顔は、未知の夜の闇に脅える幼児の顔。ひらいた生々しい傷口はその眼と唇。死骸の猫はにやにやする笑い顔。

——あなたが殺したんだわ！

女が最後に叫んだ。責任回避とうしろめたさの大波が押し寄せた。女は悲鳴をあげて走りだした。かかとに恐ろしいものが追いすがっているような、あわてふためいた逃げかただった。ドアが大きくあおられて、バタン！　としまり、恐怖の逃走を劇的にした。廊下を連続する銃声のように、夢魔に追われる靴音が逃げ去って行った。背後には自然の溶岩の流れと大津波が押し迫り——しかし医師にはわかっていた。女を追うもの、ほかならぬ女自身なのだということが。

身体がだるく、気力が失せ、寒気がした。

医師はときおり襲う悪寒に慄えて、椅子に座りこんでいた。あけはなたれた窓から、遠慮なく冷たい外気が流れこむからだが、そのためばかりではなかった。

も・ち・ろ・ん……頭の中で、思惟が異様に悠長な調子で語っていた。

も・ち・ろ・ん・ネ・コ・は・ぐ・う・ぜ・ん・に・死・ん・だ・の・だ・あ・の・お・ん・なと・は・な・ん・の・か・ん・け・い・も・な・い・だ・が・そ・う・だ・ろ・う・か・ネ・コ・は・ど・こ・か・で・ひ・ろ・い・ぐ・い・で・も・し・て・ど・く・に・あ・た・っ・た・に・ち・が・い・な・い・だ・が・そ・う・だ・ろ・う・か・

思考の速度が極度に散漫になり、医師のまさぐる思考は、いたずらに灰色の舌をはみださせたにやにや顔の猫の死骸の周辺を低迷した。

胸のしこりの重みがあまりにも圧倒的に巨大になりすぎた。医師は疲れきっていた。

お・も・す・ぎ・る・お・も・い・の・け・て・く・れ・い・き・が・で・き・な・い・

医師は突然さとった。その重いしこりが、だれかの心の苦悩だということを。

手がかりのない岩肌をよじ登るような苦心をはらって、開放された窓の際へたどりついた。

この耐えられぬ重みを捨てるのだ。窓の外へ。医師は十五階下の地上へ眼を落とした。

いきなり医師は難題を解決した。それがあまり簡単なのでひどく気に入った。すばらしい考えだ。じきになにもかも忘れて、さっぱりしてしまうことだろう。このどうにもならぬ重いしこりを造作なく始末できるのだ。

医師の顔にだらけた頼りない願望が浮かんだ。医師は見降しつづけた。灰色の地表は遠く十五階下にあった。

「い・っ・ち・ま・え・!」

ゆっくり罵(ののし)って、医師は仕事にとりかかった。

看護婦がドアをあけて入ってきたとき、デスクのうしろに医師の姿はなかった。仕切戸続きの奥の間にも、どこにも。

ポニーテイルの看護婦は、書類を手に、当惑を表情にあらわし、あたりを見まわして、あけっぱなしの窓に眼をとめた。室内は冷えきって身震いが出るほどだった。

看護婦はきびきびと歩み寄り、窓をしめた。

世界樹（せかいじゅ）の高みに

田中　光二

1

あたしは、孤独を味わっていた。

すっぽりと透明な繭に包まれて、その歩道の上に座っているようなものだった。ひっきりなしに、おびただしい人々があたしの前を通りすぎてゆく。が、あたしと、あたしの前の毛布の上にひろげられたアクセサリーには、一顧も与えようとはしない。あたしは、透明人間も同様なのだった。

で、あたしも彼らを無視することにした。自分だけの瞑想にふけり始めたのだった。心を遊ばせることにかけて　あたしはベテランだ。ある意味ではそのために生きているといってもいいからだ。

どうせ、目の回るほど忙しい商いとなる筈はない。あたしが売っているのは、手作りのレザーや針金、簡単な彫金を使った金細工のアクセサリー類である。ペンダントや腕輪、ネックレス……値段は千円から五千円どまりといったところだ。

都心の盛り場では、最近よく見かける光景だったろう。現に、新宿東口の、三越前のこの歩道では、あたしを含めて三人が、肩を並べるようにして、「店」を出している。おたがいに他人同士だし、べつだん申し合わせたわけでもない。しかしあたしと同様、彼らも他人に干渉する気はないようだった。だまって品物をならべ、ひっそりとコンクリートの上に膝を抱えてうずくまっている。

夜の八時で、新宿ではまだ宵の口だった。平日（ウィークデイ）だったが、相変わらず人波はぶあつかった。無数

の足が、私の前を通過してゆく。群衆ということばほどどむなしいものはないような気がする。それは実体を伴わない。砕け散る波がしらのように、一瞬の形を見せてたちまち消えてゆくものなのだ。

あたしは、自分を押し包む繭が次第に不透明になってゆくのを感じながら、ぼんやりと夢想にふけっていた。自分が酩酊（トリップ）し始めるのを感じていた。どんな薬（アシッド）も必要なかった。ゆったりとうねってゆく、この巨大な夜の動きから、自分だけが取り残されているという、いくぶん自虐的な思いは、あたしを容易く酔わせた——現実から突き放された解放感覚がさるのだった。

ふっと、身ぶるいして、自分を取り戻した。コンクリートの舗道の上は冷える。ジーンズの上下にうすいセーターだけの恰好では、十分な武装とはいえなかった。

意識の焦点が合ったとたんに、目の前に立っている一対の足が見えた。ブーツをはいた足だった。コーデュロイのズボンをはいた脚をたどって、上体を見上げた。

まず私の目を惹きつけたのは、その何国人とも知れぬ顔だった。日本人ではないことはたしかなようだったが、かといって白人ともいい切れない。黒い髪に黒い目、陽に灼けた淡褐色の肌、彫りのふかい顔立ち……強いていえば、欧亜の血が微妙にないまざった、超民族的な容貌といえたろう。

しかし、その男の存在感を際立たせているのは、風采よりも、どことなく超然としている雰囲気にあった。周囲の雑踏のなかで、彼だけがしずかな湖水の水面のように、ひっそりとそこに取り残されていた。

彼が興味を示しているものが、並べられている細工類なのか、それともこのあたしなのかは分か

らない。何か思いがけぬものを目にしたとでもいうように、あたしと品物を等分に見下ろしていたのだ。

「――そんなに気に入った？」珍しく、あたしは自分から声をかけた。一種の焦れがそうさせたらしい。

「見るだけならお金は要らないわ。気のすむまで見ていって」

男は微笑した。胸にひどく温かいものがひろがるのをあたしは感じた。灯りがともされる瞬間に似た何かを、男の微笑は持っていた。

「……きれいですね」男はゆっくりと小腰をかがめた。

「こんなに愛らしいものを久しぶりに見た」

かすかにアクセントがぎごちないが、正確な日本語だった。正確ではあるが、まだ十分に使い慣れてはいないようである。

「みんな手づくりよ。そこに値打ちがあるわ」

「分かっています。――だからこうして見ているのです。この街の他のものは、私を息苦しくさせるばかりなのでね」

「これはどう？」針金の輪で編んだネックレスを指さしてあたしはいった。出来栄えが気に入っている品だった。

「あんたの奥さんにならきっと似合うわ」

「残念だが……」ゆっくりと男は首を横に振った。心なしか、微笑に翳りが加わっていた。

「私にはそんなものはいない」

「そう、残念ね」

私がそう答えたとき、ふいにあたりの空気が荒々しくかき乱された。怒号と悲鳴、通りがかりの人々が逃げ散るあわただしい靴音。あたしの脇に並んでいた二人の同業者の「店」が、ぱっと蹴散らされるのを横目にとらえた瞬間、その颶風の一部はあたしの前にも来ていた。

三人組の男だった。一目で地回りと分かった。むろん、こっちは「挨拶」などしていない。来るべきものが来たというべきだったかも知れない。商売というほどのものでもないので、見過されるだろうと高をくくっていたのだが、どうやら甘かったようだ。

三人とも若く、頭を角刈りにし、なぜか三つ揃いのスーツにハイネックのシャツといういでたちだった。鮫のような三白眼の目があたしを睨みすえた。

「ちょっと体を貸してもらいたいな、ねえちゃん」

あっという間もなく、引き立てられていた。品物が踏みにじられる涼しい音がしたが、どうしようもなかった。肱をつかまれ、体が浮かんだ。何がどうなったか分からぬうちに、路地に引っ張り込まれていた。あたしたちの回りには、決して侵されることのない空間が出来ていた。

「組に無断で商いをされちゃあ、俺たちが困るんだよ、ねえちゃん」男の一人が、しんねりといった。人間の声というより、不機嫌なけものが発する唸りに似ていた。

「おとしまえというやつを、つけてもらわなくちゃならねえな、これでは」

「虫も殺さねえ顔して、いい度胸だぜ」もう一人が、うれしそうにいった。ニンニク臭い口臭が、

その男から漂って来た。

三人目の男が、肱をつかんでいた手をあたしの肩から胸へ移動させようとしたとき、最初の地回りがあたしの後を見て、声を上げた。

「――なんだ、てめえは？」

あたしは振り返った。さきほどの男が、あたしたちの脇に立っていた。

「あなたがたは、彼女が作り出した美しい作品を破壊しました」彼はおだやかにいった。

「なぜ、そんな真似をしたのです？」

「何を寝言をいってやがる」

怒声とともに、第一の男がその問いに答えた――力いっぱい彼の下腹を蹴り上げたのだ。どうして彼が身をかわせたのか、あたしにもよく分からない。彼はほとんど身じろぎもせずそこに立っていたのに、蹴った男は体勢を崩して、勢いよくコンクリートに叩きつけられていた――まるで、目に見えぬ力に脚をすくわれたかのように。

「……！」

残った男たちは、短い罵声を上げて、彼を押しはさんだ。二人ともスーツの内懐に手を突っ込んでいた。ご多分にもれず、刃物とやらを用意しているらしい。

彼の姿勢は、べつだん変わらなかった。両手をだらりと垂らして、おだやかに立っているだけである。二人の地回りは、じりっと間合いをつめた。頭に血がのぼり、目の前が真っ赤になっているようだった。

そのとき、彼が溜息をもらしたのを、たしかにあたしは聞いたような気がする。ひどく悲しげなものに、それは聞こえた。続いて、意外な仕草を彼はした。目を閉じ、腕を組んで、祈るような姿勢をとったのである。あたしは、目を疑った。詰め寄ろうとした二人のやくざの体が、宙に浮いたような気がしたのだ。彼らの靴の踵が、わずか数センチだが、地面から離れているのを、次の瞬間はっきりと見た。それはわずか二、三秒しか続かなかった。棒を呑んだように硬直したまま、吊り下げられていた彼らの体から、呪縛はふいにとかれた。踵がコンクリートに当るかすかな音がした。が、数秒で十分だったのだ。彼らの顔は紙のように白くなっていた。そんなに怯えた人間の顔をあたしは見たことがなかった。説明のつかぬ不条理な力にぶち当ったことを、動物的な本能でさとったらしい。ようやく体を起こした最初の男を引きずり起こして、後じさりし、ついには体をひるがえして走り出した。

その姿が角に消えるのを見送って、あたしは振り返った。彼は、例のおだやかな微笑をたたえてあたしを見守っていた。

「怪我はありませんでしたか？」

「あんたは……」いいかけてあたしは絶句した。すべてが夢だったような気がした。事実、あたしの錯覚だったのだろう。あたしが見たと思ったようなことが現実に起こる筈はない。地回りたちはただ、彼のふしぎな威厳におびえて逃げ出したにすぎまい。

――人が集まって来ていた。警官が姿を現わすのも時間の問題だ。あたしには彼らと仲よくする趣味はなかった。とっさに、彼に声をかけていた。

「あたしと一緒に来ない？　ここにいては面倒なことになるかも知れないわ。——今のお礼もしたいし」

彼はゆっくりと頷いた。あたしは彼の手をとり、人垣を切り分けるようにして歩き出した。

2

自家用車やタクシーが気がふれたように飛ばしてゆく夜十一時の甲州街道を、あたしたちのおんぼろクラウンは、おとなしく路肩に引き下がって、ごとごとと走っていた。

コミューン会員が稼いだ金を出し合って、一年ほど前に買った共有財産だが、五年落ちの中古で、走行キロ数が積算計をひと廻りしてしまっているわりには、しっかり走ってくれる。十万の捨て値で買ったにしては拾いものだった。もっとも仲間の一人にメカに強い者がいるおかげでもあるが。

運転しているのは〝アパッチ〟で、あたしと彼はリア・シートに座っていた。〝アパッチ〟は、今晩が稼ぎの当番に当っており、あたしと一緒に新宿に出て来たのである。西口の公園の近くに車を置き、彼は馴染みのスナックのバーテンに、あたしはアクセサリー売りにと、それぞれ出撃したわけだ。

人混みにまぎれて逃げ出したあたしは、アパッチに会いに行き、早めに仕事をしまうことを提案した。〝彼〟を、新宿の埃っぽい喧騒の中に置いておくことに、なぜか耐えられないような気がしたからだ。

アパッチは、彼を見ても眉一つ動かさなかった。万やむをえぬ場合以外は口を利かない性質で、その鷹のように鋭く澄んだ目と、ものにたじろがぬ気性から、〝アパッチ〟という名をもらっているらしい。そんなに不愛想で、よくバーテンがつとまるものだと思うが、逆にそれが受けているらしい。

「——あたしはチコ」例によって端然と座っている彼にあたしは名乗った。

「さしつかえなかったら名前を教えて——いつまでもあんたじゃ困るもの」

「私はジョン・エナリー」彼はいった。

「分かっています。妙な名だとお思いでしょう」

「そうは思わないわ。でもどこから来たの？」

彼がひっそりと微笑する気配がした。

「真実をいっても、あなたは信じないでしょう。世界のどこからか来たとでも思って下さい。私は国籍を持たぬ人間です。日本にいるときは、日本人になり切るようにしているのです」

あなたって哲学者なのね、といいかけてのみこんだ。彼のくちぶりには、奇妙な説得力があった。たとえ、私は悪魔ですといわれても、信じる気になったかも知れない。

「では、世界のどこかから、この国に何しに来たの？」

「見て回ること、ただそれだけですよ」

「物見遊山というわけ？」

「そう思っていただいても、結構」

「ではあたしたちとしばらく一緒にいてもいいわけね。急がない旅なら」

「あなたがたが受け入れてくれるなら、よろこんで」
「もちろんよ。あたしたちは、あんたに借りが出来たのよ、エナリー」
「そんな風には思わないで下さい。私はただ、身を守っただけです――不本意ながら」
あたしはそれ以上、エナリーの身許を詮索するのを止めた。六人いるコミューンの仲間の前身を、たがいに知り尽しているわけでもない。ここにいるアパッチが過去に何をしていた人間なのかも、あたしは知らないのだ。今現在、おたがいにとってどんな人間でありうるかだけが重要なのだった。
――車は、府中市内で左折し、是政を通って多摩川をわたった。多摩ニュータウンの団地群の厖大なひろがりを右手に見て、多摩丘陵のひだの一つに分け入っていった。まだ、田園が色濃く残っているあたりである。
人家のあかりもごくまばらな、山気さえ感じられるような谷の奥に入ってゆく。うねうねとした狭い砂利道を、老いぼれクラウンは息を弾ませながら走った。やがて一面のススキ野原の向こうに、ぽつんとあかりが見えた。あたしたちの家だった。
ススキを掻き分けるようにして、近づいていった。ヘッドライトの光に、二階建の洋館がぼんやりと浮かび上がった。それが建てられた二十年ほど前は、さぞ見ばえのするモダンな建物だったろう。おそらく別荘として建てられたものにちがいない。今は見るかげもないが、作りがしっかりしているだけあって、あたしたちはけっこう快適にすまわせてもらっている。
むろん電気・水道も通じており、プロパンガスのそなえもあるから、日常の暮らしには事欠かない。

信じにくいことだが、この家は借家だったのだ。家主はとうに都心にすみつき、親が建てた大時代なこの家をもてあましていたらしい。土地はいずれ売るつもりで、家を遊ばせておくよりはと不動産屋に預けたらしい。コミューンの中で、日野市に住民登録をしている〝ジプシー〟の才覚で、首尾よく借りることが出来たという次第である。むろん、家賃は非現実的な値段だった。
最初にこの家を見つけ、その真価に気づいたのもジプシーだった。絵を画くのが彼の仕事であり趣味なので、手頃な空と丘の構図をみつけるべく、ある日このあたりをうろついていて、敷地に入り込み、ススキに混って、「庭」に茂っているものの正体に気づいた。去年の春のことであり、すべては偶然の所産だった。
それは、高さ一メートルから二メートルほどの草だった。葉は、三枚から九枚の小葉が集まって掌のような形になっており、鋸の歯のように鋭く切れ込んでいて、葉の先端は尖っている。緑色の茎は四角形で、浅い縦溝が通っており、まっすぐに立っている。そして草全体から、むせるような青くささが発散していた。
ジプシーには下地があった。だからこそ一目で、それがカンナビス・サティヴァの集落だということを見抜いたのだ。つまり、平たくいえば大麻草のことである。それが、野生のものか、それとも最初は栽培されていたものかは分からない。しかし、その数はおびただしいものだった。ジプシーの科白を引用すれば、次の瞬間、彼の目にはあたりが黄金の畑のように見えたという。
今の日本では、野生大麻は見つけられ次第撲滅されることになっている。なぜこの集落がそれまで発見をまぬがれていたかというと、ひとえにその地の利にあったにちがいない。多摩丘陵という

のは意外なほど奥ぶかいものだし、第一、植物にうとい人間の目には、ただの青くさい草むらとしか映りはしないのだ。

あたしたちはさっそくその家を借りた。前にいった通り、ジプシーがうまく立ち回ったもので、何の問題も生じなかった。あたしたちは、周囲（まわり）の住民の目を無用に惹（ひ）くことのないよう、ひっそりとその家にこもったのである。

いうまでもないが、大麻からは、ふつうマリファナと呼ばれている幻覚物質が採れる。新芽をつんで乾燥させたものを吸うのが、もっとも効果的だとされている。俗に〝枯れ草（グラス）〟と呼ばれているものだ。

日本では、終戦以来、つまりごく早い時期から、大麻取締法というのが制定され、産業用に生産されるもの以外はきびしく取り締られてきた。最近では、ヨーロッパやアメリカで、その解禁が論議されているが、有害とも無害とも今ひとつ決め手がないとされている。

もちろん、そんなことはあたしたちには、どうでもいいことだった。あたしたちは、〝グラス〟が、人間の精神にどんな影響を与えるかを知っていた。それは、体験してみることなしには、決して理解しえないものだった。そしてたとえ害があろうと――あたしにはそうは思えないが――、自分の責任においてそれを吸っているのだし、誰にも迷惑をかけてはいない筈なのだ。

あたしにいわせれば、幻覚物質（サイキデリックス）による〝旅（トリップ）〟への志向は、純粋に個人的な問題なのである。ふぐを味わう場合、どんなに腕のいい板前がいる店で食べても、中毒する危険はゼロとはいえないだろう。それでもかまわないという者は、自分の責任において、危険な食物を口にしているわけだし、

なぜマリファナだけがヒステリックに排斥されなければならないのだろうか。……

クラウンは、さびれかかった鉄の門柱の間を通りすぎ、前庭に入った。かつては芝地だったのだろうが、今は菜園になっている。そのふちに、おおざっぱにアパッチは車を駐（と）めた。外へ出て、あたしたちは家を見上げた。濃い闇を背景にほの白く浮かび上がったそれは、西洋のゴシックロマンでいうところの、〝呪われた家（ホーンテッド・ハウス）〟さながらだった。

「ホテルのように快適とはいえないでしょう」あたしはエナリーに囁いた。

「でも、ここには自由があるわ――それと、他人を傷つけること以外なら、どんなことでも許される暮らしがね」

「それこそが、本来の人間の暮らしかたですよ」エナリーは答えた。

3

あたしは、食堂の――ダイニングキッチンを、大人数用に改造したものだが――のテーブルの上に、最後の皿を並べおわり、破れかかったガラス窓の向こうの朝を眺めた。

低い、黄ばんだ丘の稜線の上に、朝陽がのぼり切ったところだった。秋の澄んだ陽光が早くもあたりいっぱいに漲（みなぎ）り始めている。今日は、外ですごすにはいい日になりそうである。

今朝、あたしは食事当番だった。それで、日の出とともに起きて、朝食をつくったのだった。メニューは、玄米を主とした粥（かゆ）、自家製のヨーグルト、ニンジンやリンゴ、それにハチミツを合わせ

た生ジュースである。生のニンニクも出してあった。あたしたちは、原則として菜食主義者なのだ。テーブルがととのったことをたしかめると、キッチンの脇に吊るしてある大きな鉄のトライアングルを鳴らした。アパッチが食事当番の要請にこたえて作ったものだった。

二階から、ぼつぼつと仲間が降りて来た。二階には、洋間が三つある。一つを四人の男たちが、一つを二人の女が寝室として使っていた。もう一つは予備であり、主として一対の男と女が、二人だけの話をしたい場合に使われていた。ベッドは、手造りのものが各室に頭数だけそなえつけられている。昨夜は、エナリーをその「神聖な」部屋へ泊めたのだった。

エナリーは、最後にゆっくりと姿を見せた。例の感情をあらわさぬおだやかな顔に、熟睡し切ったあとの澄んだ顔色をたたえていた。べつだん彼を気にかけるふうでもなく、みんなは席についた。エナリーも自然に空いた椅子に腰を下ろした。

「さて、みんな」仲間たちを見渡して、あたしはいった。

「彼はジョン・エナリー……あたしの客よ。いたいだけここにいてもらうわ。彼の食いぶちはあたしが稼ぐし、彼にも何か考えてもらうことにするわ」

仲間たちは、さりげなく彼に顔を向けた。

「こんちは」とマキがいい、「よう」とヒジリが声をかけた。が、残りの連中、アパッチ、ジプシー、そしてディランは黙って頷いて見せただけだった。

「よろしく」それだけいって、エナリーは微笑した。私はひそかに胸の緊張を解いた。どうやらエナリーは、仲間の好感をかちえたらしい。あるいは男たちは、アパッチから昨夜(ゆうべ)の顚末(てんまつ)を聞いてい

たのかも知れない。が一言も口に出そうとはしなかった。黙って受け入れる――それが彼らの承認のしるしであり、流儀なのだった。

あたしたちは、例の八つ岳山麓のコミューン、自由ヵ丘で知り合ったのだ。コミューンに加わった時期はむろんまちまちだったが、いつか気心の知れ切った間柄になっていた。

そしてマスコミにあおられて、奇妙なラッシュを呈し始めた自由ヵ丘に嫌気がさし、コミューンを抜けたのである。元来、コミューンの人口は適正な数を保つのがむずかしいものだ。ふえすぎれば経済に破綻を来たし、少なすぎれば、運営が成り立たなくなってしまう。

六人という数は、最小限(ミニマム)だったろう。いったんあたしたちは東京に戻(もど)り、どうにか冬場を切り抜けたあと、この恰好(かっこう)なすみかを見つけたのだった。

女は、あたしとマキの二人だけだが、あらゆる意味であたしたちはうまく行っている。共有の子どもを、まだ持てないのが残念なほどである。

とくにマキは、セックスに対しては底抜けの食欲を持っていた。早くも、あけすけな視線をエナリーに浴びせ始めた彼女を見て、あたしは心中おだやかならぬものを感じていた。前にもふれたように、エナリーはふしぎな魅惑をたたえた容貌の持ち主である。女にとってはあからさまな罠といえたろう。

マキは、早くもその罠にかかったようだった。ことによると――あたしは考えた、それはマキだけじゃないかも知れない。

「今日は、いい日になりそうだ」粥(かゆ)をていねいに噛みながら、ジプシーがぽつりといった。色が浅

黒く、トランプ占いの名手なので、そう呼ばれている。インドの聖者を思わせる蓬髪と長髯の持ち主だった。

「たまっていた大工仕事が片づく」ヒジリが呟いた。

「久しぶりにサウナでも仕立てるか」ジプシーはいった。

「だいぶ垢もたまったことだしな」

野外サウナの入りかたというのは、アメリカのヒッピーコミューンの在住者が書いた、野外生活のための手引き書から教わったのである。

その準備はほとんど半日仕事だったので、二人の男にそれをまかせ、残りの連中はそれぞれの仕事に取り組んだ。女たちは家の中を片づけ、菜園の手入れをし、男たちは家の外回りの傷んだ個所をつくろった。

エナリーはジプシーに誘われて、車に乗って出ていった。サウナに使う石を調達に出かけたのである。

サウナ係のヒジリは一人でくるくるとはたらいた。まず庭に、直径三メートル近いドームを作った。近くの竹藪から切り出して来た竹で骨組を作り、以前から用意してあった大きなビニールのシートでその上を覆った。シートの裾は完全に地中に埋め込まれている。

ドームの中心に穴を掘る。穴の回りにはやはりビニールシートを敷きつめた。それがすむと、近くに盛大な焚火を起こした。待つほどのこともなく、車が戻って来た。赤ん坊の頭ほどの石を、五

つ六つ手に入れていた。ジプシーの説明によれば、川向こうの造園会社の石置場にあったやつを「拾った」のだという。

エナリーは微笑を浮かべていた。石を盗むという行為を、彼が罪だと思っていないことはたしかだった——土くれと同じく、石は大地の皮膚の一部にすぎない。そのようなものを売り買いすること自体、滑稽だと感じていたのかも知れない。

その石を焚火に押し込み、二時間ほど強く熱し続けた。じゅうぶんに灼けたところで、火から出し、汚れを掻きおとして、例のドームの穴に置いた。いっぱいに水を張ったバケツやヤカンをドームの中に運んだ。

これで準備はととのったわけだ。あとは、裸になり、木の枝をめいめいに持って、ドームに入ればいいわけである。あたしたちは、さっそくそうした。エナリーも誘ったのだが、婉曲に断わられた。

「せっかくですが、他人に裸体を見せるのは、あまり好きではないのです」と、彼はいった。照れているのだろうと思い、それ以上は押さなかった。

男たちが先に飛び込んだあと、あたしとマキは微妙に競うようにして衣服を脱いだ。が、せっかくの努力も無駄だったようだ——かんじんのエナリーは、その場から去りこそはしなかったが、茫漠とした表情であたしたちの頭ごしに空を眺めていたからだ。

あたしたち全員がドームの中に入り、入口をぴっちり閉めてから、男たちが、バケツの水を灼けた石に浴びせかけた。弾けるような音とともに、すさまじい蒸気が立ちのぼった。熱気がドームにこもり、あたしたちの体もじわじわと汗に濡れて来た。

いつものことだが、子どものようにあたしたちははしゃいだ。たがいの垢をこすり合ったり、木の枝で肌を叩き合った。もっともアパッチは、あぐらを掻いて座ったまま、瞑想にふけっていた。それも、いつものことだった。この純粋な愉楽の時間、あたしはエナリーの存在さえ忘れていたようだ。

　体が火照ってどうしようもなくなると、外に跳び出して、庭に出してあったゴムホースの水を浴びた。――というより、じゃれ合いながらたがいに水をかけ合ったのだ。

　エナリーは、庭のポーチの端の椅子に腰を下ろして、膝を組んで頬杖をつき、あたしたちの狂態を眺めていた。彼なりにその光景を楽しんでいるようだった。たわむれる幼獣を見守る猫科のけもののの父親のような、包容力にみちたゆったりした表情が、その顔に浮かんでいるのをあたしは見たような気がしたのだった。

4

　こころよい疲労感にひたりながら、家に入って身づくろいをし、あたしはエナリーのところへ戻った。

「散歩につき合ってくれない？」あたしはいった。

「お日さまを楽しむのに、とっておきの場所があるのよ」

　エナリーは躊躇なく頷いて立ち上がった。あたしたちは、肩を並べて家の裏手へ回り、竹藪の間

の小径をのぼっていった。家の背後に盛り上がっている丘の頂きへ通ずるみちだった。

「面白そうにあたしたちを見ていたわね」

　あたしはちらりと振り返っていった。

「何と子どもじみた連中だと思ったんじゃない？」

「とんでもない、その逆です。私はとても感銘を受けたのです。あなたたちのように、天衣無縫にふるまえる人たちを、私は初めて見たような気がします。

　あなたたちは、本当に自由だ。なぜ他の人間たちは、その自由を自分のものにしようとしないのでしょうか？」

「住んでいる世界がちがうのよ。壁をへだてて、あたしたちは住んでいる。価値観という名の壁よ。その壁はたぶん、乗り越えて来るのは簡単だけど、二度と向こうには戻れない壁なんだわ。

　そしてあたしたちは絶対少数者よ。今の時代、その仲間入りをするためにはとほうもない勇気が要るわ。今の人間は、小魚の群れと変わらないわ。大きな石とか、海草みたいな、すぐに体を預けられるものがない場所には、棲めないのよ。そういうふうに、飼いならされてしまっているのよ――自分たちが作り出した文明というやつにね。

　自分の棲んでいる、がっちりと固定された、うすぐらい穴ぐらから這い出て来る勇気は、めったに持てないんだわ」

「なるほど、人類というやつには、自己閉鎖的な性向があるのですな」エナリーは独りごとのようにいった。

「自ら好んで狭い穴にこもりたがる。しかも宇宙へ進出しようというポテンシャルをもそなえている。何と矛盾した存在だ」
「こむずかしいことは分からないわ」あたしは答えた。
「でも彼らから見れば、あたしたちは突然変異（ミュータント）なのかも知れないわ。——精神構造が大きく異なっているタイプのね」
「しかし私は……」エナリーはいった。
「むしろそちらを、人間の主流と思いたいのです」
そこで目的地が見えて来たので、あたしはほっとした。抽象的議論というやつは苦手だったし、エナリーの妙に持って回ったようなものいいに、いささか気づまりを感じていたのだ。なぜ彼は、まるで人間を別な次元から観察しているかのようないいかたをするのだろう？　彼の単なる癖なのだろうか？
「——あの樹を見て」
あたしは、もうあたしたちをすっぽりその蔭（かげ）に取り込んでそびえている、ケヤキの大樹を指さした。そこはすでに丘の頂きだった。頂き全体はなだらかなススキの原になっているが、その一点だけは例外だった。たぶん樹齢は二百年を越えているだろう。なぜか独りで傲然（ごうぜん）と、それは文字どおり世界を睥睨（へいげい）するかのように立っていた。
あたしのお気に入りの樹だった。
節くれ立ち、いくつもの洞穴のような凹みをつくり出しているその根元へ、あたしたちは座った。そこからは、眺望がよく利いた。逆光に、うす紫いろに重なりながら続いている丘陵。遠く、工場とも何かの研究施設とも知れぬ建物のコンクリートの壁が、白く光っている。送電用の鉄塔の連なりが、空にとけ込むように淡く浮き上がっている。

「これを、世界樹とあたしは呼んでいるわ」目を閉じ、顔を仰向けて、頭上の葉むらからこぼれて来る光りの圧力を楽しみながら、あたしはいった。
「それはいい」エナリーは呟いた。
「ぴったりの名だ」
あたしは何も説明せず、彼は何も聞かなかった。しかしそれが、この樹の佇（たたず）まいをみごとにいいあらわしていることは、二人とも十分に承知していたのだった。
目を閉じたままその場に横たわり、しばらくの間黙った。あたしたちは風と光りの感触を楽しんだ。
「ジョン・エナリー……」やがてあたしは、さりげなく呼びかけた。
「やっぱり本当のことを知りたいわ。——あなたの生まれはいったいどこなの？」
「本当のこと、ですか」
エナリーの声には、そこはかとないためらいがあった。
「私の生まれが、もしこの地球（ほし）ではないといったらどうします？」
「……信じるわ」あたしは、歌うような声でいった。
「あんたが、それをあたしに信じさせたいのならね」

じっさい、今のあたしは、どんなことでも鵜呑みに出来るような気分になっていた——風と光りの囁きに、酔っていたのだ。
「私は、旅人です」
おちついた声に戻って、彼は続けた。
「旅をするために、この星へやって来たのです。人間の営みに同化し、内側から人間を律しているものを探り出すこと、それが目的でした。一種のレポーターだと思っていただけば、いいでしょう」
「そう……」あたしは答えた。妙に心が弾んでおり、うたい出したいような気分になっていた。
「それで、もう望みは果たしたの？」
「どうやら、八分通りはね。まだ私は旅を続けたいのですが、しかしどうも無理な気配になって来ました。私をけむたく思う人々が出て来たようなのです。……じつをいえば、現在すでに私は、彼らから身を守らねばならぬ状況にあるのです」
「それは無理ないわ。誰だって内幕をのぞかれるのは好きじゃない筈よ。人間社会全体にしてみたってそうよ。さっきもいったように、この世界は偽善と虚構、そして矛盾だらけなのよ。とうてい、他人さまに自慢出来る社会じゃないわ」
「残念ながら、それは一面の真実のようですね」エナリーの声には、悲しげな響きすらあった。
その声にふっと引き込まれた自分に気付き、あたしはあわてて呟いた。……まさかチコ、この人のいうことを頭から信じているわけではないでしょうね。彼はただ、比喩的にものをいっているだけなのよ。
そのとき、声が聞こえた。
「やっぱりここだったんだな、チコ」
体を起こした。ディランが、ギターを抱えて立っていた。彼は仲間の中でもいちばん若い。まだ二十歳を出ていないだろう。少年のような目と頰を持っていた。その呼び名の由来は、いうまでもなくアメリカのフォーク・ロックの教祖ボブ・ディランにとち狂っているからである。
「邪魔するぜ」
いわずもがなのことを呟いて、あたしたちの後ろに座った。手にしているギターはどう見ても高級品ではない。しかしよく手入れされ、しぶい艶をたたえていた。それは、彼の肉体の一部なのだ。
「吟遊詩人は、いつまでもどこでも歓迎されるものですよ」エナリーがいった。
ディランは鼻の下をぐいと指でこすり、やおらギターを鳴らし始めた。あたしの聴いたことのないイントロだった。新しい曲を披露するつもりのようだった。彼が聴衆を暗黙のうちに要求するのはいつでもそんなときである。
ギターは、世界樹の梢を吹き渡る風の音を思わせる、気まぐれだがさわやかなアルペジオを響かせ始めた。やがて、ディランのかすれたバリトンがそれに加わった。その若さで、すでに失われたものへの挽歌を、彼はうたっているのだった。人間のなかでもっともうつろいやすく、腐蝕しやすいもの——それは、この世界に対する憧憬だ。人間はしばしば絶望に思うさま食い荒されたあとの形骸のままで生きてゆかねばならない。彼は淡々と、事実をただ伝えるかのようにそのことをうた

っていた。

ギターが小さなオーケストラであるとは、いいふるされた文句だ。しかし彼とギターとは、生まれおちた瞬間から一緒だったかのように、分かちがたく呼吸していた。

彼の弾きがたりがおわったとき、あたしは小さな苦痛を感じた。飛翔する心の高みから現実へ引き戻される瞬間の苦痛だった。ディランは、ふたたび鼻の下をこすって、あたしたちを振り返った。エナリーが、短く、しかし力をこめて手を叩いた。それがあたしたちの讃辞のすべてだったが、ディランには十分だったろう。

彼はギターを草の上におき、ダンガリーのシャツの胸ポケットから、煙草の箱を取り出した。ありきたりのハイライトの箱。三本の煙草をていねいに抜き出した。

「久しぶりに、どうだい？」

「〝旅〟をするには、いい日ね」

私はその二本を受け取り、一本をエナリーの掌に乗せた。ふつうの紙巻き煙草に見えるが、むろんそうではない。中に詰まっているのは、カンナビス・サティヴァの新芽を乾かして刻んだものである。

「何です？」エナリーが訊いた。

「数え切れないほどの名を持っているものよ。でもふつうは〝グラス〟とか〝ジョイント〟と呼ばれているわ。あたしたちに、知覚の扉をひらいてくれるものよ」

「その草のことは、聞いたことがある。――つまり、幻覚物質の一種ですね」

「そう。……」あたしは、エナリーの口調を真似ていった。

「あんたのいう人類は、こんなすばらしい旅行手段も持っているのよ。どう、試してみる勇気がある？」

われ知らず挑むようなくちぶりになっていたようだ。エナリーは珍しく、はにかんだような微笑を見せた。少なくとも、とっさにあたしはそう思った。――しかしじつは、哀れみの表情だったのではなかろうか？

「いいでしょう」空を仰いで彼はいった。

「たしかに、今日は旅するにはいい日だ」

あたしたちは車座になり、グラスをくわえ、ディランが持っていたペーパーマッチで火をつけた。あたしは、エナリーに喫いかたを示して見せた。

「煙を逃がさず、腹に溜め込むように吸うのよ。そしてくつろいで待つ。――感覚が変化し始めたら、その流れに身をまかせるの」

エナリーは微笑で応えた。あきらかに彼は、この座興をたのしんでいるようである。しかしどこか余裕がありすぎるように見えたのは、あたしの錯覚だったろうか。……

あたし自身の流れは、意外に早くやってきた。ディランの歌が、すでにあたしを幸福な気分にさせていたためもある。〝いい旅〟をするためには、心が鎖されていては駄目なのだ。

ゆったりと腹式呼吸を繰り返す……ふいに、あたしを取り囲むすべての秩序が、一瞬狂ったようになった。それが、流れの前兆だった。光りとそして色彩が、音を立ててあたしを洗い尽しながら

流れ始めた。自分の内部から、もう一人の自分がするりと抜け出るのが感じられた。そのあたしは、世界樹の偉大な幹に沿って、宙へと舞い上がってゆく。

　世界樹。それは生々しい生命の量感となって、あたしを圧倒した。緑の葉々は幾百もの目であり、逞しい幹は、ゆったりと虹いろにうねる生きものの体軀だった。それはまさに豊饒な生命の象徴であり、世界そのものだった。太陽とたわむれつつ、耳をどよもすような讃歌をうたっていた。……

　あたしは、さらに上昇した。雲におおわれた、地球の青い地表が、みるまに下方へ沈み、球形となって迫り上がって来た。ひどく現実的な映像だった。かつて、そんな高みにまであたしは昇ったことはない。何かの力があたしを援けていることを、そのときおぼろげにさとったようである。

　気付くと、あたしは虚無の空間に浮かんでいた。なぜかそこが宇宙空間であるかを知っており、しかも恐怖はなかった。体験者の目で、あたしはそこから、宙に吊り下げられたように浮かぶ青く美しい星を眺めていたのだった。

　むろん、それは地球だ。おどろくほど小さくはかなげに見え、同時に胸が鳴るような愛しさがあたしを押し包んだ。奇蹟だ、とあたしは思った。虚空にたらされた一粒の青いしずく。そこに生命が芽生え、ひしめいている。愛をかわし、憎み合い、裏切り、絶望し、希望も忘れず、したたかに生きている。……

「見なさい」声が囁いた。意識ぜんたいに沁み込んで来るような声だった。「あれが、人間の母なる星だ。何ともちっぽけなものだろう？　しかし、孤独ではない。常に見守られている——生命についての偏見をもたぬ目にだ。知性というものの偉大さに、彼らがみずから気付く日が来るのを待

っているのだ。そのとき、人間の存在は飛躍する。存在の枠を、宇宙ぜんたいへとひろげることが出来るのだ。そのためには、人類がことさらに選ばれた存在ではないことを、自覚しなければならない……」

　自由。そのとき、あたしは自由ということの真の意味をさとったようである。あたしたちは、生きるがための様式を、あまりに固定化しすぎている。生存それ自体が、儀式化してしまっているのだ。それは、文明というものがもたらした一種の袋小路だ。そこから脱け出るみちを模索しなければならない。たとえばあたしたちの仲間は、そのために人類という種が無意識のうちに送り出した、一種の捨て石なのかも知れない。

　ゆるやかに、イメージは分解していった。すべてのパースペクティブが、秩序を取り戻そうとしていた。二つに引き裂かれた自我が、最初はゆるやかに、次第に急速に合わさってゆくのが感じられた。〝旅〟は、終わりに近づこうとしているのだった。

　——どれほど、〝旅〟の余韻の、ものうい恍惚にひたっていたのかは分からない。ふつう、酩酊から目覚めるときは、暗鬱な反動を味わうものである。ふしぎに今回はそれがなかった。誰かが、ていねいにあたしを支え下ろしてくれたかのようだった。

　ものうく頭を下げて、エナリーを見た。膝を抱えたままの姿勢で、あたしをおだやかにみつめていた。グラスを、彼が吸い切ったのかどうかは分からない。しかし彼の様子は、その前と全く変わっていないようだった。

「楽しい〝旅〟でしたか？」かすかに笑みをふくんでいった。

あたしは欠伸をし、目をしばたたいた。痺れるような、しかし不快ではない疲労感が身内にひろがっていた。

「ふしぎな、今までにない旅だったわ。宇宙まで、あたしは昇っていった。――いいえ、誰かが連れて行ってくれたみたいだったわ」

「それはよかった」こともなげにいった。

「きっとあなたの守護神のしわざでしょう」

「あんたはどうだったの、エナリー？」

「私にはどうやらグラスは利かないらしい……少し眠気を催しただけでした」

ほんとうなの、ジョン・エナリー。あたしは胸のうちで呟いた。あたしをあそこへみちびいたのは、あんただったような気がするけれど。

ディランを見下ろした。仰臥し、瞼を閉じたままだった。その瞼が、ときおり痙攣するように動いていた。まだ酩酊の途中にあるらしい。

「ちょっと気になることがあります」ディランをみつめながら、エナリーがいった。

「あなたがたは、ものにこだわらない精神を持っているようだ。しかし、彼はそうではない。彼の心の奥には、凝り固まった夢がある。それが、あなたたちに不幸をもたらしそうな気がしてならないのです」

「なぜ、そんなことが分かるの？」

エナリーはわずかに肩をすくめ、空を仰いだ。何かを拒絶するような姿勢だった。

「ただのカンですよ。私には、少々それが発達しているのです」

5

エナリーの予言は、おどろくべき早さで的中した。三日後、新宿へアクセサリー売りに出かけたディランが、そのまま戻らなくなってしまったのだった。

その日は、アパッチとディランとが、出稼ぎの当番に当っていた。アパッチは例によってバーテン勤めに、ディランは「露店」をひろげに出かけたのだった。あのときのあたしと同じ場所では、また揉めごとが起こるおそれがあったので、西口に河岸を変えるといっていた。

しかし夜の十二時の引き揚げ時間に、アパッチが西口に置いてあった車まで戻ったとき、彼の姿はなかった。二時間待っても、ついに現われなかったので、そのままアパッチは帰って来たのだった。

次の日になっても、彼は戻らなかった。たしかにあたしたちは、多かれ少なかれ、衝動的に蒸発してしまう癖を持っている。彼にも放浪癖があった。しかし今のあたしたちの暗黙の取り決めからいっても、一言の挨拶もなしに消えてしまうことは考えられなかった。

その日の午後になって、ディランとともに消えてしまったものを、ヒジリが発見した。ストックのマリファナ煙草。この春に収穫し、たくわえてあったもの全部だ。ヒジリは一本吸おうとして、収ってあった食堂の戸棚の奥から、それがきれいに消えているのを発見したのである。

たしかに、これは「不幸」だった。あたしたちの暮らしに、グラスは欠かせない。それは、三度の食事と同様に、生活の環にかっちりと組み込まれていたのだ。気は進まないが、ディランに足もとをすくわれたと考える他はなかった。彼はとつぜんここに嫌気がさし、行きがけの駄賃にごっそりグラスをさらっていったにちがいない。

当然、あたしたちは不機嫌になった。諍(いさか)いをすることすら珍しいあたしたちだったが、明らかな裏切り行為に平気でいられるほど達観してもいなかった。

エナリーの態度には、目立った変化はなかった。そんなあたしたちを、一歩距離を置くようにして、淡々とみつめていたようである。その彼を、マキは複雑な表情で見守っていた。（どうやらマキは、寝ようと彼に持ちかけて、やんわりと断わられたらしい。あたしはひそかに安堵していた。——なぜかあたしには、その種の誘いは彼には通用しないという気が、初めからしていたのである）

しかし、すべてがあたしたちの思いちがいだったということが、その日も暮れがたになって、明らかになった。

その日の三時すぎ、あたしはエナリーを伴なって、二キロほど離れた裏山へと出かけた。そこの山林に、野生と思われる栗林があることを、あらかじめ調べてあった。「家」の周辺数キロ四方の領域(テリトリー)は、定期的に歩き回ることによって、収穫に耐えるめぼしいものの当たりを、おおよそつけてあったのである。

むろん厳密にはその栗林には管理者がいたのかも知れない。しかしあたしたちにとっては、大地に落ちているものを拾うことが罪になるとは、どうしても考えられなかったのだ。

例によって散歩がてらだったので、ほんのご愛嬌ほどの収穫をおえ、引き上げにかかったときは、秋の短い陽が落ちかかっていた。あたしたちは、しかし別に焦るでもなく、家路を辿(たど)った。エナリーと二人だけですごす時間は、いつもあたしのよろこびだった。手ひとつ握りあったわけでもない。そのような触れ合いは必要なかった。あたしたちはもっと深いところで触れ合っており、その思いが、あたしを透きとおった浄福感で充たしていた。

家を見下ろす丘まで戻ったとき、あたりはとっぷりと暮れようとしていた。

「いそぎましょう」エナリーがいった。

「なぜ?」

エナリーの、めずらしくぶっきらぼうな声が聞こえた。

「そうした方がいいような気がするのです」

竹藪にはさまれた小径を下り始めた。なかばまで下ると、藪の切れ間ごしに、家を瞥見(べっけん)することが出来た。その場所にさしかかったとき、あたしは足を止めた。のぞいて見える家のたたずまいに何かしら奇妙なものがあったのだ。

目をこらしたとき、その理由(わけ)が分かった。車だった。前庭に、三台もの車が駐まっている。一台はあたしたちのクラウンだが、あとの二台は見慣れぬ大型のセダンで、たぶん外車と思われた。一秒ごとに濃くなる夕闇のなかで、なかに人影の見えないことを辛うじてたしかめた。

「たしかに、何かあったわ」あたしは呟いた。
「それも、よくないことが。あたしたちの知り合いなら、あんな悪趣味なものに乗って来はしない。それに、仲間以外に、歓迎するべき客もいないわ」
ほとんど小走りに、小径を駆け下りた。門を走りぬけ、庭に入った。一階には、灯りがついている。外からでは、家には変わった様子は見られなかった。
玄関のドアを、ぐいと押し開けて入った。そこまでは無心だった。入ったとたん、右の肱をわしづかみにされた。続いたエナリーも同様だった。二人の男が、ドアの脇であたしたちを待ち構えていたのだ。
黒いスーツに白いタートルネックのセーターという組み合わせの、動物的な精気を発散させている若い男——むろん見知らぬ顔だった。口臭を吹きつけるようにしていった。
「遅かったな。仲間がお待ちかねだぜ」
エナリーを振り返った。もう一人の、似たような若い男に腕をつかまれたまま、エナリーは頷いて見せた。状況を完全につかむまでは、何もしない肚づもりなのだろう。あたしは、肩の力を抜いた。
男たちは、あたしたちを乱暴に居間に引き立てた。居間は、食堂とつながっているひろい十二畳間だった。そこを、ふるい絨毯を敷きつめ、手づくりのロッキングチェアやクッションを置き、トリップパーティにふさわしいスペースにあたしたちは仕立ててあった。
そこに今、十人の人間がいた。マキ、ヒジリ、アパッチ、ジプシーの四人は、一列にならべら

た食堂の椅子に座らされていた。その後に、五人の男たちがいた。いずれも、重苦しくなるような何かを発散させている男たちだった。
「また逢えたな、ねえちゃん」端の一人がいった。その三白眼と、なめずるような口調に覚えがあった。エナリーとめぐり逢うきっかけになったあの晩のやくざだった。
あたしは返事をしなかった。彼らの前の絨毯の上に、ながながと仰向けに一人の男が伸びている。それが誰かをたしかめるのに神経を集中していたからだ。
「ディラン！」叫びながら、つかまれていた腕を振り払って、飛びついた。身なりは出ていった時のままだが、間近で見るディランの顔は、いささかひどいことになっていた。鼻が完全にひしゃげ、どすぐろい血で顎まで染まっている。右の目尻が切れ、青ぐろくこめかみまで腫れ上がっている。だらりと投げ出した右手の掌も異常だった。指のつけ根がふくれ上がり、褐色に変色していた。
「心配はいらん。やつは死んじゃいない。のびちまってるだけだ——運のいいことにな」
ざらついた声がいった。その声の主を、あたしは見上げた。男たちの中央にいる、恰幅のいい男だった。メタルフレームの眼鏡をかけ、スリーピースのスーツを着こなして、一見、大会社の幹部風情である。が、感情をのぞかせぬすわった目が、すべてを裏切っていた。数え切れぬほどの暴力に立ち会って来た目だった。
「いったい、彼に何をしたの！」立ち上がりながら、あたしは叫んだ。彼が、どうしようもないほどに震えていた。
「いたしかたなかったのだ——ここへ案内するのをいやがったものでな。片手の指をぜんぶへし折

ったら、ようやくその気になってくれた」

あたしは、狂気のように仲間たちを見渡した。

「なぜ、そんなひどいことを？」

「やつは、金がほしかったらしい。……」アパッチが、ぼそりといった。

「それでグラスを持ち出して、金に換えようとしたんだな。新宿の知り合いのフーテンに、ルートを探してくれと頼んだ。そのフーテンは、性質のよくないやつだった。ディランを、狼に売り渡しちまったんだよ」

なるほど、大麻煙草はたしかにかくれた需要があるから、うまく立ち回ればちょっとした金になる。しかしそんな危ない橋をわたってまで、ディランはなぜ金をほしがったのだろうか。

「マーチンのギターよ」あたしの心を見抜いたかのように、マキがいった。

「彼は、ギターだけには目がなかったわ。いつか店で見かけたマーチンに惚れぬいていたのよ。その熱が高じて、どうしようもなくなったんじゃない？」

あたしの内部で、すっと解けたものがあった。エナリーは、ディランの心の中に、凝り固まった何かがあるといった。その正体が、今分かったのだ。

しかしディランの夢はむざんな終結を迎えようとしている。マーチンが手に入らなくなったばかりか、二度とギターを弾けるかどうかさえも、怪しくなってしまったのだ。

「で、あたしたちをどうしようというの？」

「グラスが、あれだけだとは信じていないらしい」ジプシーが答えた。

「ディランにここを案内させたのもそのためだ。残っている分をそっくり出せというんだ」

「だって、そんなものありゃしないわ」あたしの声は、悲鳴に近かった。

「そこだな、問題は」幹部とおぼしい例の男がいった。

「俺たちは、まだものがあると睨んでいる。いったん食いついたら、骨までしゃぶるのが、俺たちの流儀でな。——また、それでなくちゃやっていけんのだ。

そこでだ、まだ白を切り続けるつもりなら、お前さんたちの体に訊くことになる。まず、男たちからだ。仲間にしてやったように、手の指を一本ずつ折って行くことになるな。

それでも駄目なら、次は女だ。女には別な方法を用意しなくちゃなるまい。うちの若い連中が気に入る方法だ。体が、雑巾みたいにボロボロになっちまうぜ」

男は、あたしたちの想像力がはたらきおえるまで、しばらく時間を置いた。

「分かったな。あまりうれしいことじゃあるまい。こっちだって手間はかけたくないんだ。さっさと吐いちゃもらえんかね？」

そのとき、エナリーの声が初めて響いた。あまり静かだったので、誰もが彼の存在を忘れていたのだった。

「それでは、結局、暴力があなたたちの言語なのですね？　いつでもほしいままに、それを使えると思っているのですね？

そのかたちでしか、他人とつながることが出来ないのですか？　それはコミュニケーションとしてはもっとも稚拙で退廃的なものだ。

人間の知性が築き上げて来たすべてを、ぶちこわしてしまうものだということに、なぜ気付かないのです？」

男は、顔をしかめた。

「何をごたくを並べている。いったい手前は何だ？」

「兄貴、気をつけた方がいい」あたしたちとは馴染みのやくざが、くちごもりながらいった。

「やつには、えたいの知れないところがありますぜ」

エナリーは、ディランに目をやり静かに続けた。ぞっとするくらい、静かな声だった。

「あなたは、彼からギターを弾く指を奪った。それは犯罪です。人類ぜんたいから見れば、わずかなものかも知れないが、紛れもなく貴重なものを奪ったのです。どうやって、それをつぐなうつもりです？」

「やかましい」男は顎をしゃくった。

エナリーを抑えていた男が、懐から刃物を抜き出すのが見えた。マキが悲鳴を上げた。が、あたしは上げるひまもなかった。その一瞬の出来事に、凍りついてしまったからだ。

刃物を抜き出した男の手は、宙でぴたりと止まった。木の枝が折れるような、鋭い音がした。男の手首がありえない角度に自分から折れ曲がるのが見え、刃物は下にころがった。けものじみた叫びを上げ、男は手首をかかえて床をのた打ち回り始めた。――その間、エナリーは微動もしていなかった。

「この星の砂漠地方で生まれた掟を、私は耳にしています。目には目を――あなたもまた、自分が

他人にもたらした苦痛を味わうべきです」

エナリーの声にみちびかれたように、幹部の男は呻き声を発した。今では、あたしたちすべてが凍りついていた。男は、のろのろと、自分の右手で、左手の指を握ったのだ。額に、みるまに脂汗がにじむのが見えた。

男は必死に、もう一つの意志と戦っていた。が、無駄だった。握られた指が、逆向に直角以上に折り曲げられて行った。その自分の左手の確実な動きを、どうしても止めることが出来ないのだった。

再び、にぶく、そして鋭い音がした。男はぎりぎりと歯を噛み鳴らして、その場にうずくまった。

「出て行きなさい」エナリーがおだやかにいった。

「そして苦痛が続く間、私のメッセージについて考えてもらいたい」

6

「もう一度訊くわ」あたしは、車の助手席から、顔を突き出していった。

「どうしても、一緒に来てはくれないの？」

車を見送るように、数歩離れて立っていたエナリーは、動こうともせず微笑した。

「私は自分に課したルールを破ってしまいました。〝力〟を発揮しないこと、どうやら、あなたたちが好きになりすぎました。そのために感情に走ってしまったのです。

今が、お別れすべきときでしょう」
「誰も信じやしないわ。昨夜（ゆうべ）の出来事なんか」あたしは叫んだ。
「それを心配しているのなら……」
「それだけではありません。私には仕事があるのです。
――もう、行ったほうがいい。彼を医者に見せるのは、早い方がいいでしょう」
あたしたちは、ここを引き払うつもりだった。あたしたちもまた、ここに根を下ろしすぎたのかも知れなかった。ディランの手当がすみ次第、気に入った新たなすみかを求めて、車の放浪の旅に出ることに決めたのである。むろん、エナリーも強引すぎるほどに誘ったのだが、頑として諾（き）こうとはしなかった。彼は彼で、ここから去るというのである。
「――分かったわ」あたしは、吐息をついた。もういうべき言葉もなかった。
アパッチが別れの挨拶がわりに短くホーンを鳴らし、ギアをローに入れた。その瞬間、あたしは再び窓から首を突き出し、叫んでいた。
「もう一ついうことがあったわ、エナリー。あんたが、他の世界から来た人間かどうかは知らない。
――でも一つだけはっきりしていることがあるわ。あんたは誰よりも、この星の、本来の人間らしいということよ」
「……」
エナリーは、微笑したまま手を振って見せた。車は走り出した。エナリーと「家」の姿が、ススキの穂波にかくれて見えなくなるまで、あたしは前を見ようとはしなかった。

レモンのような二人

筒井　康隆

スナック「反体制」には、常に若さと喧噪があった。よくはやっているスナックは、たいていそうなのだが、この「反体制」は特にそうだった。

ゴーゴーを踊りまくって、のどがからからになった淳と楊子は、カウンターへ戻ってまた一本コーラを飲んだ。

コーラを飲むのはこれで四度めだった。飲めば元気が出て踊り、踊ればまたのどがかわき、飲めばまた汗が出てまたのどがかわいた。ふたりで合計八本のコーラを飲んだことになる。しかもゴーゴー・スナックのコーラは高かった。

楊子はときどき、不思議に思うことがある。淳の実家は、決して金持ちではなく、淳自身も汚い四畳半に住んでいるのだ。その彼の下宿へ行ったことはまだ一度もないが、彼自身がそう楊子にいったのだから、きっとほんとなのだろう。もっとも楊子は、そうした飾りけのない淳が好きになって、だからつきあっているのだ。

そんな淳なのに、彼はまだ一度も楊子に金を出させたことがない。いつも彼が払うのだ。淳は大学生で、小遣いがそんなにあるわけはない。アルバイトをしている様子もなかった。

いちど、淳と楊子は、行きあたりばったりに入ったスナックで、四千六百円などというとんでもない請求書をつきつけられたことがある。その時も淳は、平気で支払った。

こういう時、たとえ月一万五千円、二万円という小遣いを貰っている男の子でも、たいていはブルーになってしまい、ガール・フレンドまで憂鬱な気分にさせてしまうのだが、淳の態度はぜんぜん、ふだんと変わらなかった。

きっとわたしを、本気で愛してくれているのだわ、と、楊子は思う。

楊子を愛しているからこそ、彼女とのデートの際には、貯めた小遣いをぜんぶ持ってくるのであろうし、たくさん使いこんでも平気なのであろう。そう思い、そしてそう思うことを楊子は、自分のうぬぼれでは絶対にないと思っていたのである。

「おいしかったなああ」ひと息にのみほしてしまい、グラスを白いデコラのカウンターに音高くおき、楊子は感謝の眼で淳を見た。

「ほんとだなああ」淳もそういって、笑いながらうなずき返した。

だからわたしも、この子を熱烈に愛してあげなくちゃ、と、楊子は思うのだ。

もっとも淳の方は、そんなに熱烈に楊子を愛しているといった様子を見せたことは、あまり、ない。彼は彼女に対して常にアッサリした態度をクズしませんデシタ——淳と別れたあと、いつも楊子はそう思うのだった。

「さ、もいちど踊ろう」と、淳がいった。

「うん」

若者たちの踊りの渦の中へ、ふたりはまたとびこんでいった。

透明オレンジのアクリル・ドアを押して、また、若者の一団が入ってきた。靴やアクセサリーか

ら見て、彼らが金持ちの家の連中であることは、すぐわかった。男ふたり、女三人のグループだった。彼らは店の隅の、いちばん場所のいいボックスを占領して騒ぎはじめた。

若者たちの集まる店は、常に一定ではなかった。感じのいい店、新しい店を求め、彼らは二、三週間おきに店を変えた。いつも移動し続けていた。特に、流行を追う尖鋭的な一団は、尚さらそうだった。その尖鋭的な一団は、金持ちの家庭の連中ばかりとは決っていなかった。淳や楊子のように、金のない連中でさえ尖鋭的になることができた。つまり、金のある連中も、金のない連中も、同様に楽しむことができるような店でないと、その店は尖鋭的ではなかったのである。

楊子の家は裕福ではなかった。彼女は渋谷にあるアクセサリーの店に勤めていたが、給料の半分を家計の足しにしなければならなかった。それでも彼女は、青春を謳歌していた。若さを楽しんでいた。

向きあって踊っていた淳が、例の一団にむかって笑いかけ、手をあげた。誰と合図しあったのか、楊子にはわかっていた。グループの、三人の女の子のうち、いちばん美しい、志麻子（しまこ）に笑いかけたのだ。

とたんに、楊子は不機嫌になった。踊りをやめ、フロアーに佇立した。

「どうしたんだ」淳が、少しどぎまぎした様子で訊ねた。

「このお店、出ましょう」なかば命令するように、楊子はいった。

「どうして」

「ちょっと、話があるの」

「ここじゃ、できないのかい」

楊子はかたくなに、かぶりを振った。「ええ。できないのよ」

楊子の、そんな態度は、淳がはじめて見るものだった。彼はしかたなく、軽くうなずいた。「よし。じゃロッキーへ行こう」

ロッキーというのは反体制から数軒はなれた喫茶店である。

「ちょっと、待っててくれ」支払いを済ませてから、淳は楊子を出口の傍らに待たせ、隅のボックスへ行き、例の一団とふたこと、みこと何か話し、笑いあい、また戻ってきた。

淳は、皆に人気があった。

どうして、金持ちから人気を集めることができるのかしらと思い、楊子は少し不思議だった。もちろん彼女にしても、連中と話しあうことはあったし、連中も、わけへだてなく話してくれた。しかし何故か、気を許せないものがあった。彼女にそういった身構えがあることを敏感に感じとるのだろうか。連中も彼女と深くつきあおうとはしなかったのである。

スナックを出ると、大通りには小雨が降り、行きかう車のヘッドライトの光芒の中に銀の糸が走っていた。淳と楊子は背を丸め、小走りにロッキーへ向かった。

ロッキーは空いていた。白一色で店内を統一してあるため、寒ざむとした感じだった。夏の間は、むろんこの方が涼しげでいいわけである。ふたりは白いエア・アーンのスクリーンの陰の席に腰をおろし、向きあった。

「この前、志麻子と話したんでしょ」楊子は淳がウェイトレスにコーヒーを注文するなり、テーブ

ルに身をのり出していった。「志麻子に聞いたわ」

「話したのか」彼は微笑した。

「電話でね。彼女の電話番号、知ってたのよ」楊子は背すじをのばした。

「この前のデートの時だ」淳が喋り出した。「君がなかなかこなかったから、ちょうど、ひとりきりだった志麻子に声をかけた。ふたりだけで、二十分ほど話したかな。そのうちに、彼女の友達が――さっきいた、あの連中がやってきた。君がきたのはそれからすぐあとだ」彼は、なじるようにいった。

「志麻子と話したこと、あなたはわたしにいわなかったわね」と、楊子はなじった。

淳はじっと、楊子を見つめた。

「あの日、志麻子は、踊りながらわたしに耳うちしたのよ。さっき、淳と話したわよって、だからわたし、あなたと別れてから彼女に電話したの」

楊子がそこまで喋った時、ウェイトレスがコーヒーを持ってきた。楊子はしばらく黙った。やがて、彼女はいった。

「あなたは、志麻子にいったんですってね。自分のことを。あなたのお父さんが、浜松の材木問屋の社長だって。そして、あなたは原宿のマンションにいるって。それからあなたは、シボレーも持っているんだって。そして」楊子はくすくす笑った。「あなた、志麻子に、いちど自分のマンションへ遊びにこいっていったんですってね」

淳は、じっと彼女を眺め続けていたが、やがて吐息とともに腕組みした。「おれが志麻子に喋ったこと、君はぜんぶ聞いてしまったんだな」

「ぜんぶ聞いちゃったわ」楊子はうなずいた。「ぜんぶ聞いちゃった」

「それで、君はどういったの」淳が気味の悪いほど静かに訊ねた。楊子は、訊ね返した。

「あなた、ほんとに志麻子を、あなたの下宿へつれて行くつもりなの。あなたがわたしに話した、四畳半の下宿っていうのが、マンションなの」

淳は黙っていた。

彼が答えないので、楊子はいった。「わたし、志麻子に、淳はあなたを自分のマンションへつれて行く気など、ぜんぜんないわっていってやったの。ううん、つれて行きたくても、つれて行けないわって、そういってやったの」

「そしたら」

「そしたら志麻子が、なぜって聞き返したわ」

「それで」

「それで、ほんとのこと、彼女に教えてやったわ。淳の住んでるところは、四畳半の下宿だって。シボレーなんか、持っていないって。それから、淳のお父さんは浜松の材木問屋の社長なんかじゃないって」

「そしたら、志麻子どういってた」

「びっくりしてたわ。信じられないって。どうしてそんな、うそをついたのかしらって。ねえ。どうしてそんなうそをついたの」

しばらく考えこんでいた淳は、やがてゆっくりと顔をあげ、楊子を見つめながらいった。「君はまさか、ぼくを独占する気でいるんじゃないだろうね」
「わたしは、あなたがどうしてそんなうそをついたのか、知りたいのよ」楊子はかまわずに、さらにそう訊ねた。「だってあなたは、志麻子よりわたしの方が好きなんでしょ」
「そうだよ」
「だったら、なぜ志麻子から気に入られようとしてそんなうそをついたの。そしてわたしには本当のことをいうの」
「君の方が好きだからだよ」
「信じられないわ」楊子が、かぶりを振った。
「どうしてだい。志麻子より君の方が好きなんだぜ」
「それは信じるわ。わたしが信じられないのは、あなたが好きでもない女の子から、どうして気に入られようとして、そんなうそをついたのかってこと」楊子は淳を凝視して、さらにいった。「だってあなたは、好きでもない女の子から気に入られようとして、そんなうそをつくような人じゃないんだもの。そうでしょ」
「その通りだよ」彼はうなずいた。「その通りだ」
「わたしは、それだけ深くあなたを知りたいの。つまりそれだけあなたを愛してるの」楊子は、なんとか理解してほしいと思う気持ちをけんめいに瞳にこめ、淳を見つめた。「あなたを愛してるの」

「そんなに、ぼくの中身を深く知りたいかい」と、淳はいった。「ぼくの内部へ、深く入ってきてしまうことになるんだぜ」
「迷惑かしら。どんなにあなたがわたしを好きでも、自分の心の秘密だけは誰にも見せないつもりなの」
「最近は、誰でもそうらしいよ」彼は軽くそういって、コーヒーを飲みほした。「でも、君次第だ。君がどうしても知りたいっていうのなら、見せてあげてもいい。もちろん、そうなると君も、ぼくのことについて責任が出てくるわけだが、それでもいいのかい」
「そんな責任なら、いくらでも」楊子は嬉しそうに叫んだ。「あなたを知るためなら」
淳はうなずき、立ちあがった。「じゃあ、行こう」
「どこへ」あわてて飲み残したコーヒーを口へ流しこみながら、楊子は訊ねた。
「ぼくの下宿だ。ここじゃだめだ」
「下宿へ」
「そうだ。ぼくをよく知りたいって、いったじゃないか」
楊子はためらった。四畳半の下宿へ、しかも男の子の下宿へ、若い娘がたったひとりでついていくことには不安を感じた。だが、相手の男の子というのが、他の誰でもない淳なのだからと思うことによって、不安を押さえつけようとした。
「じゃ、行くわ」思いきって楊子はそう答え、立ちあがった。
ロッキーを出ると、小雨はやんでいた。

ふたりは濡れた歩道を、黙って歩いた。いつもなら、地下鉄の駅のある方角へいっしょに歩き出すのだが、今日は逆の方向へ歩いた。どんな下宿だろう――楊子は歩きながら、淳の部屋を想像しようとした。

勉強家だから、むずかしい本がぎっしり置いてあるのかしら。それとも、本などはあまりなくて、ふとんが敷きっぱなしになっていて、下着などが抛り出してあって、ギターとかウクレレみたいなものが片隅にころがっているのかしら。弟が下宿しているので、男のひとり住まいがどんなものか、楊子にもある程度の想像はつくのだ。

その四畳半で、彼がだしぬけに襲いかかってくるようなことはないかしら、と楊子はまた思った。からだを奪われたら、どうしよう。わたしは、淳のそんなものを知りたいんじゃないけれど……でも、そうなればそうなったで、かまわないわ。責任をとれといったのは、その意味でいったのかしら。まさか……。

「こっちだ」並んで歩いていた淳が、楊子の手を握り、ビルの裏口へ引っぱっていった。

「どこへ行くの」楊子はおどろいた。

「だまって、ついてくりゃいいんだよ」投げやりな、いささか荒っぽい口調だった。

彼がそんな口のききかたを楊子に向かってしたのははじめてだった。楊子は少し恐ろしくなったが、黙って彼に続いた。

ふたりは、ビルの裏口から、地下への細い階段を降りた。そこは、だだっ広い地下駐車場だった。置いてある車の数は少なかったが、その車の中でいちばん目立つ新車の前で、淳は立ちどまり、ポケットから鍵を出し、運転席のドアを開いた。

「こ、これ、あなたの車」楊子は眼を丸くして淳に訊ねた。

ブルーのシボレー・カプリス。フロント・グリルが前面に広がり、エンジンはV型8気筒5360CC、ふつうの大学生には持てない車だ。

淳はむっつりしたまま、助手席のドアをあけた。「さあ。乗れよ」

楊子はおそるおそる乗りこんだ。何もかも信じられない気持ちだった。淳が、車を運転できるとは思っていなかったのだ。

だが淳は、なれた手つきで運転し、車を駐車場から出した。

楊子は、助手席に腰をおろしたまま黙っていた。何を訊ねても淳が返事をしてくれないだろうと思ったからである。

淳は車を、原宿に向けてとばしはじめた。運転はうまかった。

淳がぽつりといった。「A級ライセンスを持っている」

楊子はあっけにとられて、口がきけなかった。

表参道に面した高級マンションのビルの駐車場に車を入れ、ふたりはエレベーターで最上階へ昇った。このマンションに淳が住んでいるらしいことを、楊子はもはや、疑っていなかった。

いちばん奥の部屋まで、ふかふかのカーペットを敷きつめた廊下を歩いた。部屋のドアを、淳は軽くノックした。

「誰がいるの」楊子は泣きそうな顔で尻込みした。「中に誰かいるのね。誰なの」

「君のよく知っている連中さ」
ドアを内側から開いたのは志麻子だった。
「おかえり。わたしたちの方が早かったわね」彼女は淳に、部屋の鍵を渡した。「はい。これ、返すわ」
室内には、スカンクの毛皮のカーペットが敷かれ大きなソファ、ステレオ、カラーテレビなどが置かれている。天井からは小型のシャンデリアさえ下がっていた。そしてそこには、志麻子たちの、男二人、女三人のグループが先に来て、ふたりを待っていたのである。
楊子は泣きそうな顔をして、しばらく部屋の片隅に佇んでいた。彼女のそんな様子を、淳、志麻子、そして他の全員が同情するような眼つきで、だが唇の端には、あきらかに軽蔑の笑いを浮かべて、じっと眺め続けた。
やがて、楊子はかすれた声でいった。「わたしが驚くのを見て、楽しむつもりだったのね。はじめから、そうだったのね」
「そうじゃない」と、淳がゆっくりかぶりを振った。
「だって、そうに決まっているわ」楊子はとうとう泣き出した。「わたしをだまして……皆で示しあわせてわたしをだまして、ほんとのことを知ったわたしがはずかしがるのを面白がって見ようとしたのよ。わたしは、おもちゃにされたんだわ。なぐさみものにされたんだわ……」彼女は涙にうるむ眼をけんめいに見開き、全員をぐっと睨みかえしながら、吐き捨てるようにいった。「お金持ちの、お道楽の為にね」

「ちがうよう」ソファに寝そべっていた若者が、やりきれないという口調で叫んだ。「いやんなっちゃうなあ。そんなんじゃないんだがなあ」
「だから、およしなさいっていったでしょう」志麻子が、淳にいった。「こんなことしたら、悪く思われるだけだって……」
「いいや」淳はきっぱりと、かぶりを振った。「この子は、話せばきっと、わかってくれるよ」
「わからねえと思うがなあ」と、もうひとりの、カーペットの上であぐらをかいていた若者が、投げやりにいった。
「そうよ。わかるわけがないわ」楊子はそう叫び、ドアの方へ戻ろうとした。「わたし、帰る」
「待て。帰っちゃいけない」淳がドアにとびつき、楊子に向きなおった。「このまま帰っちゃいけない。わかってほしいんだ。君はぼくを深く知りたいっていったんじゃなかったのか」
「知りすぎるほど知ったわよ、もう。あなたと、それからあなたの仲間の、腐った金持ち根性をね」
「まだ、そんなことをいっている」淳ははげしくかぶりを振った。「金持ちなんてことは、関係ないんだ。君が気にしてるだけなんだ」
「気にするの、あたりまえでしょ」楊子はばらばら涙を落としながら叫んだ。「これ以上、侮辱しないで」
「いえばいうほど、悪くなるわ」志麻子が絶望的に嘆息した。
「気にすることは、わかっていた」淳は楊子の両肩に掌をおき、彼女の眼をのぞきこんだ。「だか

ら最初、黙ってたんだ。時間が経ち、君がぼくを信じるようになってから話すつもりだった。だが、今日の君の口ぶりでは、とてもぼくの言うことを信じそうになかった。だから直接、ここへつれてきたんだ。見れば信じるだろうと思ってね」

「あたりまえよ。信じるわよ。だから、どうだっていうの」

「ぼくたちの仲間に加わってほしい」淳は全員をぐるりと顎で指した。「ぼくは最初から、君に、ぼくたちのグループへ加わってほしかったんだ。でも、最初からそういえば、君はきっと、いやだというにちがいなかったんだ」

「今となっては、尚さらいやだわ」

「君は早合点している」

「していないわ。仲間に入れてくださるっていうのは光栄だけど、わたしは最初から淳とだけつきあうつもりだったんですからね。そして今はもう、あなたともお別れよ。もう絶交だわ」

「ふたりだけの恋びと同士なんて、あんなもの、もう古くさいのよ」と、志麻子がいった。

「なんですって」楊子は眼を丸くした。「じゃあ、あなたたちは、グループで……」

「そうよ」志麻子はうなずいた。「一対一の恋愛なんて、自分さえよければいいっていうエゴイズムを、ほんの少し広げただけのもので、カッコ悪くて、封建的よ。そしてそれがマイホーム主義につながってくるのよ。ふたりだけで、お互いにべたべた褒めあって、自分たちだけで満足してるなんて最低。だから片方が浮気したりすると、かっとなって、たちまち憎しみのかたまりになって、相手を殺したりするでしょ。ふたりだけの世界だなんていうけど、あんなもの地獄よ。アンチ・ヒ

ューマニズムの極致よ」

眼を輝やかせ、急に情熱的に喋り出した志麻子を、楊子は茫然として眺め続けた。

「ほんとうの世界中の人間が愛しあわなきゃいけないんだけど、それは理想に近いわけだから、わたしたちのグループだけで愛しあってるのよ」

「それじゃ……あの……愛しあうというのは……」楊子は息をのんだ。「グループ・セックス」

「そうだよ」ソファの若者が、立ちあがって楊子の方へゆっくりと歩き出しながらいった。「全員が、全員を、同時に愛しあうんだ。わかるかい。金持ちとかなんとか、そんなこと、関係ないんだ。おれだって、自転車屋の息子さ。でも、金持ちなんだ。グループの誰かが金持ちなら、みんな金持ちなんだ。淳が金持ちだから、おれも金持ちだ」

楊子はうつむいた。そして、ゆっくりとかぶりを振った。

「わかってきたらしいね」淳が、楊子の顔をのぞきこみながらいった。「わかってもらえると思っていたよ。だって君は、わかりの悪いおとなじゃないし、内心わかっていても、わからないふりをしたがるおとなでもないし、だいいち、頭がいいんだものね。わかるのが当然なんだ」

彼らの考えかた、彼らの生活態度——それらは楊子の心に、おどろくほどなめらかに侵入してきた。楊子にも、それに近い感覚は以前からあった。そして今、それは意識へ浮かびあがってきて、そのため彼女は、前にも増して淳を、身近に感じることができ、前にも増してはげしく彼を愛しはじめていた。

「でも……」楊子は、口ごもった。「わかるわ。わかるけど、でも……」

「頭で考えちゃだめなんだ」淳が大声を出し、勢いこめて楊子に指をつきつけた。「からだだ。からだで感じるんだ。その方が先なんだ。頭で考えようとするから、尻ごみしてしまうんだ」
「からだで考えるって、どう……どうするの……」楊子は、おどおどと訊ねた。
「よし」淳は大きくうなずき、楊子のすぐ傍に立っている若者に眼で合図した。
「わかった」若者は、楊子を真正面から抱きしめようとした。
「あっ、待って」楊子は悲鳴をあげた。
「ぼくたちは、今まで待ったんだよ」と、淳はいった。「ぼくたち全員がだ。ぼくも、志麻子も……ここにいる皆が、今まで君を待ったんだ」
「でも……でも……」若者に抱きすくめられた楊子は、弱よわしく身もだえながら いった。「わたしの方がまだ……まだ……心の準備が……」
「心の準備なんて、できるわけがないのよ、楊子」志麻子がいった。「問題は、からだで感じることだけなの。そしてからだの準備は、あなた、もうとっくにできている筈じゃないの」
その通りだった。淳に誘われた時、すでに楊子は、彼にからだを奪われても構わぬという気持になっていたのだから。
もう、どうしていいかわからなかった。何も考えなくってもいいと淳がいったのを思い出しながら、どうせ今はものを考えられはしない、だから、ちょうどいいのだと思いこもうとした。それでも、彼女の眼からはたえまなく涙があふれた。
若者は楊子を抱きあげ、カーペットの中央へつれていき、彼女のからだを横たえた。そして楊子

の首のペンダントをとり、白いサマー・セーターをゆっくりと脱がせた。カーペットの上にあぐらをかいていたもうひとりの若者が、楊子の黒いミニ・スカートを脱がせ、靴を脱がせた。志麻子たち三人の娘は楊子の服を受けとってたたんだ。この儀式じみた様子を、淳はまばたきもせず、じっと眺め続けていた。
白いブラジャーがとられ、楊子の乳房に、若者のひとりが接吻した。うっ、とうめいて、楊子は身を固くした。もうひとりの若者が、白いパンティを脱がせた。そして彼は、はげしい踊りのあとで汗ばんでいる彼女の陰毛に唇を近づけた。
「楊子……」と、その若者はつぶやいた。「ぼくは雄一だ」
「ぼくは健だ」唇をはなし、もうひとりがささやいた。「愛してるよ。楊子」
「待って」と、楊子は叫んだ。
けんめいに、彼女はふたりの若者の腕から逃がれようとしてあらがった。「待って、お願い」
わあわあ泣きながら、若者たちの手をすり抜け、淳の足もとに這い寄った楊子は、生まれたままの姿で背を丸め、カーペットに額をこすりつけて叫んだ。「お願いよ。淳。せめて、せめてあなたが、いちばん先にしてちょうだい。いちばん先に……」
「まだ、わからないのか」淳は、怒気鋭く叫び、這いつくばった楊子の髪をわしづかみにしてぐいと彼女の顔をあげた。
淳は、本気で怒っていた。彼の眼は血走っていて、それはもどかしさと、憐れみと、怒りに燃えさかっていた。彼は片手で楊子の髪をつかんだまま、もう片方の手を大きくふりあげ、彼女にはげ

しい平手打ちをくわせた。

右、左、右、左……。その平手打ちには、際限がないのかと思えるほどだった。楊子の頬は焼けつくような熱さにかっと火照り、たちまち赤くなった。

「同じなんだ。皆、同じなんだ。ぼくだけを好きになっちゃ、だめなんだ。みんなを好きにならなきゃだめなんだ」楊子の頬を殴り疲れた淳は、肩で息をつきながらいった。

「なれないわ」楊子は淳の腰にしがみついたまま泣き続けた。「そんなに急に、誰もかれも、好きにはなれないわ」

淳は靴で、楊子を蹴倒した。白い胸に黒い靴痕をつけて仰向けに倒れた楊子の両方の足首を握り、淳は彼女の股を大きく開いた。

「あっ。何するの」楊子は逆立ちのような恰好のまま悲鳴をあげた。彼女の足首の片方をはなした淳は、すばやく指さきを楊子の陰唇に押しあててから、彼女の眼の前に突き出した。

「見ろっ。びしょびしょじゃないか。君は誰だって愛することができるんだ。君のからだは、すでにそうなっているんだ。人間のからだは、男も女も、常にすべての人間を愛することができるようになっているんだ」

楊子は、最初雄一と交った。楊子が雄一と交っている間、淳はふたりを眺め続け、志麻子は健と交っていた。

「だめだ。眼をあけろ」と、淳は途中で叫んだ。「君は眼を閉じて、おれのことを考えている。だめだ。眼を開いて、相手をよく見るんだ。皆を見るんだ。みんなを」

雄一はオルガスムス直前、志麻子の名を呼び、他のふたりの娘の名を叫び、最後に楊子の名を絶叫して果てた。志麻子も、健と交りながら雄一や淳の名を呼び最後には楊子の名まで叫んだ。

楊子はさらに健と交り、それから淳と交った。

若者たちは、いつ果てるともなく交わり続けた。

ひと通り交ってから、コーラを飲み、水割りやミルク・ブランディを飲み、また交った。

ふれあう肌に、楊子は室内のすべての仲間の愛を感じた。体臭は若い男の体臭でもあり、ほかの娘たちの体臭でもあった。肌から肌へと体臭は移り、愛はひろがっていった。誰に抱かれていても、誰を抱いていても、それは仲間全体と抱擁していることになるのだった。そしてまたそれは、セックスの快感などとは比べようもない、大いなる恍惚感でもあった。

現実と夢の境を楊子は行きつ戻りつ、ながい間さまよい続けた。いつまでもさまよい続けることになるかもしれないと、楊子は思った。

その通りだった。

交りが終わっても、そこに覚醒はなかった。仲間とともにいる間は、そのすべての時間が愛の営みの時間だったのである。仲間と別れたあとも——と、楊子は思った——もしかすると、これからはずっと、この大きな愛を抱いたままで生きて行けるのかもしれない。

若者たちは、服を身につけ、お互いの顔をにこにこと眺めあった。何も言わなくても、全員の考えがわかってしまえる一種の集合意識のようなものが彼らの中に生じているのかもしれなかった。

おなかがすいた、と楊子は思った。だが、全員が空腹の筈だから、何もいう心要はなかった。若

者たちは、淳の部屋を出て、エレベーターで地下駐車場へ降りた。

地下駐車場には、淳の車と雄一の車があった。若者たちはふたつの車に分乗した。楊子は雄一の車に乗った。

行き先きの打ち合わせもせず、二台は駐車場から出た。表参道を青山通りへ折れ、麻布に向かった。途中、雄一の車は、先を行く淳の車を見失った。それでも、麻布のレストランの前までくると、ちゃんと淳の車が駐車場に入っていた。

スペイン風のレストランで、どのテーブルにも赤いローソクが立っていた。淳たちはひとつのテーブルを囲み、山ほどの料理を注文した。

楊子は、今や遠慮しなかった。金はあるのだ。

金——なんておかしなものなのだろう。

楊子は肉の厚いピーマンのたっぷり入った牛肉料理とガルバンゾ・エスパニョルを腹いっぱい食べた。

ふと、楊子は気がついた。

店の中には、若者しかいなかった。若者ばかりが集まってくるレストランのようだった。そして隣りのテーブルでも、若者たちのグループが食事をしていた。ただそのグループはいかにも、さっき知りあったばかりの若者同士の寄り集まりという感じがした。全員が、よそよそしい表情をしていた。淳や楊子たちのグループとは雲泥（うんでい）の差があった。

その中に、ひとりの若者がいた。その若者だけは、自分の加わっているグループ内の、一種の空

虚さをはっきり自覚しているように思えた。

楊子と、その若者の眼が、ふとぶつかった。若者は、視線を楊子からはずそうとはしなかった。楊子は微笑した。若者も、ほほ笑み返した。

「そうよ」と、楊子の隣りの席にいた志麻子が耳もとでささやいた。「彼にはみんな、眼をつけてるのよ。どう。いい感じでしょう。あなたの次に、わたしたちのグループに入れるのはあの子にしようって、みんな言ってるの。ただ、誰が偽足になるかまだ決めてないの」

「偽足って何」と楊子は訊ねた。

「アメーバが食物をとる時に細胞からつき出す突起のことよ。どう楊子、あなた今度は、偽足になってみないこと」

ラブレター作戦

高斎　正

「まったくいやになることがはやってきたものだわ」

友だちの天野照子と別れて自宅への道を歩きながら、山岡美代子は思った。

いやな流行、というのはラブレターのことであった。美代子たちの赤城学園で、はやりはじめたのだ。

流行の発端が、瀬山英一だという説もあった。そうではなくて、神田国夫だという噂もあった。ともかくだれかが、それも女生徒たちに影響力のある生徒が、「手紙っていいね。こっちが読む気になるまで、じっと待っててくれるもの。そこへいくと電話は、なにをしているときでも最優先で呼びつけられるから、便利だけどいやになることがあるよ」といったことから、急にラブレターがはやりだしたのである。

テニス部の主将で美代子のクラスの委員をしている瀬山英一や、バレー部の主将で隣のクラスの委員の神田国夫などは、学校から帰って自宅でかばんをあけると、中にごっそりとラブレターがはいっているという話だった。

美人で頭のよい川原順子や熊川由紀子のところへも、ラブレターは山となってきたし、天野照子のところへも、何通かはきていた。もちろん、スタイルに自信があり、成績も常に上から五番以内の美代子のところにも、ラブレターはたくさんきた。そして、その中には小沢純男からのもあった。

美代子は小沢が好きだった。だからここまではよかった。美代子は返事を書き、ふたりきりになったらそっと渡そうと思って、学校に持っていった。

でも、学校ではふたりきりになるチャンスはなかった。しかたがないから、ほかの人に気づかれないように、こっそり小沢のかばんの中に入れておこうと、かばんのふたをあけたとき、ぽとんと白い角封筒が落ちた。裏が上になって、書いた人の名前はなかった。

「ライバルだわ。でもいいわ、いっしょに入れといてあげる」

そうつぶやきながら、その角封筒を拾いあげた美代子は、はっとして凍りついたように動けなくなってしまった。封筒の表には「小沢純男様」と五文字。それだけで十分だった。

美しい文字であった。読みやすさとともに、女らしい優雅な柔らかさのある、美しい文字であった。

美代子は自分の字がへたなことを感じた。字がへたなのは、幼いときからであった。小学校のときに先生に注意され、中学にはいってからも注意されていた。自分では丁寧に書いたつもりでも、書かれた字は乱暴に書きなぐったような、へたくそな字になっていた。たしかに読めることは読めるのだが、お世辞にもじょうずとはいえず、女らしさなど少しも感じられない字なのだった。

小沢純男へのラブレターも、そういう字で書いていた。代筆でもしてもらわないかぎり、ほかに書きようがない。美代子は自分の字が恥ずかしくなって、用意してきたラブレターを、小沢のかばんの中には入れず、そのまま自分のかばんにもどした。

「もっと字がうまければなあ」

美代子は思った。それまでも「字のきたない答案は、入学試験のときによく読んでもらえないから損ですよ」と、何度も先生に注意されてはいたが、字がへたなことで実際に損なことがあることを、美代子は初めて知った。

川原順子や熊川由紀子はうらやましくなるほどきれいな字を書いた。天野照子は美代子と同じようにへたな字を書いた。

「私、ペンを習おうと思ってるの」

別れぎわに照子がいったことを、美代子は思いだした。

「そうだ、私もペン習字をしよう」

美代子は思った。

ペン習字の教材が着いたのは、それから五日後であった。美しい字が書けるようになるために、一日に一時間もさくことは、受験勉強に忙しい美代子にとってつらいことだったが、入試の答案を書くのに役立つからと自分を納得させて、さっそく練習を始めた。

しかし、一週間たっても、美代子の字のまずさは変わらなかった。美しいお手本の字と並んだ自分の字が、どうにもやりきれないほどへたに見えた。二週間たった。進歩のようすはなかった。気のせいか、同じころにペン習字を始めた天野照子の字が、少しうまくなったように感じられた。社

会科のノートを見せてもらったとき、美代子はそれを感じた。

「私は特に悪筆なのかしら」

彼女は悩んだ。しかし、小学校一年のときからずっと書いてきた字の癖が、一週間や二週間の練習で、そう大幅に変わるはずもなかった。ペン習字のコースは、短いもので六カ月、ふつうは一年かかるのだ。

美代子は一回めの答案を郵便で送った。

放課後、美代子は図書室で勉強していた。社会の参考書を写しながら、彼女は自分の字のへたさを悩んでいた。ラブレターがはやりはじめてからというもの、字がへただという劣等感がいつもつきまとっていた。

美代子がペンをノートの上に置いて、椅子の横に置いたかばんから、教科書を出そうとしたときだった。隣の席にいた女生徒が立ちあがった。そのはずみに、手にしたかばんかノートが触れたのだろう。美代子の万年筆が机の上から床に落ちた。いやな音がした。

「あらっ」

女生徒が小さな声をあげた。

「ごめんなさい」

彼女は美代子のペンを拾いあげた。そしてしばらくみつめていたが、

「ペン先を傷つけちゃったわ。私の不注意からこんなにしちゃって……。軸が色違いだけど、同じ物をさし上げるから、それで許してくださらない？」

「そんな……」

美代子は女生徒が手にした自分の万年筆を見た。ペン先が曲がっているようには見えなかった。

「それじゃ悪いわ。端っこに置いたのもいけなかったんですもの。たいしたことないらしいし、いいわよ。心配しないで」

「でも、このままじゃ私の気持ちがすまないわ。お願い、これ受け取って、ね」

「本当にいいのよ。ちゃんと書けるもの」

美代子は女生徒の手から自分の万年筆を取って、ノートに線を書いてみた。少しひっかかるようではあったが、あまり気にもならなかった。どっちみち、自分は字がへたなのだという意識のほうが強かった。

「万年筆ってペン先が生命なのに、傷つけちゃって。ね、試しに私のを使ってみて、ね」

女生徒が万年筆をさし出した。その真剣な態度に、美代子は思わず受け取った。キャップをはずしてノートの上に線を書いてみると、これが同じ万年筆かと思えるほど、なめらかにペン先が走った。試しに、山岡美代子と書いてみると、自分の字とは思えぬほど整った字になっていた。

「お願い、それ受け取って。そうしてもらわないと、私、困るの」

女生徒はそういうと、軽い身のこなしで立ちあがり、図書室から出て行った。

「ちょっと待って。ねえ、あなた、名前なんて……」

美代子がいいかけたとき、女生徒の姿はもう見えなかった。美代子は女生徒が置いていった万年筆で字を書いてみた。美しい字が、自分の手にしたペン先から、つぎつぎに生みだされていた。爽快な気分であった。初めて味わう快感であった。

「今度会ったらなにかお礼をして、この万年筆いただくことにしよう。見かけない顔だったけど、何年生かしら」

美代子は思った。

「そうだわ、さっそく小沢君に手紙を書こう」

図書室から出たあの女生徒は、校門をくぐると住宅街に向かって歩きだした。しばらく行くと、右に駐車場があり、女生徒はそこにとまっていた黒塗りの乗用車に近づいていった。

「どうだった、姉さん」

後ろの席のドアをあけて、女生徒と顔かたちのよく似た少女が声をかけた。女生徒が乗用車に乗りこんだ。

「うまくいったわ」

「じゃ、あの万年筆、受け取ってもらえたのね」

「ええ。試し書きしてたけど、きれいな字を書いていたわ。今夜あたり、きっとラブレターを書くと思うわ」

ねえさんと呼ばれた女生徒が答えた。
「そうしてもらわなくちゃ」
少女がいった。
「ペン習字の会社に勤めて、字の癖や筆圧まで調べて、特別注文で作ってもらった万年筆ですもの。メーカーの人もびっくりしていたわ。マイクロコンピューターで万年筆の重心を移動させるにしても、こんなに修正量の大きいのは珍しいって」
「それだけひどい字を書いていたわけね。私、隣の席にすわってのぞいたけど、ノートの字なんて読めたもんじゃなかったわ」
「そうでしょ。でも、もう安心だわ。早くラブレターを書いて、渡さないかしら」
「きっとすぐ書くわよ。山岡美代子が小沢純男と結ばれなくちゃ、私たちのおじいさまが生まれないもの」
姉の言葉に少女は安心したようにうなずき、乗用車型のタイムマシンのスイッチを入れた。ふたりは自分たちにとっての現在にもどっていった。字のうまく書ける自動修正装置付き万年筆を、曾祖母にあたる若き日の山岡美代子に残して。

薫煙肉（ハム）のなかの鉄

山田　正紀

草喰いたちは悲鳴もあげなかった。口径四十ミリのグレネードランチャーは、犠牲者に悲鳴をあげる余裕を与えるほど慈悲深い代物ではないのである。

中距離火器としては、およそ四十ミリグレネードランチャーほど理想的な武器もないだろう。榴弾の凄じい殺傷力はまさに火器の芸術品と呼んでも過言ではない。――弾頭は着地と同時に爆発する。鋸歯状のワイヤーでつくられた球体が八方に飛散するのだ。その破片の数は三百、十メートル範囲の人員をすべて殺傷することができるといわれている。

狙われた人間はたまったものではない。落雷で死ぬほうがまだしも楽だろう。高速で飛来してきたワイヤー片に、あるいは頭蓋を砕かれ、あるいは内臓をひきちぎられて、地に叩きつけられるのだ。苦しみぬいたあげくの死を死ぬことになるのである。

草喰いたちはおよそ十人を数えた。わずか一発の榴弾が彼らをことごとく死に導いたのである。犠牲者のなかには女もいたし、十五にも満たない年齢の子供も混じっていた。だが、――俺が草喰いたちに同情を感じるはずはなかった。同情は俺の柄ではないし、草喰いたちが同情に価するとも思えなかったからだ。

草喰いたちの生死など俺には関わりのないことだった。俺の脳裡にはただただ屠殺人兄弟の存在だけが大きく占位しているのだ。

――地鳴りのような銃声を呑みこんで、森には再び静寂が戻ってきた。一発の榴弾は十人の草喰いを殺すには充分でも、森の様相を損なうのには力が足りないようだった。光と影で綾取られた灰色の森に、小鳥たちの鳴き声が聞こえ始めていた。

地表を覆う厚い苔は、草喰いたちの血糊を吸ってギラギラと輝っていた。地虫たちにとってはそれ以上もなく豪華な饗宴というわけだ。――だが、草喰いたちは、地虫の腹を肥やすために殺されたのではなかった。時をおかず、正当な所有者たちが現われるはずだった。

俺はそれを待っているのだ。

馬のいななきが聞こえた。修羅場には相応しくない、ひどく牧歌的ないななきだった。――そして、荷馬車の軋むような車輪の音がそれにつづいた。

森の奥から現われた荷馬車は、乾し草を積むのにこそ似つかわしいような古びたものだった。二頭の馬も駄馬としか形容しようがない。

が、――荷馬車を操る二人の男は、どうしてあなどり難い奴らだった。ひとりの男は全身が筋肉の束でつくられているような巨漢だった。身長は優に二メートルを越え、肩などは巌のようにもりあがっていた。その男を真に独特に見せているのは、巨漢にありがちな魯鈍さがまったく感じられないということだった。実際、馬を操るその手つきは、しなやかとさえいえた。……魯鈍という形容詞は、むしろもう一人の男にこそ相応しいかもしれない。痩身の、生気を感じさせない男だった。土色の表情と、ほとんど閉じているようなその眼は、直截に死人という言葉を連想させた。彼が手にしているグレネードランチャーを見れば、その生気のなさがなにに由来するものであるか明

らかだった。優れた狙撃手（スナッパー）は、極度な精神集中を必要とするため、外界に対する反応を喪失してしまうのである。

彼らが屠殺人兄弟（B・B）だった。

彼らは馬車からおりると、草喰い（カウ）たちの死骸を荷台に放りこみ始めた。非常に手なれた動作で、これが彼らにとって日常であることを示していた。実際、大男のほうにいたっては、鼻歌さえ歌いかねない陽気さだった。

「女が三人もいる」と、痩せた男が首をかしげた。

「女の肉を混ぜると味が落ちるぜ」

「血抜きをすれば同じだ」大男が答えた。

「味のわかる奴なんかいやしない」

俺は頃合だと思った。これ以上身を隠していると、姿を現わす時機を逸してしまう。

屠殺人兄弟（B・B）は、倒木のかげから現われた俺を見て、軀（からだ）を緊張させた。当然のことだった。見慣れぬ人間はすべて敵だと考えて、万にひとつも間違いはないのだ。痩せた野郎がゆっくりとグレネードランチャーを持ち直した。その表情（かお）には、俺が肩からさげているＬＩＡＩライフルに対する明らかな侮蔑の色が浮かんでいた。奴にしてみれば、半自動式のＬＩＡＩライフルなど玩具同然の代物に思えたろう。

「なんだ、てめえは？」と、大男が訊いた。

「獲物を横取りしようというんじゃねえだろうな」痩せた男が熱のないボソボソとした声で言っ

た。

俺は害意のないことを示すために、両の掌をひろげて見せた。見知らぬ人喰い（マン）同志が知り合いになるためには、相当以上の幸運を必要とした。なにしろ互いに互いが食糧なのだ。下手をすれば、出会ったとたんに殺しあいになりかねない。この場合、喰われることになるのは、間違いなく俺のほうだ。

「近くへ寄るな」

笑いながら歩きかけた俺を、痩せた男がグレネードランチャーで制した。

俺は足をとめた。撃たれる恐怖に、背筋がちりちりと灼けていた。ただやみくもに逃げだしたいという弱少動物の本能で、俺の太股がしきりに痙攣（けいれん）を繰り返していた。

人喰いであるかぎり、俺もいつかは喰われることになるという覚悟はついていた。だが、少なくとも屠殺人兄弟（B・B）の腹にだけは収まりたくなかった。人喰いというやつは、これまでなかなかプライドがたかいのだ。

「人喰い（マン）だな」大男が眼を細めた。

「ああ」俺は頷いた。「ご同様にな」

人喰い（マン）と草喰い（カウ）とを識別するのはむずかしくない。肌の色が違う。眸（め）のぎらつきが違う。第一に、俺たち人喰いは例外なく血の臭いを発散させているのだ。

「喰われたいのか」と、大男が言った。「それとも用があるのか」

「用があるんだ」できるだけ平静を装ったつもりだが、俺の声は小娘のように黄色くかすれてい

た。
「用があるんだとよ」瘦せた男がからかうように言った。
「ああ、だってな」と、大男が受けた。「この野郎は俺たちに用があるんだ」
「俺は西のほうから来た」俺は奴らの挑発にはのらなかった。
「西に人喰い（マン）たちの村があるのは知ってるだろう。俺はそこから来たんだ」
「話をつづけな」と、大男。
「あんたたちの噂を聞いた。ハムを分けてくれるという話を聞いたんだ」
「俺たちのハムが欲しいのか」
「これから冬になる。仲間うちが殺しあうのはもう沢山だ」
「ハムをつくるのはなみたいていの苦労じゃねえ」大男はわざとらしくため息をついて見せた。
「俺たちには替わりになにが貰えるんだ」
「自動車（くるま）だ」
「自動車……」
「ガソリンもつけるぜ」
「……」
大男の表情（かお）に明らかな動揺が走った。こいつほどの商売人をも動揺させるほど、自動車はたいした貴重品なのだ。自動車を修理できる人間はほとんどいない。まして新車を望むなど、夢のまた夢だ。当今、まがりなりにも動く自動車を手に入れるのは、至難のことといえた。

「その自動車はどこにある」
「持ってきてない」俺は魚が鈎（かぎ）にかかった手応えを充分に楽しんでいた。
「取り引きが決まったら、俺はいったん村に帰る。自動車に乗って、ハムを受け取りに戻ってくるぜ」
「俺たちに実物も見せないで、取り引きをさせようというのか」大男は首を振った。
「こいつは考えものだな」
「よせよ」俺は鼻で笑ってやった。
「今あんたたちに自動車を見せれば、俺はあっさり喰われちまう」
人喰い同志の取り引きに洗練さ（ソフィストケーション）の入る余地はない。文字どおり、喰うか喰われるかなのだ。
「いいだろう」
大男はあっさり譲歩した。なんといっても自動車にはあらがい難い魅力があるのだ。
「とにかく俺たちの工場へ来な。話は今晩にでもゆっくりしよう」
俺は全身が弛緩（しかん）する思いだった。屠殺人兄弟（BB）とまともにやりあうことになったら、まず俺に勝ちめはなかったろう。瘦せた野郎のグレネードランチャーにしとめられるか、大男に四肢をひきさかれるか、どちらにしてもゾッとしない死に様をさらすことになるはずだった。
「俺はルイズというんだ」
俺はゆっくりと歩を進めて、大男に右手をさしだした。
握手はたんなる礼儀ではなく、本来の意味をとり戻していた。つまり、互いに右手にナイフを隠

してはいないと確認しあうわけだ。「俺はザッグ」俺の手を握って、大男は顎をしゃくった。
「こちらは弟のハンクだ」
痩せた男――ハンクはそっぽを向いていた。誰であろうと、握手をかわすなどとんでもないと思っているのだろう。こういう奴は自分しか信じていない。アニキのザッグにだって、気を許すことがあるかどうか疑問だった。
できれば、ハンクに気を許してほしかった。決して友人になりたいと思っているからではなく、警戒されては殺しにくいからである。
――俺も手伝って、草喰いの死骸を荷台に積み終わった時、ふいにハンクが森のほうを振り返った。グレネードランチャーの銃床が肩まではねあがった。
「どうしたんだ」と、ザッグが尋ねた。
「女だ」ハンクはあいかわらずボソボソとした声で答えた。
「むこうのほうで女が走るのが見えた」
俺はため息をついた。どうやら二人に説明しなければならないようだ。いうならば、その女は俺の知人のようなものだった。
「心配はいらねえ」と、俺は言った。「あの女は俺をつけまわしているんだ」
「おまえの女か」ザッグの表情にいかにも好色そうな笑いが浮かんだ。
「違う」俺は首を振った。「俺を殺したがっているんだ」
こんな荒っぽい社会だ。自分を強姦した男を殺そうとする女などめずらしくもない。ただ、その

女のように一年以上も男をつけまわすとなると、いささか異常と言わざるをえない。――正直、俺はいくらか後悔していた。眸はきれいだったが、ガリガリに痩せた、およそ女らしくない小娘だったのだ。それほどに女に飢えていなければ、いくら俺だって犯ろうなどという気持ちは起こさないはずだった。山路でバッタリ会っただけで、むろん女の名前も知らない。向こうだって、俺の名前を知っているはずがなかった。
その場かぎりで終わるはずだったのが、一年以上も交際がつづくはめになってしまった。かなりに情熱的な交際だ。眠っている時、石で頭を潰されそうになったことが数えきれないほどあるのだ。
「どうして、犯った後で殺さなかったんだ」と、ザッグが訊いた。
「喰っちまえばよかったんだ」ハンクがかすれた声で言った。
「……」
俺は答えなかった。――あの女が身に備えている荒っぽさは明らかに人喰いのものだ。あの女にしても人間を食べてこれまでを生き延びてきているのである。俺に喰われたところで、文句を言える筋合いはなかったろう。
が、――俺は女は喰わない。別に、女が不味いという俗説を信じているわけではない。女にしろ、要するに肉は肉だ。女という奴はどういうわけかたたることが多いのだ。俺の知ってるかぎりでも、女を喰ったために気が狂った奴が十人はいる。女にしても人肉を喰っているのだから、たたるなんてずいぶん得手勝手な話だと思うのだが……。
ありていに言えば、俺は女が怖くてたまらないのだ。

「行くぜ」ザッグが鞭を手に巻きながら、俺に声をかけた。

ハンクもいつのまにか荷台に登ってしまっている。

俺は慌てて荷馬車に手をかけた。

——現代の世に満ち足りているものは少ない。おそらく書籍はその少ないもののなかに範するだろう。知識は、特にひとたび活字となった知識は、何によっても決して損なわれることはなかったことである。

廃墟と化した都市のそこかしこ、——あるいは地下室に、あるいは大学に書籍はうずたかく積まれて残されていた。今となってはもう誰も住もうとしない廃都に、俺は時おり足を踏み入れ、書籍をあさってさまよい歩いたものだ。

本を読むのが好きだったわけではない。腹の足しにもならない本を、誰が好んで読んだりするものか。が、本には空腹を一時忘れさせてくれる効果が確かにあったようだ。

俺はちっぽけな子供だった。悪いことに、保護者を失った離れ人喰いだった。空腹の辛さを噛みしめる機会にはこと欠かなかったわけだ。俺が本を読むのに没頭したのはほとんど必然と言えた。

そして、——俺はなぜ世界がかくあらねばならないのかを知った。

かつて、この地上には人が満ち満ちていた。俺には夢想することすらできないのだが、空を飛ぶ機械さえあったというのだ。自動車、そして多様な火器と、その頃のものが今も幾つか残っている

ことを考えれば、さほど遠い昔だとは思えない。せいぜいが百年ほどしか経過していないのではないか。

人間がなぜ滅びるにいたったかは、俺の想像の埒を越えている。ただ人間は自らの手で、空に毒を撒き、海を殺したという。だから人間も滅んでいかねばならなかったという。——もしそれが事実なら、彼らはなんて野蛮な連中だったんだ、と俺は驚いてしまうのだ。

とにかく、人間は滅んだ。いや、ほとんど滅んだに等しかった。生き残った人間の個体数は、ひとつの種を形成するにはあまりに少なかったからだ。

俺が自分を含めて、人間をわずかに好きになれるとしたら、生き残りが種の滅亡を潔く認めたという事実があるからだろう。生き残った人間はその宗教、人種、性質の違いによって、大きく二つのグループに別れた。ことさらに言うまでもなく、人喰いと草喰いの二つのグループである。が、食するものは異なっても、これら二つのグループは基底に共通した掟を持っていた。他種を絶対に圧迫しないという掟だ。いったん滅びを受け入れた種に、他種を圧迫してまで生きのびる権利はないというわけだ。

草喰いは野草しか食べない。稲や麦を栽培するなどもってのほかだ。周知のように、稲、麦の栽培が人類の異常な繁殖を招き、自種のためには他種を圧迫するのもやむをえないというエゴを培う原因になったからだ。生命を維持するのに充分な野草がなければ、飢えて死ねばそれでいいのだ。

人喰いとなると、さらに話は単純になる。要するに、互いに互いを栄養源とするだけのことなのだ。人類が人喰いに踏みきるには、そうとうな逡巡があったろう。人喰いがどれほど強固なタブー

であったかは、たとえば俺でさえも女を喰うことに恐れを感じるということからも容易に推察できる。――が、共喰いのタブーとは、つまるところは種の維持を大前提とする方便に過ぎないのである。種の滅亡を受け入れた我々に、共喰いを拒むべきどんな理由もない。……

　ある意味では、人喰いは言葉本来の意味での人類愛にかなったことであるかもしれない。我々は自らの肉体で、人類の愚行を贖い、食せられることで、滅びゆく同胞に愛と慈しみを送りうるのだ。俺の血肉がいつの日か赤児となって再生することがない、と誰が断言できよう。皮肉なことに、人類は滅亡を受け入れたときから、それぞれが固く結ばれ、輪廻のなかに安らかに憩うことが可能となったのである。極端に先細りの輪廻ではあったが……。

　その意味で、俺は屠殺人兄弟を許すことができない。彼らは明らかな大罪を二つまでも犯しているのだ。ひとつは、草喰いさえも平然と殺戮していること、もうひとつはその肉を保存がきくように加工しているということだ。屠殺人兄弟は工場で人肉ハムを製造し、のみばかりではなくそのハムを人喰いたちに売りつけてさえいるのだ。人肉ハムを製造することが、人類滅亡に対極する仕事、穀物栽培に匹適する悪業であるのは言うまでもない。――屠殺人兄弟は人類史上最悪の存在、本の一節を引用すれば、「人民の生き血をすする資本家」の再来なのである。

　屠殺人兄弟の住まいは、とある渓谷に位置していた。清冽な川の流れに面して、小屋とそれに数倍する大きさの工場が建てられているのだ。

岩を嚙む勢いの流れに、渡川する二頭の馬は脚を幾度もふらつかせた。

闇が迫っていた。そそりたつ断崖が、ここら一帯の夜をはやくしているようだった。

「まず工場から見てもらおうか」荷馬車からおりたザッグが言った。

「上等のハムだぜ」ハンクが唇に薄い笑いを浮かべた。

「商品を見てもらわないことには、取り引きの話なんかできっこねえからな」

　――工場には異臭が漂っていた。

　人喰いである俺に、血肉に対する嫌悪感などあろうはずがない。――が、暗い工場に積みあげられた人肉には、さすがに辟易せざるをえなかった。人間がここでは尊厳の最後の一片までもはぎとられ、単なる商品と化してしまっているのだ。

　天井の鉤からは、脊椎骨に沿って裂かれ、半身となった死骸が幾体もさがっている。それらの死骸は、さらに肩、胸、股と部分けされ、血絞り工程にまわされることになる。――肉の貯臓性を増すための、食塩、とりわけ硝石のにおいが激しく鼻孔をうつ。あらかた加工の終わった肉はもめん布に包まれ、円筒形金網のなかで炭火によって乾燥される。――そして、最後に薫煙室のなかでゆっくりいぶされるというわけだ。

　屠殺人兄弟が誇ってしかるべき、計算されつくしたひどく合理的な工場といえた。その工場の合理性がなおさらに、俺の嘔吐感を強く誘うのだ。――考えてもみるがいい。これが総て人肉なのだ。それぞれに笑い、泣き、争った人間たちが、この工場を出ていくときには一本のハムとなっているのだ。

繰り返すようだが、俺は人喰いそのものにはどんな罪悪感も抱いてはいない。他種を圧迫しないという共通の理念に結ばれた二人の人間が、それぞれに持てる力の総てをふりしぼって、相手の肉を狙う。その時、肉はキリストのパンとなり、血はワインと化す。俺はそこにはっきりと〝愛〟を感じるのだ。

だが、――屠殺人兄弟の行為には愛が介入する余地はない。彼らは人類最悪の罪業、楽しみのために生き物を殺す……その具現者でしかない。彼らは単なる殺戮者なのだ。

「感想はどうだね」背後に立っているザッグが、奇妙に猫なで声で訊いてきた。

「ああ……」俺はようやく頷いた。

ザッグとハンクを殺す時の快感を想像することで、どうにか胸にわだかまる嫌悪感を圧し殺せたのだ。今この場で二人を相手にまわすのは、愚の骨頂というべきだった。

「気に入ってもらえたかね」ザッグはなおも優しく言う。

「ああ……」俺は頷くばかりだった。

「そいつはよかった」ザッグがいかにも悲しげにため息をついた。

「実は俺には気にいらないことがあってね」

「気にいらないこと？」

「ここにあるのは草喰いの肉ばかりなんだ」

俺はとっさに振り返ろうとした。が、突然に股を襲った灼熱感が、俺の動きを阻害した。なまなかな痛みではない。筋肉繊維を容赦なく裂き、骨にまで達する激甚な痛みだった。

俺の軀は痙攣した。苦痛に喚きながら、俺は地を転げまわった。

「草喰いの肉ばかりなんだ」と、ザッグが繰り返した。

「美味いのは人喰いの肉なんだがな。人喰いの肉がほしいという注文が幾つかあるんだ」

ザッグの傍らでは、ハンクがいま俺を刺したばかりのナイフの血糊をベロベロとなめていた。血に酔い痴れたような、淫血症の笑いを片頬に浮かべていた。

「美味いな」ハンクはうっとりと言った。「こいつの肉は美味いぜ」

「……きさまたち、どういうつもりなんだ」俺は苦痛をなかばその声に爆発させ、地面から喚きたてた。

「俺を殺せば商売はどうなるっ！　ハムがさばけなくてもいいのか」

「西の村から来たと言ったな」ザッグの声音が一変して酷いものになった。

「俺たちはとっくに西の村とは取り引きがあるんだ。あの村にはおめえみてえな若造はいねえ」

「……」

俺はようやくにして自分の失態を覚った。とり返しのつかない致命的な失態だった。

「なにが狙いだったんだ？」と、ザッグが訊いてきた。

「俺たちを殺して、工場をのっとろうとでもいう肚だったのか」

「……」

俺は答えなかった。答えたところで、何がどうなるものでもなかった。なぶられたあげく、殺されことになるのは瞭然としていた。自分が犯した失態の大きさと、股から流れでる夥しい量の出

血が、俺の体力、気力を著しく削いでいた。

が、――ザッグたちがつづいて示した行為は、俺の予想をはるかに越えたものだった。「ここから出ていきな」ハンクはそう言い放ったのだ。

「そのオンボロのライフルをかついで、さっさと出ていくんだ」

俺は唖然とした。ザッグたちが俺を見逃がそうと考えるはずはなかった。彼らに寛容を期待するのは、毒蛇に慈悲を乞うのに等しく愚かというべきだった。

「どうした？」ハンクはニヤニヤと笑っていた。

「俺たちが機嫌のいいうちに、出ていったほうがいいのじゃないか」

「……」

その時、俺ははっきりと奴らの意図を覚ることができた。奴らは確かに堕落した「資本家」であるが、それでも人喰いの一員であることに変わりはない。奴らもまた人喰いの昂揚を忘れかねているのだ。奴らは俺を獲物にみたてて、人狩りを楽しもうと考えているのだ。

万にひとつも俺に勝ちめはない。相手は屠殺人兄弟、俺はふかく傷つき、しかも手にしている武器といえば、ハンクのグレネードランチャーとは比べうべくもないＬＩＡＩライフルが一挺というていたらくなのだ。

「はやくしろ」ザッグの眸が陰険に光った。

「この場でぶち殺されたいのか」

俺には選択の余地はなかった。最悪の条件で、奴らとやりあうしか路はなかった。

――月光に映えて、川はクリスタルガラスのきらめきを見せていた。戦うのに充分なほど明かるくなく、逃げきるには充分なほど暗くない夜だった。

追われる者にとって、総てが不利な条件となりうる。かたときも気をゆるめてはならない。が、長時間の神経緊張は、人の反応速度を極端に鈍くするという陥穽を含んでいる。いずれにしろ逃亡者が生き残るチャンスは、非常に少ないといえた。一瞬の錯誤が、確実に逃亡者を死へと導くのだ。――逃亡者が傷ついている場合は、なおさらに勝利の女神は吝嗇になる。傷そのものよりも、傷をうけているという精神的な圧迫感が大きなハンディとなってしまうのだ。

俺は下股を川の流れに沈めていた。どうあがいても、逃げきれるものではない。奴らがやって来るのを待ち構えていたほうがまだしも利口に思えた。――それに、山野を動きまわろうにも、股の傷が許してはくれなかった。ハンカチで一応の血止めはしてあるが、むろん応急処置の域をでてはいない。下手に動けば、出血多量で衰弱することになるのは眼に見えていた。

だから、俺は待っている。屠殺人兄弟がやって来るのを待ちつづけているのだ。

こうなってみると、ライフルだけが唯一俺の味方だった。半自動だけの発射機構だからといって、それほど莫迦にしたものではない。なんといってもＬＩＡＩライフルは、かの大英帝国陸軍が採用していた火器なのだ。使い慣れると、これほど手になじむライフルも珍しいといえる。箱弾倉二十発の給弾方式だから、グレネードランチャーのように超破壊的な火器とはいえないが……な

に、それはそれで利口な使途はいくらでもあるのだ。

少なくとも、こいつは人喰いの銃だ。悪鬼のような「資本家」が大量殺戮のために用いるグレネードランチャーとは、自と格が異なるのである。

狭い渓谷だった視野は良好とは言い難かった。が、それだけに奴らから発見されにくいという利点もあった。奴らにしてみれば、足に傷を負っている俺が川につかっているとは思ってもいないだろう。こちらが先に奴らを発見すれば、俺が勝利者となる可能性もないではなかった。

水流の冷たさに俺の足は痺れていた。氷の牙に足をはさまれているに等しかった。その牙は傷をさらにふかくえぐり、俺の足から血を奪っていった。——待ちつづけるしかなかった。だが今の俺は、ただ待つことにさえも体力を削がれてしまうのだ。

ふいに全身の体毛がそそけだったように感じた。なにか大気が急激に膨張したようだった。なんとも説明のつかない第六感が俺の軀を後方に弾きとばした。

川面が泡だち、白く牙をむいた。魚雷の爆発に似ていた。水飛沫が驟雨のように俺の軀を濡らした。

なにかとてつもなく熱いものが俺の脇腹をかすめた。同時にようやく銃声が俺の耳に届いた。グレネードランチャーの、電雷のような銃声だった。

グレネードランチャーの榴弾をあびせられて、俺がとにもかくにも無傷だったのは奇跡としかいいようがない。夜闇が射手の目測を誤らせたのだ。間一髪の差で、俺はグレネードランチャーの殺傷範囲外に逃がれることができたのである。

二度の奇跡を期待するわけにはいかない。ハンクが優れた射手であることは、俺はこの眼で確かめているのだ。

グレネードランチャーが単発式であることが、わずかに俺に幸いしていた。二発めの榴弾が唸りをあげて飛んでくるまでに、ほんの短い間のことだが、俺に時間が与えられるからである。

その数瞬の執行猶予に、勝負をしかけるしかなかった。全身鳥肌立つ思いだった。俺は盲目撃ちでハンクをしとめるしかないのだ。

俺は咆哮した。勝ちめのない戦いに挑もうとする時、人が知らずあげる咆哮だった。

引き金をしぼった。

わずか箱弾倉二十発のLIAIライフルで、掃射という言葉は妥当ではないが、しかしその位置さえ知らぬ相手を倒すにはそれしか方法はなかった。

俺は撃ちに、撃った。耳孔がリベットを打ちこまれたように痺れた。箱弾倉がカラになるのに一分とはかからなかった。

——狂躁のあとの、それ以上もなくふかい脱力感が俺を襲った。俺にはもうなしうることは何もなかった。ライフルを撃ちつくしてしまった以上、少なくとも俺に関してはハンクとの闘いは終わったも同然だった。

俺はゆっくりと歩きだした。待つことには飽いていた。榴弾で身肉をひきちぎられるようなことになっても、ハンクに向かって歩いていきたかった。

後にも先にも、その時ほど俺が死と間近く対峙したことはなかった。俺は現実に榴弾の唸りを耳

にきき、内臓が裂ける苦痛を肌に感じていた。

俺はほとんど死人だった。川を三十メートルほど進んだ時、人の呻く声が聞こえてきた。

俺は自分の幸福が信じられなかった。身内を貫いていた氷柱がいっきに溶解する思いだった。盲目撃ちに撃った弾丸が、ハンクをしとめていたのである。

ハンクは川岸の藪のなかに倒れていた。あおむけになった腹のあたりから、赤黒いものが噴出していた。――一瞬、俺は神の存在を信じそうになった。腹を撃たれる苦痛には想像を絶するものがある。因果応報というやつだ。ハンクのような奴が苦痛なく死ねるとしたら、この世はあまりにも不公平にすぎる。

ハンクの眼がうっすらと開いた。川からあがる俺を認めたのだ。

「……運がよかったな」ハンクはなかば呟くように言った。

「盲目撃ちなんかが命中するはずはねえんだ」

「運がよかったばかりじゃない」俺は首を振った。

「俺のライフルは盲目撃ちに威力を発揮するんだ。ただのライフルだとあなどったのは間違いだったな。弾丸が特別製なんだよ。一コの薬莢に尖頭弾を二コ装塡してあるんだ。二重弾丸というやつだ。先弾は狙った地点にいくが、後弾の弾着点は予想がつかない。掃射の場合には、その威力が倍増するわけだ」

俺がことさらに二重弾丸のことなど喋ったのは、ハンクに自分のミスを覚らせて、口惜しがらせたうえであの世に送りたかったからだ。銃だけを見て、弾丸のことを考えようとしなかったのは、

人喰いにとっては弁解しようのないミスだった。

「……てめえは誰だ？」ハンクはぎりりと歯を咬み鳴らした。

「なぜ俺たちを狙うんだ」

「一月ほど前に屠殺人兄弟のハムを食べる機会があった」俺は言った。

「……そのハムのなかに、俺の弾丸のかけらが入っていた。俺は弾丸にイニシャルを入れてるんだ。……おまえたちは、な。俺の好敵手をハムにしたんだ。何度撃ちあっても勝負のつかなかった、ほとんど友達同然だった男をな」

「それがどうした？」ハンクはしんそこ不思議そうだった。「どうせ喰いあうんじゃねえか」

「おまえには分からない」俺は首を振った。

「絶対に分かりっこねえんだ」

ふいにハンクは軀を激しく痙攣させた。死がその貪欲な顎で、いま確実にこの男をとらえつつあった。

「……俺を喰え」ハンクがかすれた声で言った。「喰うがいい」

「おまえは腐れ」俺は答えた。「誰もおまえを喰いはしない」

ハンクの形相が激しく歪んだ。怒りと、それに数倍する恐怖のためからだった。ハンクも人喰いのひとりである以上、輪廻を信じているに違いなかった。誰にも喰べられない人喰いは、無明の闇に落ちていくしかないのだ。

俺はハンクの苦悶をほとんど陶酔して見ていた。毒蛇の頭をつぶすのは誰にとっても快感なので

ある。

俺はうかつだった。ハンクを倒した陶酔で、背後から近づいてくる巨体に気がつかなかったのだ。

「う……」

俺は呻いた。物凄い威力を秘めた腕が、俺の喉にまきついてきたのだ。万力に締めつけられるに等しかった。脳の血液が熱く煮沸した。

俺はほとんど反射的に軀をよじり、渾身の力をこめて地を蹴った。俺と、俺の首を締めている奴はもつれて、川に転がり落ちた。

俺の首を締めつけている力がゆるんだ。俺は激しく咳こみながら、水のなかを転がった。

俺がどうにか立ちあがった時、相手の男もまた体勢をたてなおしていた。俺たちは三メートルほどをへて対峙していた。

「生かしちゃおかねえ」ザッグは呻いた。

「バラバラにしてやる」

ザッグの言葉は誇張ではなかった。彼の怒り、その膂力をもってすれば、俺をバラバラにするなどいともたやすいことだろう。——ザッグと互角にわたりあうにはあまりに非力に過ぎた。股の傷も再び出血を始めている。

先制攻撃をかけるしかなかった。

俺は後ろざまに軀を一転させた。充分に勢いのついた足がザッグの顎をとらえた。後ろ蹴りというやつだ。タイミングさえ充分にあえば、猛進してくる牛さえとめることができる。

ザッグの顎は粉砕された。歯と下顎の骨がけしとんだのだ。が——顔半分を柘榴に変えながらもザッグはひるもうとはしなかった。ひるむどころか、一歩を踏みだして、その右拳を俺の側頭に叩きこんできた。

たまったものではなかった。

俺の軀ははじきとばされた。川の水がクッションになってくれなければ、俺はしたたか地にたたきつけられて、しばらくは動くこともできなかったろう。耳孔から鮮血が噴きだすのを感じた。

まだくたばるのには早過ぎた。ふらつく足を踏みしめて、俺はようやく立ちあがった。

「いいぞ」ザッグが皮肉に言った。

「まだ楽しませてくれるというわけか」

夜闇に立つザッグの軀は、巌の安定を有していた。顎を砕かれたことに、いささかの苦痛も感じていないようだった。まれにこういう人間離れした男がいる。生まれながらに苦痛に鈍感なのだ。不死身といっていい。こういう化け物と争うことになった人間は、なかばは幽界に籍を移したも同然なのだ。

が、人間の軀には、鍛えて鍛えきれない部位がある。ザッグも男である以上は、男に共通した弱点から自由でいられるはずがなかった。

俺は突進した。川底にスライディングして、ザッグの股間を蹴りあげたのだ。俺の蹴りは確かに入ったはずだった。

が、次の瞬間、俺の躯は宙にかかえあげられていた。ザッグの耳ざわりな笑い声が闇をつんざいた。ザッグの両腕は俺の胴を締めつけていた。その両の肩が隆々ともりあがるのが見えた。

ベア・ハッグというやつだ。

俺は悲鳴をあげながら、自分の敗北をはっきりと覚っていた。——ザッグは股間に男を持っていなかった。女のなかには強姦よけのために、やすりで犬歯を牙のようにとがらしている者もいる。ザッグはそういった女のひとりに、男を嚙みきられたに違いなかった。

ザッグがハンクを殺されてそれ以上もなく凶暴になっているのは、必ずしも兄弟だったばかりではないようだ。おそらくハンクは、ザッグにとって夫の役割りもはたしていたのだろう。

——肋骨がみしみしときしみだした。時をおかず、俺は全身の穴という穴から鮮血を噴出させることになるだろう。

俺は死ぬのだ。

ふいに呼吸が楽になった。肺臓が蘇生の喜びに泣き声をあげた。俺の躯は川に落とされた。——しばらくは、何が起こったのか理解できなかった。極端な苦痛から解放されたことで、ただただ喘ぎ、水のなかでもがくのが精いっぱいだった。

俺はようやく立ちあがった。立ちあがった俺の視界に、ゆらゆらと川を漂い流れていくザッグの躯が映った。その背中に突きたっている金属製の矢が、俺の眼にはひどくたのもしいものに見えた。

俺は満身創痍という状態だったが、まだまだ憩いを求めるというわけにはいかないようだった。

夜闇を飛んできた一本の矢が、俺にごく間近い川面をたたいたのだ。

俺はとっさに背中を丸め、川岸に向かって急いだ。さらにもう一本の矢が俺の背中を掠めた。

ザッグをただの一発でしとめたほどの射手が、これほど不様に狙いを外すわけはなかった。狙いを外すからには、それなりの理由があるのだ。たとえば、俺を殺したくないというような理由が……。

川辺にたどりついた俺は、闇のなかをソロソロと這い進んだ。全身を襲う衰弱感に、俺はほとんど眠りこんでしまいそうだった。それにも関わらず、俺の唇には微笑が浮かんでいた。

弓矢の射手はあの女だ。俺に襲われ、この一年間を俺を殺そうとつけ狙っていたあの女である。どうやらあの女は俺にある種の感情を抱き始めているらしい。ザッグを殺し、俺を殺そうとしなかったのがなによりその証拠ではないか。未だ俺に矢を射かけてくるのは、その気持ちが彼女のうちでもはっきりとは意識されていないのだろう。

こうなって初めて確信できたのだが、俺のうちでも彼女の存在は大きく膨れあがっていたようだ。俺たちは紛れもなく恋人同志なのだ。

ただしお互いに名のりあうまでには、かなりに手荒い儀式が必要とされるようだ。通常ならこちらが圧倒的に有利だが、今の俺は小猫同然に非力となっている。下手をすれば、恋人に首を締められるというはめにもなりかねない。

俺は混濁する意識を叱咤して、闇のなかを這いつづけた。背後にまわりこむしか、俺が彼女に勝つ方法はなかった。

唐突に俺のうらで笑いが弾けた。なにがおかしいのか確と意識されないまま、俺は闇のなかで笑い声をあげていた。

鋭い風切り音が俺の耳朶を掠めた。とっさに頭をさげなければ、その矢は俺の喉を貫いていたろう。

俺はなおもクスクス笑いつづけながら、匍匐前進を開始した。

これだから、俺はこの時代が好きで好きでたまらないのだ。

青白い月

眉村　卓

1

妙に古めかしい感じの商店街であった。日おおいをかけた通りには、それぞれの店がせり出し、魚や野菜や乾物をところせましと並べ立て、声をはりあげている。そうした中にまじって、文房具屋や電器屋や古道具屋もあるのだ。

少し空腹をおぼえていたぼくは、そのあたりにあった中華料理屋に飛び込んでラーメンを食った。その中華料理屋にしたって、くすんだ店内に、黒光りする大きなテーブルが三つあるだけで、みんな相席で食べているのである。

食い終わったぼくは、また通りに出て、もう一度メモを引っ張り出した。

先輩の家への道順だ。

クラブへの寄付金を貰いに行くのである。

運動部なんかに席を置いていると、休日でもこういうことをしなければならない。OBの後援会費がないと、とても遠征や合宿は出来ないのだ。

それにしても、分りにくい道順だった。都心からやや離れた駅で地下鉄を降り、階段をあがると、すぐに商店街の入口がある。そこをずーっと抜けて、二つ目の角を右に曲ってしばらく行けば、商店街が終わって、踏切になる。踏切を越えて五十メートルばかり進んでから、タバコ屋のある辻を左に入ると、もう見えているはずだ——と、電話で先輩は説明し、ぼくはメモしたのだった。

だが……この商店街、あきれる程大きいのである。どこが二つ目の角なのか……さっぱり見当がつかない。だいたいが、ぼくは、このあたりへは一度も来たことがなく、かつ、こんなに大きな昔風の商店街というものに、なじみがなかった。迷うのが当り前だ。

もう一度、その先輩の家へ電話をして聞いてみよう、と、ぼくは思った。

けれども、いくらポケットをさぐってみても、その電話番号を控えた手帳がないのである。そういえば……道順をメモしたときに、手帳を下宿の机の上にほうり出して来たのかもしれなかった。

ぼくは舌打ちして、商店街をうろうろし、試行錯誤を覚悟の上で、そのへんの角を曲った。

曲ってみると、やはり商店街は、ずっと先迄続いている。

ぼくはどんどん歩いた。

歩いているうちに、どうやら商店街のはし迄来たらしい。おまけに、うまい具合に、そのむこうに踏切がある。

しめた。

ぼくは商店街を出ようとして、ふと足をとめ、顔をしかめた。

雨粒が、ぽつりと降りかかって来たのである。

とうとう降って来やがったか、と、ぼくは手にしていた傘のボタンを押した。ばたんと音を立てて、傘は開いた。

踏切を越える。

進みながら、ぼくは、そのあたりの家々というのが、みんな、ひどく古風なのに気がついてい

た。何だか、昭和の初期か大正時代の写真を連想させるのだ。

さっきの商店街といい、ここいらの家並みといい、きっとこの界隈は、古い土地柄なのに違いない。

傘が鳴りはじめた。

雨がにわかに強くなって来たのだ。

ひどい雨だ。

豪雨だ。

ぼくは傘の柄を握りしめ、前方をすかすようにして、足を動かした。

そのぼくの視野に、こっちへダダッと駆けて来る者が映った。

女だ。

それも、傘を持たず髪を何かでおおっているわけでもない。雨中を猛然と突っ走って来て……ぼくに、しがみついたのだ。

「どこへ行ってたのよ！」

と、女は鋭い声を出した。

「え？」

ぼくは女を見た。

知らない女だ。派手な顔立ちで、美人といえないこともない。齢は……二十二か三というところだろう。

「どこをうろうろしていたの？」

女は、傘の柄をつかんだぼくの手首を押えて、早口でささやくのである。「あんた、自分の立場が分ってるの？　こんな、目につくところで……」

「あなたは――」

「早く！」

女は、ぼくをひきずるようにして、板塀の上から松の枝か何かが出ている、その陰に連れて行った。

そこで、ぼくの傘をねじ向けて、ふたりの顔をかくすようにしながら、低い声で文句をいうのだ。

「あんた……ほんとに、気をつけなきゃ駄目じゃないの！」

「待って下さいよ」

ぼくは、雨がばしゃばしゃとかかるので何とかして傘を元の位置に戻そうと力をこめた。女は抵抗した。「あなたは……どなたです？　ぼくを誰かと間違えてるんじゃないんですか？」

「……」

女ははっと目を見開き、傘から手を離した。その顔が歪んだ。

「そんな変ないいかたをして……わたしがいやになったの？」

たちまち、目に涙があふれ、頬をつたって流れはじめた。

ぼくは狼狽した。

「ちょっと……」
いいかけたが、女は恨めしそうにぼくをにらみつけ、声を忍ばせて、手ばなしで泣きつづけている。
雨が、さらにひどくなって来た。
傘をさしていても、しぶきで濡れてしまう程だ。道は雨滴のはね返りで、至るところ白い草が生えているようだった。
このまま、こうしているわけには行かなかった。
「あの……どこかそのへんで、落ち着いて話しませんか？」
ぼくはいった。「そのへんの……ああ、あっちの商店街の中の喫茶店ででも……話しましょう」
女はかぶりを振った。
「ね！」
ぼくはうながした。
「でも……あぶないわ。あんなところ」
女はまだしゃくりあげながら、それでも返事をした。
「大丈夫ですよ」
何が大丈夫なのか、自分でも分らなかったが、相手の思い違いを訂正するためには、何としてでもそれが出来そうな場所へ行かなければならなかった。こんな土砂降りの道ばたではどうにもならないのであった。

入ったのは、商店街のかかりにあった喫茶店である。王朝風の外見にたがわず、内部も荘重で、薄暗かった。
ぼくたちは奥の、あまり人目につかない席で向かいあった。女がその席にしようと主張したからである。
コーヒーを頼んで、それが運ばれて来る迄、女は黙っていた。
それから、呟いた。
「どうして、あんなこと、いったの？」
「待ってくださいよ」
これでもう、二回目か三回目の台辞だと思いながら、ぼくは答えた。「あなたは人違いをしているんだ。ぼくの名前は――」
「橋本健治（はしもとけんじ）じゃないの。ケンちゃんじゃないの！」
女が即座にいい返した。
ぼくはぽかんとして、相手をみつめた。
ぼくの名だ。
だが……。
この女がこう迄いうのだから、たしかにぼくは、彼女の知り合いに似ているのだろう。
が、それは偶然の結果である。

そして、女のいった名前が、ぼくのと一緒だというのも、これまた偶然である。

そのはずなのだ。

ぼくはこんな女を知らないのだ。

他人どうしなのだ。

それを立証しなければならなかった。

「でも、ぼくはQ大学の——」

いいかけると、女は制した。

「いいのよ」

「え？」

「あんたはケンちゃんなのよ。それでいいんだわ」

女の頬には、微笑さえ浮かんでいた。「わたし、やっと分った。あんたがあんなことをいったのは、わたしを巻き添えにしたくないので、知らんふりして、それで最後迄通すつもりだったのね？」

「……」

いよいよわけが分らなくなって来た。

「だけど、そうは行かないわ」

と、女。「あんなことになったのは、わたしにも責任があるんだもの。第一、あんただけに全部をひっかぶせるなんていやだと……わたし、いったはずよ」

「……」

ぼくは黙っていた。

この女、ひとり決めで、ぼくを自分の知り合いにしてしまっている。そして、彼女の知り合いというのが、何かをやらかしたのだ。

あんなこと、と、女はいった。

あんなことって、何だ？

「だから、もういいの」

女はいっていた。「はじめの約束通り、W温泉へ行きましょう」

「W温泉？」

「一緒に逃げるのよ」

「逃げるって——」

ぼくは、人違いをされているんだ。この女の知り合いが何をしたのが分らないが、ぼく自身はそんな、追われるようなことはしていないのだ。といおうとしたが、出来なかった。

女が、目配せをしたのである。

「振り向いちゃ駄目！　何気なく」

いわれて、ぼくは、店内の装飾でも眺める格好で、女の視線の方向を見た。目つきの鋭い男がふたり、空席を探しながら歩いてくるところだった。

「あれ、刑事かも分らない。そんな気がする」

女はささやいた。「もう、死体が発見されたのかもしれないわ」

「……」

ぼくは茫然とした。

死体！

では……この女の知り合いは、殺人をしたのか？

「出ましょう」

と、女。

「ぼくじゃない」

思わず声が出ていた。「ぼくはそんなことをしてやしない」

「おかしなこといわないで」

「しかし」

「早く」

女の切迫した調子にうながされて、ぼくはとにかく席を立った。

レジに来て、ぼくがコーヒー代を払おうとする前に、女は自分の財布をバッグから出した。

女が財布から出したのは、薄桃色の、見たこともない紙幣だったのである。そして、レジの係は、その紙幣を当り前のように受取って、女におつりを渡した。おつりの硬貨は……みな四角形であった。

ぼくはその場に突っ立って、やりとりを見ていた。

どういうことだ？

あの金は何だ？

「さあ」

女が、ぼくの腕をつかんだ。「ぼんやりしてないで……出ましょう」

ぼくたちは外へ出た。

2

喫茶店を出たものの、女は依然としてぼくと組んだ手を、離そうとしなかった。押しやるようにして、商店街の中を歩いて行くのである。

ぼくは、ますます、どうすればいいのか分らなくなっていた。

あの金は何だ？

あんな金が通用するのか？

「こっち」

女が、手に力をこめて、ぼくを右に曲る辻へと誘導した。

「どこへ行くんだ？」

ぼくがたずねると、女は、何を分り切ったことを、といいたげに答えた。

「地下鉄の駅よ」

「……」

「地下鉄でターミナルへ出て、そこからW温泉行きの列車に乗るんじゃないの」

「ね」

ぼくは訴えた。「ね、もうたくさんだ。もうやめてくれ。ぼくは、あんたがそうだと思っている人間じゃないんだ。ぼくは——」

「黙って」

女は制し、商店街を出ると、ぼくの傘をひったくってひろげ、すぐ前の地下鉄の入口へと、ぼくをぐいぐいと連れて行く。

地下鉄の階段に来た。

ぼくたちは階段をくだった。

降りたところは、切符売場と改札口になっている。切符売場といっても、自動販売機なのだ。いつも見慣れたかたちの——。

違う。

その自動販売機は、ずんぐりした、丸味を帯びた変な型なのだ。

新しい型なのかもしれない。

「こまかいの、足らないわ」

女が自分の手もとを見てから、ぼくに問いかけた。「あんた、持ってない？」

「ぼくが？」

ぼくは、ポケットを探そうとして、はっと気がついた。

ぼくの持っている金は、いつもの金なのだ。あんなおかしな桃色の紙幣や、四角い硬貨などではない。

「ないの？」

と、女。

ぼくはポケットから、硬貨をつかみ出した。つかみ出しながら、自分でも顔色が変わるのを感じていた。

ぼくの掌にあるのは……四角い硬貨なのだ！

女はぼくの手からその硬貨を何枚かつかみあげ、自動販売機の前に行った。

ぼくは残った硬貨をみつめた。

四角いのだ。

奇妙な模様のついた、四角い硬貨なのだ。

と、すると……。

ぼくは尻ポケットの定期入れをひっぱり出し、中に入れてあった何枚かの紙幣をあらためた。

薄桃色だった。

薄桃色の……禿頭の男の肖像のある紙幣なのだ。

こんな……。

こんなことがあっていいのか？

さっき、あの中華料理屋でラーメンを食ったとき、ぼくはたしかに、ふつうの紙幣――千円札を出したのだ。その千円札で、釣銭にふつうの硬貨を貰ったのだ？

「しっかりしてよ！」

ぼくの傍に戻って来た女が、声を殺してささやいた。「そんなにぼんやりお金を見て……お金のどこが珍しいの？」

「……」

「ほら、地下鉄が来たわよ」

女は二枚の切符を手に、ぼくの先に立って改札口を抜けた。

一瞬、ぼくはきびすを返して、逃げ出そうか、と考えた。こんな女に引っ張り廻されて逃げ惑う、それもどうやら殺人犯人として逃げなきゃならないなんて、そんな馬鹿な話はないと思ったのである。

しかし、ここであんな妙なお金が通用していることを知った今では……おまけにぼくのポケットにもその金があったのを知った今では……事情は別だった。ぼくには何がどうなっているのか、わけが分らないのだ。わけが分らぬ以上、まだしばらくは、この女について行くのが安全である。自分ひとりではどんなへまをやらかすか分らないのだから、そうすべきである。

と、いうわけで、ぼくは女に続いて改札口を通った。

地下鉄がすべり込んで来た。

ぼくは眉をひそめた。

何だ、この地下鉄は！

ぼくの知っている色でない。この地下鉄は真黒なのだ。それにヘッドライトも、三つもついているのだった。

ドアが開いて、ぼくたちは乗り込んだ。

地下鉄はきしみながら動きだす。その音はいつもの地下鉄であった。

車内吊りの広告もあった。

デパートや、衣料メーカーや、カメラの広告である。

その半分は、おぼえのある名前だった。

あとの半分は、聞いたこともないものである。

だが、聞いたことがないといっても、それはぼくだけの問題である。ぼくはこうした広告を出している会社や製品の銘柄をいちいち覚えているわけじゃない。どちらかというと、ぼくは、運動部などにいるせいで、そうした事柄にはくわしくなかった。

それとも……やはり、本当は今迄なかった名前なのかな？

「きょろきょろしないで」

女がいった。

それから、ささやく。

「さっきの喫茶店の男たち、違っていたのかも知れないわね。追って来ていないみたいよ」

「そうだね」

ぼくは応じた。
地下鉄は走りつづける。
二つ目の駅を出て、またスピードを落としにかかったとき、女はぼくにいった。
「分っているんでしょうけど……次よ」
女がそんな表現をしたというのは、ぼくがどうやら、彼女の知っている男のいつもの態度と違うことに気づきはじめたせいではないだろうか——と、ぼくは思った。だからこそ、そんな、念を押すようないいかたをしたのだ。そうに決っている。
と、なると、多少、希望を持ってもいいのではなかろうか？
そんなことを考えているうちに、地下鉄は停車し、ぼくたちはホームに出た。
ターミナルのその駅名には、おぼえがあった。
構内の配置も、記憶の通りである。人々が往来し混雑しているのも同じだった。
女は、その人ごみの中を、さっさっと歩いて行く。
ぼくは肩を並べたり、おくれたりしながら歩きつづけた。
女は国鉄の窓口で切符を買った。
すぐに列車に乗るのかと思ったら、そうではなかった。
女は、ぼくに切符一組を渡して、いったのである。
「別々に乗りましょう」

「……」
「発車迄時間があるし……わたし、そこのデパートで、買物をしてこなくちゃ」
「買物？」
「手ぶらに近いこんな格好で、Ｗ温泉のホテルに入れないでしょ？　変な顔をされるわ」
と、女。「あわてて出て来たから、何も持って来なかったけど……何か適当な旅行かばんでも仕入れて来るわ」
「……」
「気をつけてね」
いうと、女は、駅の構内につづいたデパートの入口に向かった。人ごみにまぎれて、その姿は、すぐに見えなくなった。
ぼくは、渡された切符に、視線を落とした。
Ｗ温泉行きの乗車券と急行券、それに座席指定券である。ぼくがおぼえている国鉄の切符より一まわり大きく、派手な模様が刷られていた。が、ちゃんと、日本国有鉄道としるされている。
壁の時刻表を仰ぐと、なるほど、その列車が出る迄に、四十分以上もあった。と、いうより、Ｗ温泉に行ける急行で、それより早いものはないのである。
ぼくは切符類を胸ポケットにおさめ、周囲を見廻した。
相変わらず人々が行き来しているターミナルの構内だ。その光景は、いつもと少しも変わらない。何も妙なところはないのである。

いや。
そうでもなかった。
何となく印象がことなるのである。ぼくはこのターミナルに、そうたびたび来たわけではないが、どこか、いつもと違うのだ。
その理由を、ぼくはすぐに発見した。
帽子だ。
行き交う男女の、その三分の二迄が、帽子をかぶっているのだった。といっても、同じ型の帽子ではなく、それぞれ、着ているものに合せたさまざまな帽子だが……こんな風に大勢が帽子をかぶっているというのは、ぼくには異様な感じであった。
それにしても、と、ぼくは、何となくぶらぶらと歩きはじめながら、やはり考えずにはいられなかった。そういえば、こんなことになってから、ひとりでゆっくり考えるのは、これがはじめてである。
いったい、どうなったのだ?
ぼくは、どうなったのだ?
ぼくは、どこか別の世界へまぎれ込んだのであろうか?
もしも、周囲の状況が、ぼくの記憶しているのと全くことなっていたならば、ぼくは一も二もなく、そう信じたところである。が、こんな風に、前の通りのものと知らないものが入りまじっていると、どう解釈したらいいのか、見当もつかないのだ。

それとも、前の通りというそれ自体が錯覚で、前からこうだったのか……?
いいや違う。そんなはずがあるものか。ぼくはそこ迄ぼけてはいない。ぼくはまだ若いのだ。現役の学生なのだ。
歩きながら、ぼくはひょいと、くず入れの上にある鏡を覗き込んだ。
間違いない。
ぼくの顔なのだ。
それ見ろ。
変わったのは周囲である。ぼく自身ではないのだ。
でも、何が変わったのだろう。
どういう基準で変わったのだろう。
分らなかった。
すると、ぼくの周囲だけでなく、世の中も変わってしまったのかな?
そこで、ぼくは新聞を買うことを思いついた。
金はあるのだ。見慣れぬ金だが、ぼくは持っている。
新聞の売り場に近づいたぼくは、ポケットから硬貨を出して単位を調べた。四角い硬貨には、百円、五十円、十円と、数字だけはなじみのあるものが打ち出されている。ぼくは売り場の値段表を見て、夕刊を二紙ばかり買った。
それから、名店街の入口附近の、人待ち顔の男女がたたずんでいるあたりへ行って、夕刊をひろ

げた。

何も妙なところはない。例によって政府がどうこうとか、経済指標が何とかといった、退屈な見出しが並んでいるばかりだ。ま、これだって詳細に読めば、内容は変わっているのかも分らないが……もともと、あまりそんなものに興味がないぼくには、似たようにしか見えなかった。

ページをひるがえして、三面記事に移る。三面記事も同様だった。マンションの爆発事故や、金庫どろぼうや、殺人の記事……。

殺人？

ぼくはその記事を読んだ。

きょうの昼前、バーの経営をしている五十何歳かの男が自宅で鈍器ようなものでなぐり殺されているのを、訪ねて来た人が発見した。警察の調べによると、推定死亡時刻は午前三時頃。その二時間ばかり前に近所の人が、被害者が内妻の竹田てるよさん(二三)と若い男の三人で帰宅したのを目撃しており、その後けんかになって、殺されたものと思われる。現場に残された、凶行に使われたと思われる花瓶からの指紋検出によってその若い男は、被害者の経営するバーでアルバイトをしていたQ大学生、橋本健治(二〇)と判明した。橋本は以前からてるよさんと深い仲になっているのを、被害者になじられ、口論のはて、凶行に及んだものと警察では見ており、橋本と、姿を消したてるよさんの行方をさがしている……。

3

ぼくはだいぶ長い間、その場に突っ立っていたように思う。

けれどもやがてショックが薄らぎ、まわりの人々が目に映るようになって来るとともに、ぼくの頭は、しだいに高速で回転しはじめていた。それ迄のぼくは、ことのなりゆきに驚きながらも、あの女――竹田てるよというのだろう、あの女のペースに乗って、どっちかというと、のんびり構えていたところがあった。

それではいけないのだ。

ぼくは、自分の置かれている立場を、はっきりと悟った。

ぼくがどういうわけでこんな状況の中にほうり込まれたのかは知らない。

ぼくは、殺人なんかしていない。

殺したのが、それもQ大学の学生の、橋本健治だというのは偶然である。その殺人者とぼくが瓜ふたつらしいというのも、これまた偶然である。

だが、客観的に見る限り、ぼくがいくら真実をいおうと、誰も信じやしないだろう。ぼくはたしかにQ大生の橋本健治ですが、別の橋本健治です。そいつにそっくりでも別人なのです、などといくら主張したって、鼻で笑われるのがオチである。

ぼくは殺人者として、つかまえられるのか？

馬鹿な。
そんな馬鹿なことがあっていいのか？
何とかしなければならない。
何とか――。
ぼくの無罪を立証するためには、と、ぼくは必死で考えた。
一番いいのは、その殺人者である。そいつがみつかりさえすれば、警察だって、ぼくのいいぶんを聞いてくれるだろう。あのてるよという女がそうはさせないかも知れないが……それなら、突き出さない迄も、そいつの存在を警察に認めさせればいいのだ。
とはいうものの、そいつはどこにいる？　あの女が犯行の共犯者なのか、犯行を見ていただけなのか、それはぼくには不明だが、あの女がぼくをそいつだと信じ込んでいる今の状態では……あの女にさえどこにいるか分らないそいつを……ここの事情をよく知らないぼくが探し出すなんて、到底不可能なのであった。
待て。
指紋というものがあるではないか。
記事によれば、警察は、現場に残された指紋によって、犯人が橋本健治だと断じたようである。指紋で誰だか判明するというのだから、その橋本健治は、これ迄にも警察につかまるようなことをしたのに違いないが……そいつの指紋とぼくの指紋とはことなっているはずだ。同じ名前であっても指紋が違えば別人だと、そう納得させることが出来るのではないか？　今からすぐ警察へ駆け込んで――。
ぼくは、首を横に振った。
まだ早い。
それは最後の最後の手段である。いったん警察につかまってしまえば、あと、自由に調べてまわったり、そいつを探したりは出来なくなる。
それに……あり得ないことだが、そいつの指紋が、ぼくのと一緒だったらどうなる？　同じ指紋を持つ人間なんて、何億か何十億にひとつという確率しかないというが……こんな奇妙な事態がおきている今、そうならないという保証はないのだ。常識では考えられない状況下にあるのだから、そんな、あり得ないはずのこともある得るかも知れないではないか。
ぼくは、ぼく以外に同じ名前でそっくりの人物がいるというのを立証するのは、とりあえず断念した。
では、他に方法はないのか？
あった。
アリバイだ。
犯行のあった時刻に、別の場所にいたのを証明すればいい。
犯行時刻は、記事によると、午前三時頃となっている。いや、それは推定死亡時刻だ。なぐられたのはもっと前で、あと、苦しんで死んだのかも分らない。が、それより、二時間前以内であるのもたしかである。つまり午前一時から三時の間だ。

その時間にぼくが何をしていたかというと……問題はなかった。ぼくは下宿で寝ていたのだ。練習でへとへとになって、夕方帰って来てから近所の店で食事をして、本を読みかけたものの、たしか、十時頃には床にもぐり込んで……熟睡していたのである。

そうなのだ。

そして、下宿人たちが寝てしまうと、下宿のおばさんは表の戸に錠をかけるのがつねであった。そうなると、いちいち頼み込まないと、外出もままならないのだ。

その下宿のおばさんなら、ぼくがゆうべから朝迄、外へ出なかったことを証言してくれるだろう。

おばさんはこのニュースを、テレビか夕刊で知っただろうか？　知って、今頃は、ぼくと同姓同名の、しかも同じQ大生が犯人らしいというので、面くらっているかも分らない。

おばさんに電話しよう。

ぼくは公衆電話のコーナーへ行った。公衆電話は緑色で四角い硬貨を料金孔に入れるのである。そのことが、また、何となくいやな感じだったが、構わずダイヤルを廻した。

呼び出し音に続いて、受話器をとりあげるひびきが伝わって来た。

「もしもし」

相手の聞が聞こえた。

下宿のおばさんだった。番号は前の通りで良かったのだ。ほっとしながら、ぼくはいった。

「もしもし……ぼく、橋本ですが」

「……」

おばさんの、息を呑む音がした。

「もしもし。聞こえてますか？」

「橋本さんね？」

おばさんは、やっと応じた。

「橋本さん……今、どこにいるんです？」

「ぼくですか？　ぼくは――」

いいかけて、ぼくは、やめた。

おばさんの声とは別に、低い男の声が耳に入って来たのである。それもどうやら、話を引きのばせというような意味の言葉なのだ。

「もしもし、橋本さん？　どうしたんです？　どこから掛けているんです？」

「……」

ぼくはそのまま受話器を置いた。

おかしい。

あのおばさんの反応は、ただごとではなかった。

そして、あの男の声は……やはり警察なのか？　下宿へぼくが連絡して来るのを待ち構えていたのか？

あの下宿は、ぼくの下宿なのだ。

殺人犯である橋本健治のすまいではないはずだ。

なのに、どうして？

分らない。

分らないが……こうなれば、どうしようもなかった。うかつなことは出来なかった。

どうする？

これからどうする？

何とかしなければならないが……どうすればいい？

そのぼくの目が、構内の時計をとらえた。あと五分で、女が切符を買ってくれた急行列車が発車する。

時間をかせごう、と、ぼくは思った。とりあえず女と同行して逃げ、その間に対策を練ろう。それ以外に、今のところ、方法はなさそうである。

ぼくは公衆電話を離れ、何気ない足どりで改札口に向かった。楽なことではなかった。ともすれば走り出しそうになるからだ。さっき迄は、ぼくはまだ本当にせっぱつまったという感じではなかった。何とかなると信じていたのだが……今や、見えない包囲の輪が、じりじりとぼくに向かってちぢまって来るような気がするのである。あきらかにぼくは、自分自身でも、追われる人間になりはじめていたのだ。

ぼくが列車に乗り込み、切符にしるされた番号の席に行くと、女はもう、ふたり掛けのシートの

その窓側にすわっていた。

眉毛迄かかる帽子をかぶっている。

「おそかったわね」

女はささやくと、立って網棚に手を伸ばした。網棚には買って来たらしい旅行かばんやコートの類が載っている。その中から女は黒っぽいチロリアン・ハットを取って、ぼくに渡した。

「かぶって」

女はいう。

「しかし」

ぼくはためらった。これ迄に帽子などかぶったことがないのだ。「こんなもの、似合わないんじゃないかな」

「ケンちゃん」

女は鋭い目になり、声を殺していった。

「似合う、似合わないの問題じゃないでしょ」

「……」

「なるべく深くかぶるのよ」

「わかった」

ぼくは頷いた。

女は、帽子で顔をかくせといっているのである。

ぼくは帽子を目深にかぶった。少し大きいので、いやでもそうなるのだ。

列車が動きだした。

女は雨ふりしぶく窓の外を眺めている。

出来ることならぼくは、女に、今度の事件の詳細を聞きたかったが……無理であった。いつの間にか前後の席も、通路をへだてた隣りのシートも満席になっているのである。そんな中で人殺しの話は出来なかった。

「少し寝たら？　わたしも眠るから」

女が、ちらりとこっちを向いていう。ぼくはまた頷いた。

そうするしか、なさそうである。

それに、眠ってしまっても、この女がいる限り、大丈夫のようであった。彼女が犯行にさいしてどんな役廻りをつとめたのかぼくには知る由もないが、ぼくを助け、ぼくと一緒に逃げて行くつもりなのは、あきらかである。そして、そのために必要なことを次々とやってくれているのだ。ひとまずここは彼女にまかせておいても良さそうであった。

ぼくは、帽子のひさしをさらに深くおろすと、シートにもたれ、腕を組んで、目を閉じた。

4

W温泉についたのは、夕方である。

雨はもうやんでいた。

「あそこの案内所で、泊れる旅館かホテルがないか、聞いてみましょうよ」

女がいう。

「予約をしてなかったのか？」

この女にしては、めずらしく手ぬかりなことだと思いながらぼくはたずねた。

女は、あきれたというようにぼくを見た。

「予約するって、どこから？　こっちの電話番号をいわなきゃならないのよ。あの家の番号をいうの？　そうは行かないでしょ。といって、嘘の番号をいって、確認でもされたらどうなるのよ」

「……」

「あんたは、わたしにまかせておいたらいいのよ」

それから女は先に立って、案内所に歩み寄った。

案内所の係員は、ぼくたちを、奇妙なカップルだといいたげにちらちらと観察しながら、それでもあちこちに電話して、一軒の旅館を予約してくれた。

「少し遠いが……ま、岬に近いから、眺めはいいでしょう」

係員はそういった。

ぼくたちは、タクシーに乗った。

たしかに、ちょっと遠かった。暮れかけた海に沿って山道を走り、樹々の間の道路を抜けて、やっと車はその旅館に着いた。

出迎えた旅館の人は、いやに愛想が良かった。
「お部屋へ案内しましょう。どうぞおあがり下さい」
いいながら、かばんを取る。
そのとき、ぼくは、つないでいた女の手が、ぎゅっと力を入れるのを感じた。
反射的に目をあげると、帳場が映った。
上半分をガラスで仕切った帳場の中には年配の女がいて、こっちを上目で窺(うかが)いながら、しきりに電話で喋っているのである。
手が廻っているのだ！
帳場の女は、警察に通報しているのだ！
すでに、ぼくのつれは足をとめ、さりげなくいいだしていた。
「済みませんが、ちょっとそのへんを散歩して来ますから、荷物だけ先に部屋へ入れておいてくれません？」
相手の返事も待たず、女は、ぼくの手をとったまま、きびすを返した。
「あ、お客さん！」
案内しかけていた男が叫び、帳場の中から女が飛び出して来たが、ぼくたちは知らん顔で、玄関を出た。
おもては、もう暗くなっている。その山道を、ぼくたちは歩いた。カーブしている地点があって、そこを過ぎると旅館のあかりは見えなくなった。

ふたりは同時に走りだした。
走って……そのうちに、分れ道があらわれた。
「ここよ」
女はとまり、分岐点に立っている木札を示した。山道の外灯の光で、岬へ一キロとしるしてあるのが読めた。
「こっちへ行くの」
女はまたぼくの手をつかみ、そちらへと進んで行く。
粗末な地道で、外灯もなかった。おまけに雨あがりなので、歩きにくいことおびただしい。
「きっと、さっきの案内所の奴が、旅館に連絡したのよ。――あぶないところだった」
女はささやく。
暗かった。
そのうちに、何か、どうどうというひびきが聞こえて来た。
樹々がまばらになった。
なおも行くと、ぼくたちの行く手に海があらわれた。天にまだぼんやりと残っているあかるさを受けて、一面にくろぐろとひろがっている海である。
ぼくたちは、その海に面した高い崖の上にいた。どうどうというひびきは、崖に波がぶつかっては引いて行く音なのであった。
「すわりましょう」

女が呟いた。

ぼくたちは、足もとの岩土の上にハンカチをひろげ、海に向かって腰をおろした。目が、少しずつ慣れて来る。

「ケンちゃん」

女が、ぼくにもたれかかって来た。ぼくに、ひしとすがりついた。

ぼくは、あわてた。

ぼくは、女を抱き返すべきであったろう。この女の愛人というか情人なら、そうするところである。

だが、ぼくには出来なかった。相手のはげしい心情を感じると同時に、そんな経験もなく、恐怖すらおぼえたぼくの身体は、震えはじめていた。

「震えてるのね」

と、女はやさしくいった。

「……」

「やっぱり、あんたにあんなことをさせたのは、いけなかったのね」

女はささやくのである。「わたし、あいつが大嫌いだった。だから殺してといったけど……あんたみたいなうぶな人に、そんなことを頼んじゃいけなかったんだわ」

「……」

ぼくは不器用に女の身体をかかえたまま、何も言えなかった。

「ここへ来て、わたしがW温泉へ行こうといったわけ、分ったでしょ？」

女は続けた。「わたし、前に一度ここへ来たことがあるの。そのとき聞いたのよ。ここから飛び降りて助かった人はいないって」

「……」

ぼくは黙っていた。

この女が何を考えていたのか、しだいにぼくにも分りはじめていた。

女は死ぬ気なのである。

それも、ぼくと一緒に……この崖から飛び降りて死ぬ気なのだ。これは、そのための道行だったのである。

ぼくは死にたくはなかった。

そんなおつき合いはごめんだった。

「出来ることなら、旅館でおいしいものを食べて、ゆっくり寝て、それからここに来たかったわ」

女は、ぼくの胸に顔を埋めていう。「でも、もうどこも手が廻ってるんでしょうね。わたしたちには行くところがないのよ」

「……」

女の髪の香りを吸いながら、そして、それはたしかに快い感覚だったが……ぼくは何とかしてこの窮況から逃れる方法はないものかと、考えをめぐらせていた。

女が顔をあげて、ぼくを見あげた。

ぼくは、自分の気持ちを悟られたのかと、ぎくりとしたが、そうではなかった。

女は、咎めるように呟いたのである。

「そういえば、あんた、あの商店街で落ち合ってから、一度もわたしの名前をいってくれなかったわね。どうして？」

「……」

ぼくは不得要領に、かぶりを左右に振った。名前をいうも何も、知らなかったのだと――そう本当のことをいえば……ますます厄介な事態になりそうだったのだ。

「それに、きょうのケンちゃん、たしかにおかしかったわ。何だか、しょっちゅうぽかんとしていて……」

女はいう。「それもこれも、やはりショックが大き過ぎたのね。あんたにとっては……つらいことをさせてしまったわ。ごめんなさい」

「……」

「呼んで」

女は、腕に力をこめた。「ね、ケンちゃん、わたしを呼んで」

拒める雰囲気ではなかった。ぼくは新聞記事の記憶をひきずり出して、いった。

「てるよさん」

「いや」

女は、はげしく首を振った。「そんな他人行儀なの……いつものように、てるちゃんといって！」

「――てるちゃん」

「ケンちゃん！」

ふたりは抱き合った。

「ね、お願い」

女がいう。「飛び降りる前に……もう一度愛して」

「……」

ぼくは当惑した。そこ迄は演技は出来なかった。それも、死ぬための儀式なのだから、なおさらだった。

「どうしたの。死ぬのがこわくなったの」

女がぼくを離し、いやにゆっくりとたずねた。

「そういうわけじゃない」

ぼくはいいだした。説得するなら今しかないと思ったのだ。「何も今すぐ死ななくても……何とかなるんじゃないだろうか？　うまく逃げれば――」

「あんた」

女の声の調子が変わった。「あんた……あれほど固く約束したのを……一緒に死のうといったのを……忘れたの？　わたしが嫌いになったのね？」

「違う」

「あんたひとりで逃げる気でしょ。そうはさせないわ。そんなことをさせて、たまるもんか！」

女の形相は一変していた。妖怪さながらであった。目を光らせ、歯を剝き出して、つかみかかって来た。

自分でも気のつかぬうちに中腰になっていたぼくは、あやうくそれをかわした。かわしたが、完全にではなかった。ぼくの右足首が女につかまれて、ぼくは仰向けに転倒した。

女はのしかかって来た。ぼくの頭といわず顔といわずひっかきながら、わめいた。

「死ぬのよ！　あんた、わたしと死ぬのよ！　逃がしゃしないわ！　あんたはわたしのものなんだから！」

ぼくは両手を突っ張り、横にころがって女から離れた。

逃げるのだ。

逃げるほかない。

駆け出そうとしたぼくに、女がタックルして来た。

ぼくはぶっ倒れた。

女の手が、ぼくの上衣にかかった。上衣が裂けた。

ぼくは無我夢中で、四ツン這いになって逃げた。

またもや女がむしゃぶりついて来る。

ぼくと女は一体になったまま、山道をごろごろところがった。

「死ぬのよ！　一緒に死ぬのよ！」

女の金切声が聞こえた。

やっとのことで、ぼくは女を突っ放すのに成功した。

走った。

一、二度、足をすべらせてひっくり返ったが、すぐに跳ね起きて、走りつづけた。

「待てエ！」

女の声が追って来る。

先刻の分岐点にたどりついた。

そこで振り返る。

すぐ近くに女は来ていた。髪を振り乱し、顔をひきつらせ、目を一杯にみはって、走って来ていた。

それだけで充分だった。ぼくは自分でも何をいっているのか分らない叫びをあげながら、駆けつづけた。駆けながら、その方向が、例の旅館へではなく、反対側に行っていることに気がついたが、もはや、どうにもならなかった。女は追って来るのだ。逃げるほかはなかった。

山道を……走った。

樹々にはさまれた道を走り……やがて、片側にまた海が見えるようになった。

ぼくは、はあはあと息をつきながら、スピードをゆるめた。運動で身体は鍛えてあるつもりだが、さすがにこれだけ長く全速で走ると、心臓が保たない感じである。

もう、これで、だいぶ女を引き離しただろう。

うしろを眺めると、長い間隔を置いてともる外灯は、山道を照らしているばかりで、女の姿はな

かった。
女は、へたばったのだ。
追ってくるだけの体力がないのだ。
いや。
女が現れた。
すさまじい顔つきで、泥にまみれぼろぼろになった服をまとい、はだしで、よろよろとこっちへやってくるのである。片手を突き出し、目をひたとこちらに据えて……追って来るのだ。
「待って」
女は、しわがれ声でぼくを呼んだ。「ケンちゃん……待って……逃げないで……死ぬのよ！　一緒に死ぬのよ！」
それは正に鬼であった。
暗い、外灯のあかりに浮かび上り、よたよたと迫って来る鬼なのだ。
女は、もう、五十メートル程手前迄来ていた。
凍りついたようになっていたぼくは、はっとわれに返った。
つかまるわけには行かない。
死にたくはなかった。
あの人と心中する気はなかった。
ぼくは前に向き直り、再び走りだした。

「待って」
女の声。
ぼくは走った。
女の声がだんだん遠くなる。
それでもぼくは走りつづけた。そうせずにはいられなかった。すぐ背後に女のあの顔があるような気がして、足がひとりでに動くのだった。
ぼくは何かを叫んでいた。その叫び声が助けてくれ、助けてくれ、という言葉だと、ようやく自覚したとき、前方からやって来る車のヘッドライトが見えた。
ぼくは道の中央にすわり込み、手をあげていった。
「助けて」
車が停止した。
顔をあげて、ぼくは、その車の上方に赤いランプが明滅しているのを知った。
パトカーだ。
その車は、パトカーだったのだ。
パトカーから、ふたりの警官が降りて来るのを、ぼくは見た。ふたりとも、黄色と黒色のゼブラ模様の、奇妙な制服を着ていたが、警官に違いなかった。
警察につかまるのだ、と、ぼくは思った。
警察に、殺人犯としてつかまるのだ。

逃げよう。

今逃げれば、逃げられるかも知れない。

だが。

逃げるといっても、道は、今来たあの山道しかないのである。あの山道には、あの女がいて、こっちへこっちへと、ぼくを追って来ているのである。

彼女と出会うのは……耐えられなかった。それに彼女は、ぼくと一緒に死ぬつもりなのだ。死ぬためにそっちへ逃げるのはごめんだった。

といって、ひとりで山の、森の中へ逃げ込んだところでどうなる？　そんな場所でどうやって生きて行けるのだ？　どうせ山狩りでもされれば、すぐにつかまってしまう。かりにうまく逃げおおせたとして、こんな変な世界で、いつ迄うまくやって行けるだろう。それも殺人犯として、どの位逃げられるというのだろう。

第一、それよりも、ぼくの気力はすでに尽き果てようとしていた。もう走るのはいやであった。

ふたりの警官は、ぼくのそばに来ていた。

「橋本健治だな？」

ひとりがいった。

ぼくは無言で頷く。

「殺人容疑で逮捕する」

ぼくの手首に手錠がかけられた。

「女はどこだ？」

もうひとりがいい、ぼくは、今来た山道をあごで示した。

それから、パトカーへと引き立てられて行った。

5

「さあ、さあ、夢物語はいい加減にして、本当のことをいったらどうだ？」

取り調べの係官が、あごをしゃくる。

「本当なんです」

ぼくは、これで十何度目かの文句を繰り返した。いっても無駄なのは分っているが、いわずにはいられなかったのだ。「ぼくは平凡なQ大生です。運動クラブに入っていて……先輩に寄附金を貰いに行く途中で、こんな変な世界に来てしまったんです」

「また、その話か？」

係官は、うんざりした表情になり、もうひとりの、やや年長の係官にいった。「どう思います？　丸い硬貨だとか、黒くない地下鉄だとか……こいつのいつもの話を、どう考えます？」

「なあ橋本」

年長の係官がいいだした。「女のほうも自白したんだし、もうそろそろ作り話はやめて、喋ってしまったらどうなんだ？」

「作り話じゃありません！　ぼくはそんな殺人なんてしていないし、その晩はちゃんと下宿で寝たんだし……」

係官たちは、顔を見合せた。

「それは通らないと、何度いったら分るんだ？」

若いほうの係官がどなった。「現場に残されていた指紋は、おまえのものなんだと、そういっただろう？　凶器に使った花瓶にもちゃんとついていたんだと、そういっただろう？　それに、おまえのいうアリバイだって、あの下宿はちゃんと証言しているんだぜ。おまえはあの晩帰らなかった、よくあることだからまたかと思っていた、と、そういっているんだ。おまえがやったんだ」

「……」

「いいか。おまえは被害者とあの女と三人で、被害者の家へ行った。被害者は、おまえとあの女がいい仲になっているのを知っていて、おまえに文句をいうつもりだったんだ。しかし、おまえは女とぐるになって、はじめから被害者をやる気だった。だから、被害者が女を別室に行かせて話をはじめようとすると、すぐに花瓶をつかんでなぐりかかったんだ。そうだろう？」

「違います」

「いいや、そうだ、そうなんだ」

「違います。ぼくはそんなことをやっていない！　そんな家へは行ったこともない」

「じゃ、あの指紋は何だ？　おまえは被害者の店でアルバイトをしていた橋本健治じゃないのか？　あの女といい仲になっていたんじゃないのか？」

「……」

「自分がやっていなかったら、なぜ逃げたんだ？」

「……」

「おまえがやったんだ」

若いほうの係官が、またいいだした。「おまえはあの晩、被害者とあの女と三人で、被害者の家へ行った。被害者は、おまえとあの女がいい仲になっているのを知っていて……」

ぼくは、係官がいうのを、黙って聞いていた。これで何度目だろう。同じことを聞かされているのだ。聞いているうちに、何だかぼく自身、実際にその犯行をやったような気さえしてくるのであった。何度も何度も繰り返されると、自分でもそんな感じになって来るのであった。

ぼくはしかし、きょうも自白はせず、留置場に戻された。ここの留置場は小さな独房で、窓もあるのだ。

「いいか、よく考えろ。もうあんな夢物語はやめて、あすは吐いてしまうんだ。いいな」

いうと、係官たちは去って行った。

あすはおそらく、うんといってしまうのではないか、と、ぼくは壁にもたれてすわりながら考えていた。この調子では、結局、殺人を認めるしかなさそうであった。どんなに真実をいっても、誰もまともに相手にしてくれないのである。

窓に月が出た。

青白い月なのだ。

どうしてこんなことになったのだろう——と、ぼくは思った。そのことばかり思っているのだった。

係官たちは、ぼくの話を夢物語だという。

ぼくの生きていた、本物のぼくの世界を、そんなものはあり得ないという。

だが……ぼくは知っているのだ。ぼくはその中で生きて来たのだ。

それとも……ぼくは長い長い夢でも見ていたのだろうか？　現実にはこの世界にいながら、殺人などしていたのに……自分では平凡なQ大生として暮らしている夢でも見ていたのだろうか？

いいや、夢ではない。

あれは、夢などではない。

本当にあったのだ。あれは実在していたのだ。本物の世界だったのだ。

それが……なぜ？

ひょっとすると……と、ぼくは、漠然と考えていた。ぼくは前の世界で、いてもいなくてもいいような人間だったから……あまりにも平凡だったから……あそこからこの世界へ抜き取られたのではないのか？　この世界では、ひとり、ぼくのような犯罪者が必要だった。だから、前の世界からどうでもいい人間、つまりぼくを抜き出したのではないか？

分らない。

分りっこないことなのだ。

ぼくは顔をあげた。

月光がまともに降りかかって来る。あすかあさってあたりが満月に違いないが……それでも、どうしてもぼくにはなじめないのである。表面の模様が疑問符——？　のかたちをした月なんて、どうしても好きになれないのであった。

スネーク

荒巻　義雄

ぼくの街が、ぬめぬめと艶やいで蛇の膚色をみせはじめたのは、圭子と知りあってからである。それとなく知り合いの医師に尋ねたら、パラノイヤといって、そんな精神の病いもあるということだった。が、ぼくのケースがそれに該当するかどうか？

街角のボアーという喫茶店で、ぼくは、彼女と出逢った。彼女は、そこで待ちあわせたぼくの若い友人と一緒にやってきた。

頼まれた原稿を渡した。二、三、仕事のことで話しあった。が、彼女のことが気になって仕方ない。とうとう、化粧室に立ったすきに彼に尋ねた。

「いったい誰なの？　君の恋人？」

「ちがいます。ただの知合い」

「ウーン」とぼくはいった。ぼくが疑わしそうだったのか、友人は、ちょっとむきになった。

「ときどき顔を出す、詩の会の人なんです」

「へえ、君も詩を書くの……」

「いや、ぼくは書きません」

そのとき、彼女がもどってきた。雨がやんで急に蒸し暑くなった夕方の汗がくずした、化粧を直してきたのだろうか。眉や口唇のととのえられた細っそりとした顔が、麻地の和服によく似あった。

「圭子さん。例の詩誌、いま持ってる？」と彼がいった。「ちょうどいい機会だから、おみせしたら」

「ええ……。でも」

「みせてください、ぜひ」

と、ぼくもいった。

「みてもらいなさいよ」

友人が重ねてすすめると、顔を伏せて袋物風のハンドバッグを開きながら、

「じゃあ……」

と、小さな雑誌をとりだした。

「可愛い詩誌ですね」

ぼくは受けとって開く。彼女の詩は、巻末に載っていた。

読んでみると、なかなかの力作だった。

「この詩はね、Kという批評家から激賞されたんですよ」

と友人が教えてくれた。

「いい詩ですね」とぼくも認めていた。

その数日あと、ぼくは自分の著書を送ってあげた。折かえし礼状がきて、すこし難しかったと書

いてあった。和紙の封筒に入った和紙の便箋にしたためられたもので、字が上手だった。
一種の予感がしたから、ぼくは返事をださなかった。彼女の出現が、ぼくのむこう側の世界からの便りのようにおもえたのだ。
が、すでにぼくの脳裏に焼きついてしまったあの詩が、くり返し反覆して、ぼくに無意識の影響をあたえていたのだった。
二度目に逢ったのは七月だった。彼女の方から逢いたいと連絡がきた。
三度目に逢ったのは八月だった。そのときは、ぼくの方から連絡した。
四度目は、残暑の季節だった。その頃はすでに我々の関係は、逢引きといってもよいとおもう。ときどきが毎週となり、それから毎日のようになった。
彼女は、和裁の仕事をしながら、弟と二人だけで暮らしている女性だった。
「いま、大学へいっています」と彼女はいった。「母親代りをしているうちに、ハイミスになりましたの……」
待合わせの場所は、最初の喫茶店で、それから、色々なところへいった。まるで、彼女の経験できなかった青春を、大急ぎで卒業しようとしているみたいだった。若い人の集まる店とか、ボーリング場とか、アングラ劇場とかが主で、ときには紛争中のぼくの母校をのぞいたりした。
いずれにしても、ぼくは彼女と逢っている間、いつも彼女の内部に蛇を感じていた。パラノイヤという病気を説明してくれた医師の言葉どおり、ぼくは、彼女が彼女でありながら同時に蛇であるという奇妙な感覚に、終始、捉われていたのだ。

「バンコックの蛇園で、大蛇に触ったことがあるんです」
とぼくは、先頃おとずれた亜熱帯世界の体験をはなした。
「毒蛇？」
「いいえ。おとなしいやつでね。案内人が首に巻いてみせるのです。そして、ぼくにもやってみろと推めるのです」
「で、……」
「思いきってやってみました」
「まあ……」と彼女は、大げさな身振りで驚いてみせたが、目はきらきらと笑っていた。「どんな感じでしたの？」
「ひんやりとして、割りと気持ちがよかった」
あるとき、そんな会話があった。そのあとでぼくは、彼女の手を握る権利を手にいれた。
彼女の手はぬめっと冷たかった。あの蛇園の大蛇とおなじ感触がした。
彼女との結婚を意識したのは、多分そのときだ。というよりは、もっと直接的な欲望に支配されていた。いつもよく似合う和服姿の帯を解いて、彼女の蛇性を露きだしたかった。そのくせ、ぼくには無意識の怖れがあって、いいだすことをためらわせていたのだった。
でもきのう、とうとうぼくは、「あなたの家を訪問したい」といった。彼女はちょっとためらったが、「お待ちしています」といった。

圭子のすまいは、近郊電車でいく郊外の更に外れの方にあった。地図を頼りにバスに乗りかえて終点までいき、三十分ほど歩いた。小川にそって小さな谷をつきあたりまで登りつめると、朽ちはじめた折戸があった。と、社のような家がひっそりと建っていた。

「昔からここに……」

と、ぼくは尋ねた。

「ええ、代々。何百年も前から」と彼女はいった。「昔、この辺は沼地だったとか。いつの頃か埋めたてられたそうで、以来ずうっと……」

みれば、床の間に掛軸がある。茶掛に似合いそうななかなかの名品だった。

「弟さんは？」

とぼくは尋ねた。

「研修旅行で、いま四国ですわ」

「お一人で留守番ですか。寂しいですね」

「慣れておりますから。でもやっぱり心細い……」

「そうですか」

色々、話そうとおもってやってきたのに何もいえなかった。その家の持つ独特の雰囲気にのまれてしまったせいだろうか。とぎれがちな雑談の間、ぼくは、彼女の白い膚をまぶしく眺めていた。

夕方までのつもりが夜になった。

夕餉のとき、彼女の祖母が仕込んで逝ったという、強い酒が出た。神社の祭壇にあるような白い

容器を手に持って、彼女は酌をしてくれた。素焼の盃でぼくはそれを受けた。

「薬草が入っているのですか」

と、きいた。彼女は、

「薬草も入っています。他にも色々と……」

といって、ふうっと真意のはかりがたい笑みを浮かべた。

酔いがまわって時間の感覚が遠のいた。気がついたとき、ぼくは床の中にいた。白絹の夜着に身を包んだ彼女が床元に座っていた。

最初に視線がからみついた。魅せられたように彼女を引きよせる。口唇を合わせた。

すると、口の中の洞穴に小さな蛇が住んでいた。ちょろちょろと蛇となった舌が、ぼくの中にしのび込んだ。

ぼくは、彼女の腰の紐を解く。ひんやりとした白い肉が、蛇性をおびて熱くなる。

と、その部屋までが変身していた。

腰帯がとぐろを巻き、畳の上にいた。彼女のぬぎ捨てた一切が、蛇のぬめりをみせていた。……

よく日、耽美の一夜のあけた朝、ぼくは社の床にねていた。夢なら覚めているはずだとおもった。が、夢はつづいていた。

ギイーと社の戸をあけると、蛇性化した〝世界〟がぼくを待ちうけていた。小川は巨大な大蛇と化していた。草叢や林が、一本一本無数の蛇となっていた。

しかし恐怖はない。路はうねって蛇のうろこを輝やかせる。谷間の底よりみえる細い崖は、蛇の膚そっくりに変貌していた。

ぼくは、その〝世界〟に足を踏みだした。圭子はその全身で〝世界〟一杯に広がって、ぼくを受け入れようとしているのだ。圭子が蛇の化身であったかどうかを詮索する前に、ぼくは太古の自然なる記憶の中に還っていく。……

巨鳥（きょちょう）モア

河野　典生

1

モアのことを書いてみたい。
例の巨鳥モアのことだ。
例のと言っても、まるで分らない人が大多数だろう。
しかし、分ってくれる人も数多いとぼくは思う。
あれを一度でも見た人には、むろん、すぐに分ってもらえるだろう。それが、モアという名であることは知らなかったにしても。
だが、見なかった者を信じさせることは、はなはだ、むつかしい。
その証拠に、あれから、かなりの時が経ついま、ぼくの知っている限り、ひとりとして、モアについて、しゃべったり書いたりした者は、出現していないのだ。
正直にいうと、ぼく自身、これを書いている現在でも、あれが現実に起こったことかどうか、うたがいの気持ちがないとは言えない。
しかし、あのモアの終末の日の、表面上の事件については（モアの存在さえ抜きにすれば）新聞の縮刷版をひらくと、はっきり記録がなされているし、あのモアの日々、街角にたむろして、それを見る、ぼくをふくめた人間たちを、しげしげと眺めた記憶を持つ連中——も、どうも、まどろっこしいがかなり多いことをぼくは確かめた。

さて、ぼくにしても、最初はそんな、まどろっこしい立場から、モアにかかわり合いを持ったのだ。
ある日、コーヒー店から路上に出たときのことだ。
「あら、ダチョウ……」
いきなり女は言った。
「何だって？」
「ダチョウがいたよ」
どことなく悲しそうな、薄い、あいまいな笑いを浮かべて女が言った。
「なにを言ってるんだ」
ぼくは笑った。
「むこうのビルの角から、ダチョウが首を出したみたいだったの」
「冗談じゃないぜ。こんな街中をダチョウが歩いているわけがない」
「そうね」
クスッと女は笑った。それから、いくぶん感情をこめて続けた。
「平気でいるつもりだったけど、やはり、ちょっと、おかしいのね」
「それは、そうさ」
ぼくは、なるべく感情が出ないように、注意を払いながら言った。

コーヒー店で、ぼくは一年暮らした女と最終的な別れ話をしたのだ。離婚経験のある齢上の女で、再婚話が持ちあがっていた。ぼくは文筆業者の駆け出しの頃で、いばった顔は出来やしないが、女が妙にしおらしいので、ちょっと調子に乗って言った。

「ダチョウとは、しかし、おもしろいね。フロイド流の夢判断なら、どういうことになるのかな？」

「性的欲求不満？」

女は笑った。

「まさかね」

それから、ぼくと女は右と左へ別れた。晩秋のめずらしくスモッグもなく、澄み渡ったまっぴるまだった。別れにふさわしい日かどうか、そんなことは分らないが、少なくともダチョウに出会う日にはふさわしくない。むろん、そんな、おかしな鳥に、ぼくが、いずれ、じっさい出会うことになるなどとは、思ってみもしなかったのだ。

2

つぎの、ぼくとモアとの出会いも、最初は間接的だった。

年が明けて一月なかば、厳冬の朝だ。

ごみごみした住宅地にある私鉄駅前、まだ、ほとんどシャッターの降りた商店街のアーケードを

潜って、改札口へ急ぐ人ごみが黒々と続く。

その人ごみの中、重そうな大人もののオーバー・コートを引きずるようにした少年が、ときに突きとばされそうになりながら、のろのろと近付いて来た。

十二歳か、十三歳か。

だいたい、そのあたりの顔付きだが、どうやら躰が不自由そうで、背丈も、あまり高くなかった。

少年の連れに、ぼくは気付いた。どうやら彼の父親らしく、とがった顎、広い額、どことなく神経質な目の表情が、よく似ていた。

人ごみの流れに、ときに逆って、息子と歩調を合わせようとするが、父親の目はいらだっている。あまり大きくない企業の、律儀なサラリーマン、そんな感じの男だった。

息子に着せているオーバーは、どうやら自分のおさがりらしいが、いま着こんでいるそれも、変わりばえのしない鼠色だ。

さて、ぼくが、なぜ、そんなものをじろじろ眺めていたかであるが、あまり、さえない理由である。

名ばかりの狭い駅前広場。

そいつに面してスーパーがあり、まだ大シャッターが降りている。

大シャッターのわきに二階へ続く階段があり、それにも小さなシャッターがあって、そいつは、

間もなく開くはずだ。

階段の上はコーヒー店で、ぼくは毎朝、通勤者みたいに、開店直後のその店へ通い、モーニング・サービスのトーストを齧る。

女と別れて毎朝だった。

季節も、うすら寒かったが、暮らしは、さらに、うすら寒く、女の部屋からコーヒー店へと、なま暖い空間をバトンタッチし、だらだら、日々を送っていたのだ。

――チェッ。

誰にともなく舌打ちをして、ぼくは煙草を路上に落とし、ぎりぎり、靴で踏みにじると、わけもなく大きく深呼吸する。

最初の異変は、その瞬間だ。

現実の風景と重なってはいるが、すっと緑の草原のような、ひろがりがぼくの目の前に浮かび、あっという間に消えて行った。ほんの一秒か二秒のことで、はっきり見たとも言えないのだが、紗幕に描かれた書き割りのむこうに、弱い光が入ったというか、そんなぐあいの風景だった。

――ダチョウを見たわけじゃあないが……。

ぼくは苦笑し、あたりを見まわす。

……あいつのことを笑えないな。

スーパー・マーケットのシャッターの前、幼児を乗せる遊戯機械が、ごたごた並び、そのむかい側の歩道の端、ガードレール沿いに、ベンチがある。

スーパーが開く時間になれば、母親たちが尻を落ちつけて、機械の上ではしゃぐ幼児を、ぼんやり眺める場所なのだが、むろん、まだベンチは空だ。そのむこうには黒々とした人ごみ、草原など、どこにもありはしない。

重いオーバーの父と子が空のベンチへ近付いて来た。

「ここでいいのか？」

父親が言う。

声にも、はっきり、いらだちがあるが、そいつを、おさえるためなのだろう、低くひらたい口調だった。

父親と視線を合わさないまま、わずかに息子はうなずいてみせ、ぎくしゃくとベンチに腰を降した。

そのとき、背後に物音がして、二階へ続くシャッターが、きりきりきりと巻きあげられたが、ぼくは階段を登らなかった。

父親の声が、こう言ったのだ。

「ほんとに、おまえ、何を見るんだ」

息子は視線を足元に落として、低くつぶやくように答える。

「いいじゃないか、何でも」

「そりゃあ、いいが」

いささか、むっとした表情を見せて、父親は息子の横顔を見、それから、ゆっくりと顔をあげ

て、広場を横切る人ごみを見、遊戯機械の怪獣を見、その傍らに突っ立っているぼくの顔を、ちょっと、うさん臭そうに一瞥してから、押しつけるような語調で続けるのだった。

「母さんも心配しているしな」

ベンチの少年は頬を固くして、じっと黙りこんでいる。

「じゃあな」

父親はゆっくり背を向けると、ちょっと肩を落とすようにして、人ごみの中へ歩いて行き、改札口に消えて行った。

3

「ダチョウかい？」

ぼくが、そう言ったのは、少年の隣りのベンチの上、しばらく座ってからのことだ。

父親の姿が消えてからの彼は、はっきり顔をあげ駅前を振り向き、しばらく視線をさまよわせていたが、やがて生き生きとした目で何かをとらえた。

その何かは、ゆっくり、こっちへ歩いて来て、スーパー・マーケットのシャッター前をよぎる。

そのとき、ぼくは声をかけた。

少年はぎくっと、ぼくを見たが、やがて、ぼくの心を見すかすように、ぐっと焦点深度を深くしてから、ゆっくり首を横に振った。

ぼくには、それは見えてはいない。だから、むろん、あてずっぽうだし、からかいの気持ちがなかったとは言えない。

——おれは見えやしないのさ。しかし、まえに見たやつがいてね。

そう言葉を継ごうとしたときだった。少年が、ぽつんと、こう言ったのだ。

「モア」

「モア？」

「ダチョウじゃない。モアって鳥……ぼくは、図鑑で調べたんだ。ほら。ダチョウより、ずっと背は高いし、頭だって小さいだろ？　太腿はものすごく大きいし……」

スーパーのシャッターあたりに、じっと目を凝らして少年は言う。

「なるほどな」

むろん、ぼくには見えてはいない。

しかし、見てやりたいものだ、と思ったことも確かだ。まあセンチメンタリズムが半分と、残りは面白半分のひまつぶしだが。

「なるほど、やけに小頭だな？　これじゃあ脳ミソは豆つぶだろ」

「豆ツブってのはオーバーだよ。でも、すごいスピードで走るんだ。野犬なんか来ても殺っちゃうしな」

「へえ、すごいじゃないか？　あんたは、見たのか？」

「見たさ」

いくぶん、息を弾ませ、少年は言った。

「ほんとうかね」

「ほんとうさ。すごかったんだから。ほら、ものすごい三本の爪だろ？　あいつでひっかけて、犬の腹を引き裂いちゃった。それから犬を蹴っ飛ばしたけど、腸が爪にひっかかってさ。犬の腹からロープみたいに、ひっぱり出されて、その先っぽに蹴飛ばされた犬が、くっついたまま、ぐんぐん小さくなってったんだ」

「劇画の読み過ぎのようだな」

ぼくは笑った。

「信じないの？」

「いや、信じるさ」

ぼくは笑い、何げなく彼の視線をたどって、あてずっぽうに、しゃべってやった。

「お、何かをみつけたんじゃねえか」

「ほんとうだ！」

少年が叫んだ瞬間だった。

ぼくは、かなり、はっきり、やつを見たのだ。茶褐色の粗い羽毛、大樹の根にも似た腿、ぐいと突き出された長い首、その上に乗った小さいが精悍な顔、そいつをぐいとねじって、やつは振り返り、ぐいと両脚を交叉させたかと思うと、いきなり、鋭い出足で走りはじめる。

土煙りをあげ、草原のかなたへ、みるみる彼は疾走、遠ざかって行く。

「ほら、見てよ！　すごいよ！　早いだろ！」

ああ、ほんとうにすごいな。

ぼくは思い、やがて彼が、はるかに走り去ったあたりに、まるで映画のオーバー・ラップのように、ケンタッキー・フライド・チキンの、例の口髭のおじさんが、突っ立っているのを呆然と見た。

「あれがモアさ」

少年は言った。「あれがモア。本物のモアさ。見ただろ？　ほら、こんなへんな剝製じゃない、本物なんだ」

ぶ厚いオーバーの胸のあたりへ手を突っこんで、少年の手が図鑑を抜き出した。静脈のかたちがあらわにみえる、やせた骨ばった手だった。

ぼくは図鑑をひらき、少年の示した記述を読んだ。

モア（恐鳥）moa　鳥綱モア目の鳥の総称。ニュージーランドから、半化石状の骨や、まだ化石化の進んでいない骨、卵、羽毛などが多数見つかっている絶滅した走鳥類。オオモア科 Dinornithidae とコモア科 Anomalopterygidae とに分類されている。大型のものは頭高三メートル、ダチョウに似ている。山地から裾野に生息し、雌は雄より大きく、一産一卵で草食性であったと推察されている。約一〇〇〇年前に、マオリ族がニュージーランドに初めて移住した当時は、多数、生存していたらしく、この鳥をマオリ族は「モア」と呼んだ。絶滅の原因は不明だが、乱獲によるとも、特殊な進化をして自滅したとも考えられている。

恐鳥モアか。

だが、いま見たやつは、四、五メートルはあった気がする。

ほとんど巨鳥と言ってもいい。

しかし、千年も前に、ニュージーランドで絶滅した鳥が、なぜ、こんなところに現われるのだ。

いや、鳥だけが現われたのじゃない。

草原もだ。

それでは、あれはニュージーランドか？　しかも、千年以上の前のニュージーランド……。いつしか草原は消え、寒々とした薄曇りの冬の街だ。いきなり、フライド・チキンの宣伝スピーカーが、ゆがんだ音響で唄声を吐き出す。黒々とした人びとの流れ。風に舞う汚れたビニール袋……。

排気ガスを噴出、のろのろと人ごみを分けるタクシーの車体……。

「きみは、いま、モアのいる場所が見えるか？」

「いまは見えないよ。でも、見ようと思えば、いつでも見れるんだ」

「最初からか？」

「最初からって？」

「きみが、モアを最初に見たときからさ」

「最初は、ふわっと見えた気がしただけさ。でも、だんだん、はっきり見えはじめて来たんだ。でも、こいつはテレビとか映画と、おんなじだよね。むこうから、こっちへは、来られないんだもの」

「こっちから、むこうへも行けないようだな」

「うん。ぼくは行きたいけどね」

「そりゃあ、おれも行ってみたいがね」

ふいに少年は頬を固くする。

「どうしたんだ？」

「母さんさ」

低い声で少年は言った。「きょうは病院へ行く日なんだ」

シャッターの上った店々もふえ、主婦たちの姿もちらほらしはじめた商店街のアーケードの下を、灰色のコートの小柄な女が、つまずくような足取りで近付いて来ていた。

「いつもは、だいたい、お昼過ぎなんだ」

「きみの出て来るのがか？」

「うん」

少年はうなずく。「骨が縮む病気なんだ。散歩すると、すこしはいいって」

「そうか。じゃあ、また」

ぼくは言った。

4

モアの日々が、はじまったのは、その日からだ。
むろん、ぼくにとってのモアの日々であって、たとえば別れた女など二カ月も前からということになる。
躰の具合のわるい例の少年は、だいたい三週間前から、あいつを見はじめたようだ。
当然、ほかにも、さまざまな連中が、モアのいるあの草原を目撃していながら、見えない連中に理解させるすべもなく、茫然自失したり、悩んだり、まあ、ぼくとか少年とかの例のように、面白半分、楽しんでいたりしているのじゃあなかろうか？
そう思って気をつけてみると、街では、いかにも、それらしい連中が、思いのほか、たくさんいるものだった。
少年に会った翌日、ぼくはTV局に用があって都心へ行き、国電の駅からタクシーに乗った。そのわずかな距離のあいだだけでも、さまざま、それらしい連中を見たのだ。
ガードレール沿いに、杖を突いて、ぼんやり車道を見渡している老人。
キャッチボールの手を、いきなり停め、ぽかんと口を空けて道のかなたに目をやる青年。
信号で停った地点では、道路を横断する人びとから少し離れて、ハイミス風の女が、ちょっと途方にくれたような表情で突っ立っていた。

折りたたみ傘を指先にひっかけるようにして持ち、雨あがりの泥が靴のヒールにこびりついている。どしゃぶりの雨が降ったのは昨夜おそくだから、それからずっと、うちに帰っていないことになる。
――そうだ。こういうタイプの女を、このごろ、ずいぶん、おれは見たな。
そう、ぼくはふっと思う。
そういう女を目にするたび、しばらく妙に気になったりして、そのうち、チェッ、おれも情けねえな、あいつに対する未練のせいか、そんなふうに思ったものだが。
立っている位置から考えると、彼女はタクシーを待っているのかも知れない。しかし、車の来る方向とは、まったくカンケイのないあたりに、どことなく焦点のきまらない目を、さまよわせている。
やがて信号が変わり、車は動きはじめた。空車のタクシーがすれちがって行ったので、ぼくは首をねじって彼女のいるあたりを見た。タクシーは、そのまま遠ざかって行く。ぼんやりしていて、気付かなかった、それだけのことかも知れない。しかし、彼女がモアを見ていた可能性も強い。
現に、別れた女もモアを見たのだ。
彼女は、あれをダチョウと言ったが、いまでもダチョウを見ているだろうか？
――会社づとめもくたびれたし、再婚同士で見合いをするのよ。
そんなことを言ってやがった。
見合いの最中、男の顔を、モアの尻が、悠然、よぎって行ったりしたら、あの女はゲラっちゃう

んじゃないかな？　齢に似ず、よくコロコロ笑う女だった。腹の下で突然、ひくひく笑われちゃった日は、まいったけれど。

TV局へ曲る角にスーパーがあり、ぼくの棲んでいる町のそれよりは、ぐっと大きいが、やはり、店の前には遊戯機械があり、幼児が群れている。ガードレール沿いには、やはりベンチが三つほどあって、そのひとつに家族がたむろしていた。

角に車が詰っていて、何げなく、その家族を眺めていたが、連中一同、ぼくには、モア族に見えた。

ねんねこで乳児をしょった母親、その膝の上に座った三歳ぐらいの女の子、そのまわりに、ぼかんと突っ立っている四歳、六歳ぐらいの鼻たれ小僧、ベンチの端にいる、やせて不精髭を生やした父親らしい男、それらの家族すべてが車道に目をむけていたが、どうやら、車の流れに関係なく、すうっと視線を横に走らせたのだ。

鼻たれ小僧は、それぞれ別の方向へ視線を向けたが、モアは一羽だけじゃないかも知れない。

TV局で用事を終えて、一時間後に出て来ると、やはり、その家族はベンチにいた。

女の子は母親の膝でぐったりと眠り、四歳、六歳ぐらいの男の子は、父親と母親のあいだに、ぐったりと腰を降して、今度はスーパーのにぎわいに目を向けている。

遊戯機械の上では幼児たちがはしゃぎ、その周辺や、ほかのベンチにはショッピング・バッグを持った母親たちが群れているが、家族たちの目の焦点は、はるか遠くに合わされている。

不精髭の父親はインテリ風で、どこかキリストみたいな表情だった。母親の方も、四人の子持ち

にしては、すごく若い。ひっつめ髪のせいもあるが。

ぼくは、父親の傍らに立って、じっと店のにぎわいに目を凝らしてみた。

紗幕のむこうに、光がゆるやかに射し、草原、青空、遠い山なみ、それらが浮かぶ。

土煙りをあげ、はるか遠く、モアの一群が走っている。

「モアですね」

ぼくは言った。

父親を見たが、やはり、じっと遠くを見ている。

「モアというんでしょう？　あのダチョウみたいな鳥は……」

ゆっくりと父親の顔が、ぼくを向いた。じっと、ぼくの目の底を覗きこむようにしたが、そのまま表情も変えず、黙りこくっている。

やがて、細い白い手が、ぐったりした二人の男の子越しに延びて来て、ちょっと彼の肩に触れた。

——何なの？

そんなふうに、母親は目顔で夫に訊く。夫は、わずかに首を横に振った。母親の目にじりっと涙が浮かび、小さく鼻をすする。

ぼくは、家族のそばから離れて行った。

5

とにかく、そんなふうにして、モアの日々は続いて行った。

冬が過ぎ春が来た。

街角にたむろしたり、ひとり突っ立っていたり、ビル街の花壇に、ぐったり腰を降していたりするモア族らしい連中は、じりじりと殖え続けているようにみえたが、ぼくは、声を掛けなくなった。

最初、何度か試みてはみたが、彼ら彼女らは、あまり心をひらいてはくれないのだ。

ぼくが、かなり不真面目な感じを与える人間であるせいも多分にあると認めざるを得ない。しかし、それよりも、こんな、あり得べからざる事柄を、見なかったものに理解させることは、あまりにもむつかしいし、自分自身にさえ、じっさい、これが現実なんだとなっとくさせられない人びとが、いかに多いかということだった。

ぼくに心をひらかないのも、ぼくが、もし、たとえば躰(からだ)の病気でない人びとを収容する病院の人間だったらどうする、そんなふうに考えた人もいただろう。そう、ぼくは思うのだ。

だから、ぼくは結局、例のスーパーの前で、時折り少年に出会い、適当にふざけ合ったりしながら、モアの話を楽しむよりほかはないのだった。

「お、みろよ。あの車でふんぞり返ってるハゲ頭、ほら、モアが後ろからキックするぜ！」

「ほんとうだ。まるでモアには見えてるみたいじゃない！」

「見えててもおかしくないぜ。だって、こっちからだって見えるんだからな」

「そうか、そういうわけなんだな？」

「あ、あのすました帽子の女、胸のあたりにションベン、ひっかけられたぜ！」

そんなふうに最初は笑い合っていたが、そのうち、だんだん、ばかばかしくなった。

事実、何度、そういう光景を見ても、おかしいことは、おかしかったが、おかしいこと自体、腹立たしいような奇妙な気分になって来たのだ。

だって、そうじゃないか。

ぼくや少年が、いくら、それを見て楽しんだとしても、ハゲ頭や、すましこんだ女には、まるでそれは見えやしない。つまり、ないのも同じなのだ。ただ、何、笑ってやがるんだ、ふん、そんな顔で、こっちの顔を軽蔑したような目で見くだして去って行くだけなのである。これでは、まるでオナニーではないか。

そんなある日、ぼくは少年の父親が、少し離れた場所のガードレール沿いで、ぼんやり突っ立っているのに気がついた。

「どうしたんだ？」

ぼくは少年に訊いた。その日は日曜祭日ではない。

「うん、会社がうまく行かなくて、ジタクタイキっつうの？　あれだって」

「そうか。……しかし、きみのパパも、やはり……」

「うん」
少年はうなずいた。「見えはじめたんだ。モアが」
「そうか」
ふたたび、うなずいたとき、少年が言ったせりふは、いわば『裸の王様』の、王様は裸じゃないか！　あの叫びに匹敵する。彼はこう、ぼくに言った。
「でも、どうして見える人間と、見えない人間が分れるの？　人間に種類がふたつあるわけないのに」
そうか。
どうして、それを、いままで、おれは考えなかったのだ。そうぼくは思う。たしかに人間に二種類あるわけがない。しかし、現に、そいつが、はっきり出来あがっている。モアを見る者、見ない者として。
いったい、どういうタイプの人間が、いままでモアを見て、どういう連中が見ないでいるか。ぼくは考え、しだいに、むらむらと、ほとんど憎悪にちかい気分が盛りあがってくるのをおぼえた。
「そうだな」
ぼくは言った。「見えるやつは殖えてはいるが、ぜったい見ないだろうという連中が、こんなにいるんだな。見える連中は、ますます、ただ、黙りこくるだけだ。ただ、はっきりと、あんたたちは別種の人間だと思い知らされるだけで。こんな馬鹿な話はないな。まったく馬鹿げた話じゃないか」

「うん」
少年はうなずく。「モアが、はっきりこっちへ出て来ればいいんだがな。出て来ることはできないのかなあ」
「いや、それは分らないぞ。モアの世界とは薄皮一枚しかへだたっていない。だから、ぼくらには見える。そうかも知れないんだからな」
ぼくと少年はしばらく黙り、モアの世界に目を凝らしていた。
気のせいかどうか、モアの草原の緑、山なみのむこうの青空、それらが色濃く変化するように思えては来たが……。

あれが起こったのは、その夜のことだ。
春にしては、やけにうっとうしく、寝苦しい夜、異様な物音を聞いて、ぼくは、ふとんの上に飛び起きた。
ぼくのアパートは道路に面した二階で、深夜、通過する車がうるさいが、そいつは車の音ではない。大地を蹴立てて走り去る何かの轟きだ。窓をひらく。モアの一群だった。十羽はいるだろう。いや、むしろ十頭と言いたい感じの巨大なモアが、夜の中を走っていた。ふたたび十数羽の一群……やつらは街角を曲る。
道を曲ったのだ！
いままでは、この世界とは、かかわりなく、ビルでも塀でも通過していたが……。モアが、この

世界へ来た！　おれと、あの少年の情念のせいか、いや、すべてのモア族の怒りのせいかも知れない。

遠く、激しい車のクラクション、タイヤの軋み、やつらが曲って行った先には、高速道路の登り口がある。

ぼくは、あわただしくズボンをはき、戸外へ飛び出した。

それ以後に起こった、あの高速道路上、さまざまな街中の連続した大事故、ほとんど、まる一日続いたあの事件については、表面的には、どなたも知っていることだ。

だが、あれはモアの終末の日でもあった。

数台の車を蹴ちらし衝突、炎上させてから、高速道路の擁壁とダンプの間でつぶされ、悲しい最後の叫びをあげた、あの血まみれのモアの声は、いまでも、ぼくの耳から離れない。

車の運転者たちに、生き残った者もいたし、事件は昼間も続いたのだから、モアを目撃した者も数多いはずだ。しかし、誰もがそれに口をつぐんだ。モアはその死とともに、また、あの、はるかな草原に帰って行ったから。

そして、あの日から、ぼくたちモア族の前からも、あの雄姿が消え去って久しい。あの少年にも出会わないが、がんばって生きていてくれればいいがと思う。

ところで、あの事件の翌朝、ぼくは、別のふしぎな鳥を見た。はるか遠くの交叉点あたり、無数にひしめき合い、ドードー、ドードーと騒々しい声をあげながら横切って行ったが、その後、どこへ消えてしまったか、ぼくは知らない。

最近、ぼくは、そいつの名を、やはり図鑑の中で発見した。

ドードー（愚鳩） dodo／Raphus cucullatus 鳥網ハト目ドードー科の一種インド洋マスカリーン群島特産の絶滅鳥。

——グキュウか。

ぼくは思う。グハト。オロカバト……どう読むのか知らないが、ドードーのやつ、どんなふうに絶滅してしまったのだろう。

これを読んだ方で御存知の人があったら、どうか、教えてくれないだろうか？

帰還者

豊田有恒

「宇宙船ヴェルトラウム号、応答せよ。宇宙船ヴェルトラウム号、応……」

人工衛星JA―6の管制官たちは、昨夜この軌道に突入してきたばかりの巨大な恒星船に向かって、夢中になって呼びつづけていた。偶然に、しかも何の予告もなしにJA―6の軌道に駐船したヴェルトラウム号と連絡をとることは、全管制官の急務となっていた。世界各地のシュミット・カメラが、パラボラ・アンテナが、この宇宙船を見つめ、今や遠しと情報の入手を待ちかまえていた。

JA―6は巨大なドーナツ型の本体を回転させながら、三キロほど離れた空間にうかんでいるヴェルトラウム号の信号を待っていた。巨大な白銀色に輝く船体は、まったく死んだように沈黙している。球形船室（スフエア・キャビン）は、出発の時と変わらぬ姿で、美しくキラキラと輝いている。だが、その下にあるタンク群は、妙な形にひしゃげ、ねじまがって、無残な姿に変わっていた。バックボーン・フレームにつぶされた球状タンクの残骸が、こびりつくように残っている。ベリッと引き裂いたように見えるメインタンクの破壊孔から空ろな内部がのぞいている。そして、中央部の球状タンク群の下にスカート状にひろがった集光器（コンデンサー）、および蜂の巣のように見える噴射管（ノズル）の束、それらは無傷のまま残っていた。

ヴェルトラウム号は、五年まえ全人類の希望をハイメタルの船体いっぱいに担って出発した時とはうって変わった姿でもどってきたのだった。人工衛星JA―6から、わずか三キロほどのところに、唖になったかのように、何の応答もよこさない。まるで自分自身を招かれざる客と思っているかのようなのだ。

「主任、昨夜から十二時間も連絡をとろうとしているのに、こんなバカなことはありません。もしかしたら誰も乗っていな……」

JA―6の管制主任サトーはうしろから声をかけられて、ふりむいた。よく発達した全身をメタリック・イエローの制服につつんだ、カヤマ・クミが彼を見おろして立っていた。

「クミ、きみらしくない考えだ。考えてもみたまえ、地上一七二〇キロの真円軌道をえがいて回っているJA―6の軌道に駐船するのは、熟練した航宙士（アストロゲーター）なしじゃ考えられないことだ」

「それではなぜ応答しないんです？　あたしは小艇で接近してみます。あんなに近くにあるのに何もできないなんて、あたしには、我慢できないんです。主任、許可してください」

「今度ばかりはきみのおてんばを許可するわけにはいかん。勝手なことは許さん。この件は日本州庁の手をはなれて、世界政府の管轄下におかれている。わたしにできることと言えば、おうむみたいに同じ言葉をくりかえすことだけだ」

「主任、この雌のおうむは、つかれて声もでないくらいです。雌のおうむには香水やドレスも必要なんです。たまには休暇を……」

「この件がかたづいたら、マゼラン雲へだって行かせてやる。ともかく、仕事だ」

クミは紫外線フィルターのついた舷窓から、真黒な空にういているヴェルトラウム号を見つめていた。回廊の窓から見る宇宙船は、無気味にすら感じられた。五年まえ、はじめて恒星船として建

造され、四十五名の乗員をのせアルファ・ケンタウリをめざしたヴェルトラウム号は、太陽系を離れて間もなく連絡をたってしまったのだ。乗員の確執のため自滅したとする説、宇宙塵と激突したとする説、さまざまな憶測がなされ、ついにはその噂も人の口にのぼらなくなってしまった今ごろ――みじめな姿で戻ってきたのだった。

「クミ、また眺めてるな。まったく、こんなに夢中になって連絡をとろうとしているのに、耳がないのか!」

クミは回廊の窓から目をそらしてふりむいた。制服に報道員証をつけたオリマ・ユキオの長身が立っていた。彼は宇宙局からJA-6に派遣されている科学記者なのだ。

「まったく、しゃくにさわる。いくら呼んでもウンともスンとも言わないんだから。明日になれば接舷の許可がでるかも知れないわ」

「あの野郎が何とかいわないと、こっちは仕事にならない」

オリマは人なつこい口調でこたえた。クミは、廊下で顔をあわせるたびにこの憎めない青年を意識するようになっていた。時折、この青年の顔になにかしら淋しげな表情がよぎることがあったが、それもつかのまに人なつこい微笑の下に埋もれてしまうのだった。そんなことが重なるにつれて、クミにとってオリマは不思議な存在にかわっていた。誰からも好かれる明るい個性をもっているのに、それでいて何かしら暗い翳がやどっていて正体がつかめない、そんな印象がクミの心を支配するようになった。

「あなた、なぜ、ここへ来たの? 退屈な直径百メーターのドーナツの中で何をするつもり?」

「取材さ。あのダンマリ野郎がなんとか言わないうちは、退屈でも帰れない」

オリマはいつもとかわらぬ快活な口調でこたえた。クミには、そんな彼の態度がなにかしら内心の動揺をごまかしている作為的な演技のように感じられた。オリマはポケットから煙草の箱をとりだして、なかみを探った。やがて、それが空なのに気づいた彼は、腹だたしげに壁のダストシュートの開口にむかって、にぎりつぶした紙箱をたたきこんだ。つぶれた紙箱は奇妙なカーブを描いて壁にあたって床におちた。

「だめよ、衛星内でものを投げるときは気をつけなくちゃ。回転運動体のコリオリス加速度が物体の落下方向を歪めてしまう。だから、地球の上でどんなにコントロールのいいピッチャーもここでは暴投ばかり……」

クミは床におちた紙箱をひろいあげ、ダストシュートに入れながら、ふと、オリマの表情に気づいた。彼の眼はあらぬ方角を見つめ、放心したような表情は、クミの言葉を聞いているようには見えなかった……。この人は、なにかイライラしている。表面では、つとめて平静をよそおっているけれど……。

そのとき、突然、壁のブザーがなりだした。

《……管制官全員につぐ。緊急命令。ヴェルトラウム号から応答あり。至急配置につけ》

「だんまり野郎がなにか言いだしたらしい。忙がしくなるぞ」

「おたがいさまね」

オリマとクミは、回廊をはしりぬけて管制室にとびこんだ。室内には緊張した空気がみなぎって

いる。しかし正面の大スクリーンは、あいかわらずブランクのままだった。

「主任、ヴィデオ通信じゃないんですか」

「あきれた話だ。モールス符号だ。これじゃ船内の様子もわからん」

サトーは舌うちしながら、壁面の電光板を指さした。テレタイプにうつしとられた電文が、大きな電光文字でうつしだされている。

《……こちら宇宙船ヴェルトラウム号、人工衛星ＪＡ－６へ。本船は損傷のため接舷できない。地表の着陸地点を指示されたし……》

「地表の着陸点ですって！　無茶です。光波宇宙船が地表に着陸するなんて……」

「その通りだ。どう考えても非常識だ。光波エンジンは半径百キロにわたって奔流のように光りをまき散らす。おまけに球状タンクが破損してバランスのくずれた流線型でない恒星船がどうして地球に着陸できる？　もし、コースをはずれれば大惨事がおこる。ともかく、ウーメラとバイカルの宇宙港に連絡をしたが、おそらく無理だろう」

サトーは沈痛な声でこたえた。不可能にちかい要求なのだ。だが、生存者があったことだけでも大きな収穫だった。ひき続いて、生存者の氏名が打電されてきた。

《本船は事故にあい、アルファ・ケンタウリ遠征を断念した。搭乗員四十一名生存。死亡者の氏名は、クロード・ブトール、ナターシャ・イワノーブナ、ヴォルガング・シュミット、パトリック・ヘイス、以上四名、ある事情により、地表へ直接着陸(ダイレクト・ランディング)したい。指示をこう……》

「主任、先方のヴィデオは故障しているようですが、通話器(トランスミッター)も使えないのですか」

オリマは、せきこんで訊いた。彼の顔に安心とも不安ともつかぬ複雑な表情がうかんでいるのを、クミは見のがさなかった。話がヴェルトラウム号のことになると、オリマの態度がことさらにわざとらしくなるのに、クミは気づいていた。故意に陽気にふるまったり無関心をよそおったり、不可解な彼の態度はますますつよくクミの心をとらえた。謎めいた雰囲気につつまれたオリマという人間に対して、男まさりのように見える彼女の中にある母体本能に似たものが、萌えはじめていた。笑うオリマの童顔がクミの心をそそる。そして、時折ひらめくように彼の顔にうかぶ翳が彼女の母性をゆさぶるのだった。

「ヴェルトラウム号の損傷は中央の球状のタンク群のところだけのようだ。一番上にある球形船室(スフェア・キャビン)は、まるで無傷のままだし、機関のある底部も損傷しているようには見えない。外見からでは、ヴィデオが故障しているように見えないのだが……」

サトーがそこまで言いかけたとき、インターヴィジフォーンに、地表連絡を担当している管制官の顔があらわれた。

「主任、宇宙委員会から連絡がありました。危険が大きいため、直接着陸は許可しない、小艇(スペースタッグ)をだして乗員を収容し、曳行艇(パイロット・タッグ)でヴェルトラウム号を繋留(けいりゅう)しろ、という命令です」

宇宙委員会の指令が各部につたえられるとＪＡ－６の内部は俄然いろめきたった。整備員たちが、中央部の格納室に小艇(スペースタッグ)および曳行艇(パイロット・タッグ)を準備しに走っていく。待機していたパイロットたちは、ヘルメットをつかんで回廊をかけぬける。曳行用のポリスチール・ワイヤーが回廊を運ばれていく。医療班も準備をととのえ小艇ハッチに向かう。ＪＡ－６全体が、蜂の巣をつついたような騒

ぎになった。

　世界中の通信社からの問いあわせが、ひっきりなしにつづいた。宇宙委員会から強制収容命令がだされたため、世界中の話題がJA－6に集中したのだ。サトーはヴェルトラウム号に向かって、小艇を出して乗員を収容する旨、打電した。

　ヴェルトラウム号からの返電を待つあいだの一時間は無限につづくように感じられた。オリマは凍りついたような硬い表情で電光板を見つめていた。

《本船は強制収容命令には応じない。遠征隊長アウグスト・エーデルマンは、総員を代表して、人工衛星JA－6および世界政府宇宙委員会にたいして警告する。本船の要求するところは、あくまで地表に直接着陸（ダイレクト・ランディング）することである。二十四時間後に、本船の最終態度を通告する。それまでは、本船へ接近する宇宙船があれば、遠慮なく撃破する。これよりヴィデオ通信を許可する》

　意外に高圧的な内容をもった返電が電光板にうつると同時に、管制室は一瞬、騒然となった。

「強制収容に応じないというのか？」

「接近すれば撃破するだと？」

　サトーは、ざわめきたつ一同をおさえて、ヴィデオ連絡を開始させた。突然、管制室の壁面スクリーンに走査線がいりみだれ、つづいてヴェルトラウム号の内部がうつしだされた。球形船室（スフェア・キャビン）の内部はキチンと整理され、外観の無残さにひきかえ、まるで新しいままのように見えた。だが、誰もいない。五年ぶりに地球の人々に会って歓喜する搭乗員たちの姿を想像していた管制官たちは失望した。くいいるようにスクリーンを見まもる人々のまえに、人のいない船内の風景が次々にうつし

だされていく。回廊のエアロックから遮断扉を越えて居住室の二段ベッドへ、制御室（コントロール・タレット）の諸計器へ、船内のカメラは移動しながら、忘れさられたように空白になっている船内の様子をとらえていた。まるで幽霊船の内部のように、森閑として、人っ子ひとり見えない。

「おーい、だれもいないのか」

　たまりかねたサトーが大声でどなった。四十一名の帰還者はどうしたのだろう？　誰もいない船室は無気味にすら感じられた。

「ある事情で、全員が病気なのだ。私は隊長アウグスト・エーデルマン。さきほどの非礼を許してほしい。だが、スクリーンに現われることはできない。船内は混乱している。二十四時間だけ待ってくれ。お願いだ。いまは何もきかないでほしい」

　スピーカーからしわがれた抑揚のない不思議な声がながれだした。エーデルマン博士、その名は知らぬものはないくらいに有名な光波推進の権威なのだ。

「ドクター・エーデルマン。私はJA－6管制主任サトーです。我々には医療の準備もある。きっとあなたがたを助けることができる筈です。事情を話してください」

　サトーは席をたって、ヴィデオカメラの前にすすみでて言った。彼の真剣な表情にもかかわらず、声は沈黙してしまった。その時、それまで口唇を噛んだまま立ちつくしていたオリマが、つかつかとカメラの前にとびだして言った。

「ドクター・エーデルマン、インゲと話をさせてください。インゲボルク・ディートゼル、ヴェルトラウム号に生化学者として乗っているはずです」

オリマの両眼は燃えていた。スクリーンをにらみつけるようにして立つ彼の顔には、悲愴な表情がただよっていた。ながい間秘めに秘めていた情熱が一度にせきをきって流れだしたかのように、彼の声は激情にふるえていた。クミはレシーバーを持った手をやすめてオリマの顔を見つめた。

「ユキオ、わたしを忘れなかったのね。わたしは今かえってきた。わたしはあなたと別れてヴェルトラウム号に乗ったのを後悔した。淋しかった。……でも、いまさら」

スピーカーから、かすれた女の声がながれだした。クミは思わずあっと声をあげるところであった。なぜオリマが、ヴェルトラウム号のこととなると人が変わったようになるのかが、一瞬のうちに判った。あれは確か六年前だった。それは、当時のニューズキャストをにぎわわして、宇宙専門学校生徒だったクミたちのロマンチシズムをかきたてたものだった。

クミはウィークリイ・ニューズキャストのストーリイを思いだした——

……六年まえ、ゲッチンゲン大学の生化学科に留学したオリマ・ユキオは、酵素学（エンツィモロギー）研究室の助手インゲボルク・ディートゼルと知りあった。異郷にたった一人で生活している淋しさは、オリマの関心を四歳年長のインゲへ向けさせた。講師として酸素学を教える彼女のオリマにたいする気持ちは、しだいに学生と教師という格をこえたものになっていた。一方では年上の女が幼い子に注ぐ愛情のようなものを感じながら、他方では人種も国籍もちがうこの青年の憎めない個性がインゲの気持ちをひきつけ、やがて、それは愛情と呼びうるものに育っていった。なにくれとなく面倒をみてくれるインゲにたいして、オリマの気持ちも大きく成長した。やがて、二人は急速に接近し、お

互いに離れられないものとして相手を意識しあうようになった。

そんな時に、インゲの《鉄（アイゼン）ポルフィリン酵素（エンツィーム）の賦活（アクティヴァツィオーン）》に関する論文が学界で受理され、それに対して博士号があたえられることになり、さらに彼女はヴェルトラウム計画のメンバーの一人に推されることになった。

……別離の日が近づくにつれ、二人の心はますます強く引きあい、決して切れることのない強い絆（きずな）でむすばれていった。インゲには生化学者としての使命があった。オリマへの断ちきれぬ想いと、生化学者としての千載一遇の名誉なチャンスとに板ばさみになりながら、インゲは悩んだ。オリマにとっても悩みは同じだった。ながい間のインゲの研究が実をむすんだことは彼にも喜ばしいことであった。だが、それは同時に二人をひきはなす運命につづくものであった。

残りすくない日々に、二人は情熱をたたきつけた。オリマのアパルトメントで、二人はかたく抱きあい、ほとばしるばかりの情熱をたたきつけ、ありとあらゆる愛の言葉をかわした。やがて、二人はオーベルバイエルンのマルクヴァルトシュタインの古城からほど近い小さな教会で、ひそかな結婚式をあげた。

「ユキオ、アルファ・ケンタウリまで、往復九年近い年月、わたしは、それにわたし自身を賭けたい。船内時間（シッフエン・ツァイト）で、わたしは一年くらいでかえってくる。そして二十六歳のインゲが帰ってくるとき、地球では二十九歳の貴方が待っているのよ」

「インゲ、ぼくは待っている。古めかしいかも知れないが、年月は問題ではない。たとえ何光年（リヒト・ヤーレン）はなれていようと、きみはぼくのものだ」

……二人は、静かな森にかこまれた寒村で蔦のからんだ灰色の古城をみつめながら、かたく誓いあったものだった。あわただしいハネムーンを終えた二人の上に、まもなく別離の日がやってきた。ウンターヴェッセンの宇宙港からババリヤの緑を縫うようにして上昇していく連絡船を、オリマはいつまでも見送っていたものだった。

オリマは期待にふるえる心を鎮めようとしていた。インゲが戻ってきたのだ。五年間は長い年月だった。オリマの胸に顔をうめて、白い肩に汗のしずくをうかべていたインゲ。燐酸誘導体助酵素（フォス・フォ・コエンツィーム）の賦活（アクティヴァツィオーン）について論議するときの理智的なインゲ。彼女の田舎ウンターヴェッセンの森の中で小鳥を追いかけ裸足のまま走りまわった少女のようなインゲ。そんな彼女の面影が、オリマの心の空洞に五年間にわたって、オスミウムのように重い苦悩を課したのだ。だが、その間の寂寥感との闘い、尽きせぬ慕情、何物にもえがたい愛、それらが報いられる日がきたのだ。オリマは回想から覚めると、スクリーンに向かって自分自身を叩きつけるように、どなった。

「インゲ、ぼくは待っていた。もう離さない。これから、あんなに見たがっていたぼくの国ヤーパンへ行く。これからはきみと二人で……」

オリマは自分の声がしだいに涙にかすんでいくのを感じながら、スクリーンを見つめた。スクリーンには、エアロックにつづく回廊がうつっている。だが誰もいない。

「なぜだ（ヴァルム）！　インゲ、なぜ姿を見せてくれないんだ？　ぼくは五年間まった。たのむ、スクリーンにきみの姿をあらわしてくれ」

オリマは、なおも感情をむきだしにぶちまけた。彼の両手の拳はぶるぶるとふるえている。だが、船内には人の姿は見えない。乗員のすべてが蒸発してしまったかのように、誰もいないのだ。

「ユキオ、おねがい、やめて！　これ以上わたしを苦しめないで。ドクター・エーデルマン、受像器（フェルン・ジヒター）をきってください。言えない！　ユキオ、愛してるわ、でも、もう……」

スピーカーから流れでるインゲの声は、錯乱したようにしだいに高くなり、やがてプツリと消えた。それと同時にスクリーンの影像も消えてしまった。

「インゲ、なぜだ。いったいどうしたんだ」

オリマは消えたスクリーンのところに走りよって、両手をかけてゆさぶるようにしながら叫びつづけた。はりつめていた心の砦がくずれさるように感じながら、オリマはスクリーンに両手をついたまま動かなかった。嗚咽をこらえて、彼の両肩がわずかにふるえた。サトーがその肩に手をかけた。

「オリマ、キミを拘留する。せっかく、ヴィデオ連絡できたというのに、きみのために先方が受像器をきってしまった」

サトーは腹だたしげだった。青年の軽挙が連絡の緒口をたちきってしまったことが我慢できなかったのだ。

「主任、ご迷惑をおかけしました。申し訳ありません。ですが、この件がかたづくまで待ってください。ヴェルトラウム号には、ぼくの妻インゲがのっているのです」

「キミの気持ちは判るが、あの船と連絡することは、もはや私個人、いや日本州庁のみのものでは

ない。全世界にたいしてＪＡ－６が負っている責任なのだ。管制任務を妨害するものがあれば、処分しなければならん。誰かオリマ君を監禁しろ」

サトーの命令で、二人の警備員がオリマを室外に連行していった。クミはレシーバーをおいて立ちあがり、そのあとを追った。

二人の警備員に左右をかこまれ、遮断扉をくぐったとき、オリマの全身が大きく跳躍した。遮断扉の向こうがわにとびだしたオリマの手に光線銃がにぎられていた。身をかがめたとき警備員の腰のホルスターから抜きとったのだ。そのとき、小走りにちかよってきたクミが遮断扉をとびこえて、オリマの横にならんだ。

「たのむ、見のがしてくれ、ぼくは、これから、ヴェルトラウム号へ行くんだ」

「オリマ。あたしは小艇を運転できる。あたしをつれていって」

クミは、オリマのうしろに立つと、長身の彼を見あげながら言った。彼女は、自分の気持ちをまったく不可解なものに感じていた。なにかしらオリマの役にたってやりたかったのだ。

「まて！　オリマ、無茶をするな、クミ、早くとめるんだ！」

よびとめる警備員の声を鼻さきで聞きながら、オリマは遮断扉を閉じ、小艇（スペース・タッグ）の格納室のほうへ向かった。

クミの手で制御弁がひらかれると、尾部噴射管（リヤ・ノズル）から噴流がながれだし、小艇（スペース・タッグ）はしずかに暗黒のなかにすべりでた。暗黒のなかにまたたきのない星が宝石のように光っている。《クミ、戻ってくるんだ。ヴェルトラウム号の警告を忘れたのか。近づけば攻撃されるのだぞ。危険だ。近づくな……》

艇内のスクリーンにサトーの姿があらわれた。強い口調で制止する声をききながら、クミは受像スイッチを切った。

「すまない、クミ。きみまでまきぞえにしてしまった。きみは管制官をクビになるだろう。ぼくのせいだ」

オリマの表情には、いつもの陽気なボーズの名残りはすっかり消えうせ、そのかわりに暗い苦痛の翳がやどっていた。

……インゲ、ぼくの愛するインゲ。たとえ攻撃されようと、ぼくは行くぞ。かならず、きみに会う……。目を閉じると、スクリーンや操縦計器は彼の眼のまえから消え、あの懐しい日々が、ありありと思い出されるのだ。ミュンヘンのビアホールで陽気にさわいだ日々が。陽気にうたった唄が。二百年も昔の民謡のメロディーと恋と酒に酔い痴れたあの日々が――

突然、ブザーがはげしくなった。追想の糸をたたれたオリマは、夢からさめたようにヴィジスクリーンのスイッチに手をのばした。

《オリマ、ヴェルトラウム号に近づくのはやめろ。なにか危険がある。あの船には一名の生存者もいないのだ。こわれた球状タンク群は食糧タンクだ。宇宙委員会の調査報告がとどいた。あの船は、一片の食糧もなしに船内時間で半年のあいだ航行してきたのだ。自動進路装置（コーサー）で地球へ戻り、ＪＡ－６のパイロット電波をキャッチして駐船軌道（パーキング・オービット）にのるようにセットされてあったんだ。乗員

の声は電子頭脳(コンピュータ)に仕組まれた芝居なのだ。全員が餓死しているはずなのだ。行っても無駄だ。戻りたまえ》

「嘘だ！　ぼくのきいたインゲの声は芝居じゃない。主任、ぼくは行きます。さあ、クミ、接舷してくれ」

オリマは、我を失って大声でどなりかえした。はりつめていた気持ちがゆらぎ、足許の大地がくずれるように感じられた。

小艇は暗黒のなかを漂いながら、ヴェルトラウム号に到着した。クミは球形船室(スフェア・キャビン)の中央のエアロックのところに艇を横づけにすると、移乗チューブをのばした。移乗チューブの先端が船体に吸いつくと、クミはベルトをはずして立ちあがった。

「オリマ、宇宙服をつけたほうがいいわね。もしかすると、船内に空気がないかもしれない」

二人は宇宙服をつけると、小艇のエアロックをおしひらいて移乗チューブの中に足をふみいれた。泳ぐようにしてチューブをわたりヴェルトラウム号のエアロックの外扉にたどりつくと、外扉は何の抵抗もなく開き、二人を内部に招きいれた。外扉をとじ、内扉を押す。これもなんなく開いた。

オリマは、暗くよどんだ眼にかすかな微笑をうかべながら、船内に入った。インゲのそばへ来た安心感、そして彼女が生きているかどうかという不安、この二つがオリマの顔に錯綜したアンバランスな表情をつくり出した。

「オリマ、宇宙服をぬいでも大丈夫。空気があるわ。でも、おかしい。ヘリウム、酸素の標準空気

じゃない。地表と同じ窒素大気なのよ。漏出事故でも起こったら大変だわ。なぜ、宇宙用標準大気をつかわないのかしら」

クミは携帯した小計器ボックスを見つめながら言った。エアロックにつづく回廊にはだれもいない。JA−6のスクリーンで見たとおり、船内は沈黙している。全員が、死にたえてしまったのだろうか？　再び疑問がおそってきた。宇宙服をぬぎすてると、さっぱりした気持ちがすると同時に、無防備な裸身を眼にみえない何者かにむかってさらけだしてしまったような不安を覚えた。オリマは手に光線銃をにぎりしめ、手すりにつかまりながら船内をすすみはじめた。壁面は新しいままに磨きたてられ、電子照明は影のない軟い光輝をはなっている。明らかに誰かいるのだ。

上部の操縦室へつづくリフターのところへきた時、突然、二人は歩みをとめた。どこからともなく、かすれた声をきいたのだ。

「オリマ、待て(ヴァルト)、私は、エーデルマンだ。これ以上はいってはならん。きみたちは警告を無視した」

無気味に抑揚のないエーデルマン博士の声は、しずまりかえった船内にこだまし、虚空に死んでいった人々の死霊の叫びのするようにすら感じられた。

「オリマ、こわいわ」

「大丈夫だ。クミ、ぼくがついている」

オリマは、無意識にすがりついてくるクミの肩をだくと、大声でよびかけた。

「ドクター・エーデルマン、ここまで来た以上、ぼくだってひけない。おねがいです。イン

ゲに逢わせてください。いやだと言っても、奥へふみこみます。必要なら光線銃の使用も辞さない」

どこからともなくひくい声がブツブツときこえている。エーデルマン博士が乗員たちと話しあっているのだ。

「ユキオ、なぜきたの？　愛しているから、あなたには来てほしくなかった。もう、何もかも言うわ。……わたしだって、あなたのそばへ帰りたい。……まるで、昨日のことのようにはっきり覚えている。ウンターヴェッセンの青い空（ブラウエン・ヒンメル）、緑の森（グリューネン・ヴェルデル）。……みんな過去よ。もう駄目なのよ。わたしは、あなたとは違う。黒色矮星の重力場に突入して、食糧のすべてをもぎとられた宇宙船（ラウム・シッフ）の中で、だれが生き残れて！　わたしは死んだのよ。あなたの愛したインゲは死んだのよ。もう、この世にはいないのよ。あなたの元気な姿を想い出に……ただそれだけが……。なぜ、わたしは、地球（テラ）を離れ……、恒星船（インターシュテラーレン・シッフ）なんかに乗っ……」

インゲの声はすすり泣きにまじって聞きとれなくなった。

「ユキオだよ、インゲ、どうしたんだ？」

オリマがそこまで言いかけた時、クミの手がくいいるように彼の肩にめりこんだ。

すさまじい悲鳴が耳をつんざいた。

オリマは反射的にふりむいた。それは、そこに立っていた。オリマはそんなものを、いままで見たことがなかった。それを凝視するオリマの血管ははげしく脈うち、血潮は握りしめた拳の一端から熱湯のように溢れだしそうにすら感じられた。

頭から足まで全身みどり色のそれは人間に似ていた。太い枝のようにつきでた二本の腕の先は指のように五本にわかれていた。二本の足は床をふみしめて立っていたが、体中のいたるところから体毛のように緑色のつるがのびていた。そして頭部には針金のような緑色の髪がふさふさと生え、緑の眼はオリマの反応を見さだめるかのように、彼の顔をじっと凝視していた。

不気味な怪物の射すくめるような視線にたじろぎながら、オリマは勇をふるって尋ねた。

「おまえは何者だ！　なぜ、ヴェルトラウム号に乗っているのだ」

「わたしは、遠征隊長エーデルマンだ」

緑色の怪物の顔面の一部がひらいて、意外な名を口にした。

「エーデルマン？　そんなバカなことが……」

オリマは口ごもりながら言った。怪物にたいする恐怖はうすらぎ、それに代って数々の疑問が生じてきた。

「嘘ではない。聴くのだ。そしてヴェルトラウム号をみまった悲劇の真相を伝えるのだ。船内時間で四カ月、地球時間で二年たった時、ヴェルトラウム号は、未知の黒色矮星の重力場に吸いよせられ、宇宙塵と激突してしまったのだ。亜光速航行（ズブ・リヒト・ファールト）の船にとって、回避することは全く不可能だった。そして、我々は、多くのものを失った。船室と機関に損傷はなかったものの、食糧の全てを失ってしまったのだ。合成食糧の原料となるポリペプチド、グリセリン、脂肪酸のメインタンク、それらを失った我々に残されたのは、調理室にうつしてあった五日分の僅かな食糧だけになってしまった。餓死を目前にして途方にくれていた時、ディートゼル博士がおどろくべき提案をもちだし

た。それは彼女の長年の研究の成果をはじめて人間に試みることだった。それからさきは、彼女自身の口からきいてもらおう」

　エーデルマン博士と名のったみどり色の怪物は、そこまで話すとじっと眼をとじた。その様子は、回想に耽る人間の仕草に似ていた。みにくくひきつった緑色の顔面の中央には鼻とも見える隆起した部分がある。オリマはきゅうに謎がとけてきたように感じた。それは、まぎれもなくエーデルマン博士の変わりはてた姿なのだ。そして、インゲも……。

「インゲ、きみも……」

「だまって聴いて。わたしの研究は、すでに動物実験の段階まできていました。でも、それをわたしたちに行なう機会がこようとは、夢にも思わなかった。食糧がなくなった時、わたしたちが動物として生きていくことは不可能になったのです。ユキオ、ほかに方法は、なかった。判ってください。わたしは虚空に死んでいった犠牲者の一人として、あなたの心の中に生きていたほうが良かったのかも知れない。だが、わたしたちは生きねばならなかった。最初の恒星船、そして地球とアルファ・ケンタウリの間にある未知の黒色矮星、それらに関する資料を、わたしたちのあとにつづく人々に残さなければならなかった。そうすることが人間の使命だと感じたのです。そして、ついに総員にポルフィリン殻変換操作をおこないました。

　ヘモグロビンの中の血色素(ヘム)すなわち鉄ポルフィリンを、葉緑素(クロロフィル)つまりマグネシウムポルフィリンに変換する実験でした。ユキオ、思いだしなさい。酵素学(エンツィモロギー)のゼミで、あなたに教えたわね。周囲のアルキル基に差異はあっても、血色素(ヘム)も葉緑素(クロロフィル)もポルフィリン殻をもった分子です。ただ、違っているのは、中央部に結合手と亜結合手を二本ずつ持って窒素原子と配位的に結びついている金属原子が、鉄であるか、マグネシウムであるかなのです。わたしは核炉から発生する莫大なエネルギーを使って、血色素を葉緑素に変換し、わたしたち全員を光合成によって生きていく植物に変えた、それと同時に、わたしは、そのほかの鉄原子をふくむ諸酵素にも操作を加え、ヴァナディウム、チタンなどを核とする酸素運搬、窒素固定などの機能をもつ人工酵素まで作りだしました。

　わたしたちは皆、植物になってしまった。あなたには逢いたくなかった。でも元気な姿を見ることができて本望です。醜い緑色の怪物になってしまっても、わたし、ユキオのことを忘れなかった。かたい重合鋼(ポリ・スチール)の壁にもたれながら、なんどあなたのことを想いだしたことだろう！

　そんな想い出にひたりながら、ふと気がつくと、電子照明の冷い光の中で、わたしは醜い緑色の裸身をよこたえている。なにかが、ジワジワとわたしをしめつけ、深い絶望の淵にわたしをつきおとす。たえず襲ってくる自殺への甘い誘惑。全てを投げだしてしまいたくなる虚無への誘い。そんななかで、わたしを支えていたのは、ユキオ、あなたのことだったのです。楽しかった日々の想い出……

　ただ一度だけ。(ダス・ギブト・アインマル)

　もう二度とやって来ない(ダス・コムト・ニヒト・ヴィーダー)

　本当とは思えないほど素晴らしい(ダス・イスト・ツー・シェーン・ウム・ヴァール・ツー・ザイン)」

　リフターの上方からきこえてくるインゲの声は涙にかすみ、あの懐しい唄はするどくオリマの心をえぐった。あまりの思いがけない事実に、オリマは声も出なかった。想像を絶する方法で、ヴェ

ルトラウム号の人々は生きのびてきたのだ。

「オリマ君、わたしたちが姿を見せなかった理由がわかったろう。われわれの記録の全てをキミに託そう。なんとかして地球の大地をふみたかったので、地表への直接着陸を希望した。だが、考えてみると不可能なことだ。長い間、地球へ帰ることだけが、われわれを支えてきた。だが、それも、もういいのだ」

「ドクター・エーデルマン。しかし、地球の科学設備をもってすれば、あなたがたを元に戻すことも……」

「気休めを言うのは止めてもらおう。われわれは、ディートゼル博士のこの実験が不可逆的なものであるという意見をおして、改造を行なった。いかなる装置も無益なのだ」

「ユキオ、かえってください。そして、わたしのことを忘れて！　この船は、まもなくアルファ・ケンタウリに向かって再出発します。そこまで行く燃料はあるのです。遠征に失敗して緑色の怪物になった人々。地球の人々は、わたしたちをモルモット扱いするでしょう。それが嫌なら帰って、わかってちょうだい！」

「インゲ、ぼくは、いまでもきみを……」

オリマは即座にいうべき言葉を見いだせなかった。悲惨な境遇におちいった彼女にたいする気持ちと、その境遇を生きぬいてきた人間にたいする畏敬の念に圧倒されていた。

エーデルマン博士のわたしした尨大な資料を積みこみ、小艇のクッションに身をしずませたとき、

オリマの眼のまえのブザーが鳴った。ヴィデオのスイッチを入れる。うかびあがったインゲの顔、それは、操縦室の計器のなかにすわっている、ありし日のインゲの姿だった。美しくカールしたプラチナブロンドの髪。キラキラと輝く理智的な大きな瞳。それらは事故にあうまえのフィルムだった。

「ユキオ、わたしよ。インゲよ。さようなら（アウフ・ヴィーダー・ゼーエン）。でももう逢うことはない。また逢いましょう（ヴィーダー・ゼーエン）じゃない。ほんとにサヨナラネ」

「インゲ、ぼくの愛するインゲ。もう、きみとは逢えない。ほんとうに、きみだけが唯一人の女性だった。さようなら」

スピーカーから流れでるインゲの最後の声に震える声で答えながら、オリマの両眼から涙がとめようもなく流れでた。クミは、その涙を美しく崇高なものに感じた。愛するものを失う悲しみが、五分とはなれていない距離にいながら愛するもののために何もできない無力感が、オリマの心をますます錯綜した耐えがたいものにしていた。

オリマの口唇がかすかに動いた。涙にかすれた声は、一つのメロディーをつくりだした。それは、あの古い民謡の調べだった。スクリーンにうつっているインゲの姿は、オリマの心に強い烙印（らくいん）を押した。追想の糸は、たぐればたぐるほど縺（もつ）れあい搦（から）みあいして、彼の心に暗い翳をつくりだした。五年の時の流れが、果てしない回想を結晶化し美化したのだ。インゲの想い出は、幾重もの絹のヴェールでおおわれた象牙の函にしまいこまれ、それは、パンドラの函のように二度とひらかれることはないのだ。

いつの間にか小艇はＪＡ－６の格納庫のなかにあった。半月形のハッチの開孔からヴェルトラウム号が見えた。その尾部噴射管（リヤ・ノバル）から緩やかな光芒がながれだしていた。ハッチを閉じ、小艇（スペース・タッグ）をおりると、オリマは、ためらいなく回廊の方へ進んだ。

「オリマ――！」

呼びとめるクミの声にふりかえりもせず、オリマは肩をおとしたまま、管制室の方へ歩いて行った。

キューピッド

星　新一

その青年はフリーのカメラマンだった。独身できままな日常だったが、いいかげんな生活ではなかった。いい作品をものにしたいとの意欲に燃え、それが万事に優先していた。仕事が一段落した時にはバーに行って酒を飲むのが楽しみだった。ほどよい酔いは神経の疲れをもみほぐし、新しい活力をもたらしてくれる。

　その日の夕ぐれも、青年は一軒のバーにいた。はじめて入った店だった。繁華街からはなれた静かな裏通り。たまにはこのようなところで飲むのもいいなと思い、また店のつくりがしゃれていて、そんなことが気をひかれた理由だった。なかでは数人のお客が、それぞれ品よく飲んでいた。

　青年は奥のほうの椅子にかけ、グラスを重ねた。そして、つぶやくのだった。いい作品をとりたいものだな。いい被写体にめぐりあって、存分にシャッターを押してみたい。人々があっというようなものを作りあげてみたい……。

　いいことが近づいてくるようなけはいを感じた。もう少し酔おうかな。青年はからになったグラスをバーテンに押しやろうとしたが、その手をとめた。とまってしまったのだ。彼の目は一点にむかって静止した。入口にちかいカウンターの席に。

　そこにはひとりの女がいた。さっきまでいなかったのだから、ほんのいましがた入ってきたのだろう。赤みがかったカクテルのグラスを口に運ぼうとしていた。二十歳をちょっと

すぎたぐらいの年齢だろうか。

　青年の目は彼女に吸いつけられ、つづけざまに何回もまばたきをした。連続してシャッターが切られているような感じだった。事実、彼は心のなかのフィルムに、その姿を鮮明に残そうとしていたのだ。これなのだ。彼は自分に言いきかせていた。これなのだ、さがしつづけていた被写体は……。

　美しくはあったが、とびきりの美人というわけではなかった。美しいだけの女なら、いくらでもある。プロのモデルなどがそうだ。整形美容と化粧技術とで、かなりのところまで作りあげることができる。

　しかし、いまカクテルを口にしているその女には、美しさ以上に重要なものがあった。表情。心の底からこみあげ、顔からあふれだしている表情。それがあったのだ。そしてその表情の示すものは、恋。

　恋そのものがそこにあった。なんの説明もいらない。咲きかけの花、暗やみにただよう香水のかおり、月光の噴水、ほのかな雨。火のようで、波のようで、やわらかく強く、やさしく苦しく、美しく緊張して、はげしさといらだちが……。

　どちらかといえば地味な服装が、女の表情をいっそうきわだたせていた。目がうるんでいる。押えようとしている息づかいさえも、はっきりこちらに伝わってくるようだ。

　青年はまぶしげに目をつぶった。普通だったら、彼女がああも熱烈に恋をしている男性はどんな相手だろうと想像するところだろうが、この青年の場合はちがう。どう作品にしあげるかを確認する気分だった。いや、確認もなにもない。もうすでに完成しているではないか。あとは人びとから

賞賛の声をあびるだけだ。それが目に見えるようだった。

最も原始的で、いつも新鮮な感情、恋。それを完全に表現し、とらえた写真。国内のみならず世界中で評判になるだろう。

青年はふたたび目をあけた。しかし、女の姿はさっきの席から消えていた。みまわしてみたが、店のなかにもいない。幻覚だったのだろうかと、青年は思った。こころよい酔いのうみだした一瞬の夢だったのだろうか。あんなにさっと飲んで出てゆく女客など、ありえないんじゃないだろうか。待合せの時間を思い出したのだろうか。いやいや、いかに恋に呆然としていても、その恋人の待合せの時間を忘れるなどということはないだろう。

青年は残念がった。画家だったら、いまのイメージを絵にすることができるだろう。しかし、カメラマンとなるとそうはいかないのだ。彼はくやしがり、やけぎみになってさらに酒を飲んだ。

あれは幻覚だったのだと思いこもうとしても、なかなかあきらめきれるものではない。つぎの日、青年はなにも手がつかずむだに時間をすごしたあげく、夕方にまたそのバーを訪れた。幻覚でもいい、もう一回だけ見たいものだと。

そして、また見ることができたのだ。恋の表情を持つあの女を。女が入ってくるのには気がつかなかった。ふと目をやると、このあいだのように、いつのまにかそこに出現していたのだ。

こんどは見のがさないぞ。煙のごとく消えるのかどうか、たしかめてやる。青年は見つめつづけた。グラスに口もつけず、タバコに火をつけるのもやめて。目をそらせたすきに消えてしまうかもしれないのだ。

女の表情はすばらしかった。恋のすべてがそこから発散している。それはいきいきとしたメロディとなって、空気を限りなくふるわせつづけているようだ。しかも、しだいに強く、はげしくなり……。

女はカクテルを飲み終わった。そして、しとやかだがすばやく立ちあがり、金をおき、ドアから出ていった。つばめが風をくぐって飛び去っていったという感じだった。あ、出ていった。青年は頭の片すみでそう思った。バーテンが金をしまい、グラスを片づけている。とすると、幻覚ではない、現実の女だったのだ。

しかし、そう気づいた時には、もはや追いかけてもむだなほどの時間がたっていた。青年は立ちあがるのをやめ、酒の注文をしながらバーテンに聞いてみた。

「いまの女の人、どういう人なんでしょうか」

「さあ、なんとも申しあげられませんね。お客さんのせんさくはしないことにしております。しかも、いつもひとり。お客さんどうしの会話から推察することもできませんしね」

「ここにはよく来るんですか」

「時どきですね。しかし、カクテル一杯ですぐお帰りになってしまいます。ですから、ほかの男のお客さんも、話しかけるひまがない。それに、なんだかすごい恋人がいそうな感じでしょう。とても割り込めそうもないと、みなさん、ためらってしまうんですねえ。考えてみると、ふしぎな女の人ですよ」

その話で、青年は元気づいた。やはり実在の女なのだ。写真をとらせてもらうことはできるだろ

う。その交渉には彼も自信があった、商売柄なれていることでもある。べつに服をぬいでもらうこともない。表情だけとらせてもらえばいいのだ。また、恋の相手になってくれというわけでもない。なんだったら、相手の男性の了解を求めてもいい。簡単なことだし、順調に進むにちがいない。

それから三日ほど青年はバーにかよったが、女にあうことはできなかった。もうあえないのではないかとの不安。しかし、待ちつづけるうちに、また女があらわれた。人の心を迷わせる夕ぐれの空気が凝縮し、バーのドアから形となって入ってきたかのようだ。女はカクテルを注文する。青年はそばの席に移った。近くで見ると、印象はさらに強かった。恋はまつげの一本々々の先にやどり、白い歯の表面に結晶し、口もとにも、髪の毛にも、いたるところに恋がひそんでいるかのようだ。

どう話しかけたものかと、彼はためらった。いざとなると、うまく言えない。だが、急がなくては。時間はあまりないのだ。見つめてばかりいるわけにはいかない。ためらったあげく、彼はやっと言った。だが、はっきりした言葉にはならなかった。

「あのう……」

「なんでしょうか」

女はカクテルを半分ほど飲み、こちらをむいた。なにか遠くを見つめているような目つきだった。恋に燃えている目つきだ。青年はそう思い、また時間が少し流れた。

「ぼくはカメラマンです。こんなことをお聞きするのは失礼なんでしょうが、あなたはどんなお仕

事を……」

「あたし、あたしは恋の女神……」

女は言った。答えるのがめんどくさそうな、あっさりした口調だった。しかし、その言葉に青年は驚いた。こっちがつぎに言おうとしていたおせじの文句を、さきに言われてしまったからだ。彼はうなずく。そう。そうとしか言いようがないではないか。恋の女神。

「あたし、もう行かなくては……」

女は金を払い、いつものようにすばやく出ていった。またも青年はあとを追いそこねた。恋の女神という言葉を、あれこれ考えていたのだ。結婚を受付ける役所の窓口の係だろうか。デパートの異性へのおくりものコーナーにでもつとめているのだろうか。それとも恋愛のカウンセラーかなにかだろうか。しかし、どうもちがうようだ。そんな職業に恋の表情は必要ない。では、なんなのだろう……。

いや、そんなことはどうでもいいのだ。問題はカメラの前に立ってもらえるかどうかなのだ。いやいや、ぜがひでも立たせなくてはいけないのだ。このつぎには必ずそうしてみせる。たとえ、地の果てまであとを追いつづけてでも……。

そのつぎの日、決意をかためて待っていると、恋の女はまたあらわれた。そして、動作はきまっていた。ドアに近いカウンターの席に腰をおろし、カクテルを三口ほどで飲みほし、高まる恋の表情とともに、またすばやく出てゆくのだ。

青年はあとを追った。好奇心と仕事への熱意が彼をかりたてた。あの女、どこへ行くのだろう

う。どんな男と会うのだろう。どんな家に住んでいるのだろう。また、バーから急いで帰るわけは。いずれにせよ、それらの謎がとけるのだ。

女の足は意外と早かった。歩きなれた道のせいだからか夕ぐれのなかを泳ぐ魚のように軽やかで、青年は時どきかけ出さないと見失いかねなかった。女は商店街からはなれ、住宅地にむかい、さあ十分ぐらい歩いただろうか。アパートの入口に入っていった。コンクリートの五階建てで、そう高級でもなければ、そう安っぽくもない。新築でもないが、古びてぼろぼろというわけでもない。そんな感じの、あたりの風景と調和した目立たないアパートだった。

青年はさらに足を早めた。道路とちがい、建物内だと見失いやすい。ここの住人なら管理人に聞くという手もあるが、訪問者だったら、どうしようもないのだ。入口で待ちつづけ、徹夜になってしまうことになりかねないのだ。

青年は女のすぐうしろに迫った。だが、女はまったく気がつかない。急ぐのに熱心なので。恋に盲目になっていて、ほかのことには注意が及ばないという感じだった。この女、何階に住んでいるのだろう。

女はアパートの入口をはいったが、そこにある階段をあがらなかった。おりていったのだ。地下への階段をおりたのだ。コンクリートに足音が反響する。地下は廊下をはさんで、上の住人たちのための倉庫や、道具置場や水道のメーターの室などが両側にある。こんなところで、なにをするのだろう。うすぐらく人影はないが、ランデブーの場所としてはロマンチックでなく、ふさわしくない。青年は首をかしげたが、すぐにやめた。あくまで押しきらねばならないのだ。

女はドアのひとつをあけ、くぐり抜け、うしろ手でしめた。それがしまる寸前、青年はあとを追ってあけて入った。そこにはさらに下への階段があり、それをおりたつきあたりの部屋に女は飛びこんだ。

青年もつづく。ノックをしたが返事がないので、勝手に入った。殺風景な室だった。壁にはなんの飾りもない。入口のそばには長椅子があった。天井には照明があり、やわらかな光がまんべんなくあたりにとどいていた。

女の姿もあった。彼女はこちらに背をむけ、机にむかってなにかをしていた。小さな金属的な音が何回かつづけざまにした。あせった感じのこもった音だった。ほっとしたように息をするのが、そのうしろ姿からわかった。青年の驚きはつづいていた。なぜこんな部屋があり、なぜ彼女が作業のようなことをしているのだろう。しかし、いまさら引きかえす気もない。彼は言った。

「あの、こんにちは……」

「なんでしょうか」

女はゆっくりとふりむいた。不意の侵入者をとがめる口調でもなかった。それに元気づけられ、青年は話をした。

「ぼく、少し前にバーでお会いした者です。カメラマンなのです。失礼とは思いましたが、ぜひお願いしたいことがありまして、あとについてここまで来てしまったのです」

「そうでしたの。で、どんなご用でしょう」

女はすなおに聞きかえした。青年には質問したいことがいろいろあったが、まず用件を言った。

「じつは、写真のモデルになっていただきたいのです。お顔だけでもいいのです。あなたはすばらしい。本当に恋の女神そのものですよ。あなたの写真は世界中の人の目にふれ、永遠に残るでしょう。ぜひ、とらせて下さい。お礼はどのようにもいたします。もし、ご希望があったら、遠慮なくおっしゃって下さい」

「じゃあ、これを手伝っていただけるかしら……」

いやにあっさりとした承諾だった。あっさりしすぎているし、また予想外の申し出でもあった。かなりの額の金銭の用意もしてきたのだが、こんな答をするとは。青年は好奇心にかられ、そばへ近よってのぞきこんだ。

「なんなのですか、それは……」

「こういうふうにやるの。簡単な仕事よ」

机の左には二つの籠があった。それぞれに金属製のプレートのようなものがたくさん入っている。一方はかすかに金色をおび、一方の籠のは銀色だった。女は手をのばし、その一枚ずつを取って重ねあわせた。机の上にはホッチキスを大型にしたようなものがあり、その重ねた二枚をはさみ、押す。書類をとじるのと同じように、音がして二枚がくっつく。それを机の右にある籠に入れるのだ。右の籠にはそんなものがたくさん入っていた。

「ちょっとやらせて下さい」

と青年は言った。自分にもできそうな気がした。しかし女は、初心者がやりそこなうといけないと心配してか、籠のなかをさがし金色をおびたプレートを一枚つまみあげた。それから、自分のポ

ケットから銀色のを出し、青年に渡した。

「これでやってごらんなさい」

青年はやってみた。やりそこなわないよう注意し、さっき見た通りにやってみた。重ねあわせ、ホッチキスを押し、右の籠にそっと入れる。重ねあわせる時、ホッチキスを押す時、ちょっとした快感が手に伝わった。なまなましく、なにか生き物に触れたような気がした。

「こんなぐあいでいいんでしょうか」

彼が聞くと、女はうれしそうに言った。

「いいわ、その調子よ。本当にお上手だわ。つづけてやっていただけないかしら」

「いいですとも」

青年は女のきげんを損じないようにと、二、三回それをくりかえした。お気に召しましたかと聞こうとふりむくと、女の姿はなかった。部屋から出ていったらしかった。しかし、青年はそれをつづけた。いまは大事な時なのだ。女が帰ってきた時に、仕事がはかどっているかどうかで、首をたてにふるか横にふるかがきまるかもしれないのだ。たてにふらせなければならない。作品ができるかどうかの境目なのだ。

彼は熱心につづけた。わけはわからないが、おもしろみも感じられる作業だった。女はなかなか戻ってこなかったが、青年は空腹ものどのかわきもおぼえなかった。どれくらい時間がたったのだろう。腕時計はとまっていてわからなかった。ねじを巻き忘れていたようだ。地下室なのであけがたになったのかどうかわからなかったが、かすかにねむけが襲ってきた。彼はドアのそばの長椅子

にねそべり、少しまどろんだ。

目がさめると、胸のなかでなにかが燃えるようにうごめいていた。いや、胸のなかで熱いかたまりが大きくなり、それが彼を目ざめさせたというべきだろう。青年はその異常な感じに驚いた。からだのなかからわきあがる衝動なのだ。なにへの衝動なのかは、すぐにわかった。説明なしにだれにもわかる感情。恋への衝動なのだ。

あの、恋の女が戻ってきたのかな。青年はあたりを見まわしたが、そうではなかった。しかし、女からたのまれた作業のことを思い出し、また内部で燃えはじめた恋への衝動を持てあまし、気をまぎらそうと、プレートを重ねてホッチキッスを押すことをやった。

カメラマンには、こういった仕事はつきものなのだ。いつだったか、農家のがんこな老人の写真をとるため、田植えを手伝ったことだってある。

いくつかやっているうちに、さっきのたえがたいほどの恋への衝動はいくらかおさまっていった。ほかにすることもなく、青年はその作業を進めた。しかし、それにしても、なんに使う品なのだろう。電気製品の部品とも思えなかった。輸出むけのクリスマスの飾りとも、子供むけのオモチャとも思えなかった。

なにかもっと意義のありそうな感じがするのだが、それがなにかはわからなかった。よくながめると、プレートの表面には微細な彫刻で抽象的な模様が描かれている。それは、それぞれちがっているようだ。高度な電子計算に使うパンチカード、厳重な部門での身分証明書。そんな感じ。多くの意味がその表面におさめられているようだった。

金色がかったのと銀色のプレートとを重ねあわせる時、磁性でもおびているかのように、さっとくっつく。その感触は微妙で弾力にみち、くすぐったいような、ほっとするような快いものだった。ホッチキッスでとめる時も、しびれるようなものが伝わってくる。やっていて、つまらないことではなかった。

時間がたっていった。しかし、女は帰ってこず、だれかが訪れてくることもなかった。青年の心に不安がめばえた。だまされたのかもしれない。彼は立ちあがった。そしてドアに手をかけた時、恐怖めいたものを背中に感じた。ここにとじこめられてしまったのかもしれない……。

しかし、ドアは開いた。階段をあがり、地下一階の廊下に出て、アパートの出入口まで行ってみる。時刻は夕方だった。彼は道を歩き、バーに急いだ。あそこに行けば、女のようすがわかるかもしれない。だが、バーに近づくにつれ、からだのなかで、さっきの恋への衝動がまたも高まってくる。それを押えつけながら急ぎ、バーへ飛びこむなり言った。

「ウイスキーをくれ。あの、それから、あの女の人はどうしたか知らないかい。いつもカクテルを一杯飲んで、さっと帰る女のことだよ」

「あ、あのかたでございますか。きのうでしたね、あなたがあとを追って出ていかれたのは。あれからまた戻っておいでになり、珍しくゆっくりお飲みになりましたよ。あんなこと、はじめてです。そのうち、男のお客さんが話しかけてきて、意気投合なさったようで、楽しげに笑いあっていましたよ。育ちのよさそうな、品のいい男のかたでした」

「それからどうした」

「ごいっしょに出ていかれました。あとは存じません。想像はできますがね……」

「そうか……」

青年はウイスキーを口にほうりこんだ。酔い心地にはなったが、からだのなかで大きくなりつづける衝動は、それをはるかにうわまわっていた。そして、それを押える方法はあれしかないことも感じていた。あの地下室に戻り、作業をつづけることだ。

青年は金を払い、かけだした。地下の部屋に飛びこみ、プレートの作業をいくつかやる。気分はしだいにおさまってゆく。そのかわり、女への怒りが高まってきた。勝手な女だ。この奇妙な仕事をひとに押しつけ、遊びまわっているらしい。しかし、それにしてもおかしい。バーで知りあった男性と仲よくなるとは。いままでの、恋にあふれた表情はなんだったのだろう。

青年はアパートの管理室をたずねた。少し待たされたが、会うことはできた。

「じつは、この建物に住んでいる女の人についてなんですけど、背の高さは普通で……」

青年は特徴を説明した。しかし、管理人は首をかしげて言う。

「そんなかた、いないようですな」

「住んでいるのではないかもしれません。この建物の地下二階で……」

「地下二階ですって。そんなもの、ありませんよ。地下は一階だけです。なにかのまちがいでしょう」

むりに引っぱってゆくこともできず、どう説明したものかもわからない。そのうち、例の衝動が高まり、青年は室にかけもどらなければならなかった。プレートを重ねる作業をはじめると、気分はおさまる。

地下二階などないと、管理人は言っていた。どういうことなのだろう。ここはなんなのだ。青年の頭のなかでしだいに疑問が形となってきていた。ここは特殊な空間なのかもしれない。ずっと食事をしていないにもかかわらず、空腹感はおこらないのだ。現実とはべつな世界なのかもしれぬ。

青年はおもしろくない気分で、籠のなかのものをぶちまけた。部屋じゅうにまきちらし、長椅子の上で眠る。しかし、やがてあの衝動によって目ざめ、あたりを見まわすと、すべてはきちんと元通りになっていた。ひとつの籠には金色のプレート、もうひとつには銀色のが、机の右のには重ねあわされたプレート。そして、机の上にはホッチキス。いつでも仕事がはじめられるようになっており、それをうながしているようだ。また、うながされなくとも作業をやらないことには、衝動は解消しない。

異常であるばかりか、しゃくにさわる事態だった。青年はすなおに従う気がなくなった。金色のプレートどうしを重ね、ホッチキスでとめることをやってみた。この仕事はなぜかやりにくかった。銀色どうしもやはり同じ。まぜこぜにして六枚ほど重ね、むりやりホッチキスにかけてもみた。こんなことが反抗になるかどうかは、さっぱりわからなかったが。

警察に連絡し助けてもらうとするか、と青年は思った。外へ出て公衆電話をさがし、ダイヤルをまわす。しかし、彼が説明すればするほど、警察は不信の口調になるのだった。

「そういうことは、病院へおいでになってお話し下さい。こちらはいそがしいのです。いま、同性愛が急にふえ、乱交がはやりその問題で大変なのです。なんで、こう変な現象が発生するのか

……」

電話は切られ、かけなおしても相手になってくれなかった。また、例の衝動も高まり、それを静めるため地下の部屋へ戻らねばならなかった。青年は作業をつづけ、つづけながら考えた。事情が少しずつのみこめてきたようだった。あの女は本当に恋の女神であり、これがその仕事だったのかもしれぬと……。

この金色のプレートが男、銀色のが女。逆かもしれないが、なんとなくそう思った。それをホッチキッスでとめる。これが恋の作業なのだ。ここでこれをすることによって、そとのどこかで男女が恋におちいる。

愛するか愛さないかは、われわれの自由にはならない。恋をこのように断じた人があった。人間の自由にならないとすれば、だれのしわざなのだ。すなわち、ここだ。

恋はハシカのごとく、かからねばならない病気である。恋は人間の最大の愚行である。恋は偶然であり奇跡である。古人はいろいろと形容した。意志や理性から恋はうまれない。友情や利害からも恋はうまれない。どこからうまれるのだ。そんなことを考えてもみなかったが、いま、その問題と答とがいっぺんに理解できた。すなわち、ここなのだ。

ほうっておいても人間はいつかは死ぬ。いちいち殺してまわる死神などは存在しなくてもいいのだ。富は才能と努力の集積である。だから、福の神なども存在しなくてもいいのだ。しかし、恋の神だけは必要なのだ。どこかでせわをやいてやる者がいなければ、どうにもならぬ。人間には、恋を自分でコントロールするハンドルがついていないのだ。

籠のなかのたくさんのプレート。それらが早くせわをしてくれとの要求をしている。恋を、恋を、恋をと。それが熱気となり、エネルギーとなり、念力となって、むりやり作業にかりたてるのだ。

かりたてられて、青年は作業を進めた。金と銀のプレートはうれしそうにくっつきあい、ホッチキッスでとめられ、とめられる瞬間にはよろこびの声のようなひびきをたて、右の籠のなかに空中で踊りながらほうりこまれる。だれかがやらねばならないのだ。いいことをしているのかもしれないと、青年はちょっとだけ思った。

しかし、あまりいい仕事でないことは、すぐにわかってきた。いかに作業をすれども、左の二つの籠のなかのプレートはへらないのだ。それはそうだろう。恋への欲求が世から消えることはないのだ。

また、ホッチキッスのとめ方がいいかげんだったりして、右の籠のなかでプレートがはなれると、いつのまにか左の籠に戻っている場合もあるらしい。ホッチキッスの穴のあるプレートが、左の籠から出てくることもあるのだ。終わることのない作業。

恋の支配者なんだ、と思ってみる。たしかに支配はしている。しかし、だれも恐れてくれない、感謝もしてくれない。みな自分の力でなしとげたことと思いこんでいるのだ。こんなむなしいことってあるだろうか。みなおれのおかげをこうむっていい目にあっていながら、ここにこうやってせわをやいている者が存在していることを、考えてもみないのだ。死神にとらえられ、いやおうなしにこき使われるという物語があったようだ。そのほうがまだいい。

これが恋の作業でなく、破局の作業だったらどんなにいいだろう。みなもつらいだろうが、おれもつらいのだという、均衡みたいなものができてくれる。しかし、これは、みながうまいことをやっており、こっちだけがだれに知られることなくひとり苦しむのだ。

青年は単調に作業を進めた。同性愛や乱交を製造するのは、手数ばかりかかって、こっちにいいことは少しもない。それでも、腹が立つたびにいくつか作りだしてもみる。

あの、恋の女神はどうしたのだろう。ここへ戻ってきてくれないものだろうか。彼はそんな期待を抱き心から祈りさえもしたが、戻ってきてはくれなかった。最初に押させられたプレート。あの一枚が彼女のぶんだったのだろうな。思いあわせると、それ以外に考えられなかった。

あの恋の女神、いつからこの作業をしていたのだろう。それを想像すると、うんざりした気分になる。遠い遠いむかしからにちがいない。その長い長い時間ずっと同じ仕事のくりかえしだったのだ。休みをとりたくもなり、人間なみに恋をしたくもなるだろう。しかし、気も遠くなるほどの長い時間ののちの休暇だ。ひと月やふた月ではすまないだろう。一年や二年でも。へたをすると……。彼はその先を推察するのがこわかった。

恋の女神の手助けをするキューピッド。かわいらしい子供の姿でおなじみだ。背中の翼で飛びまわり、金色の矢でハートとハートをぬいあわせる。ほほえましいものだったが、おれがそれにされてしまったのだ。実体はこれ。あわれな救いのないキューピッド。そして、あわれな無報酬の作業。孤独と絶望のなかの、ばかばかしくてもやめられない作業。

それでも、青年は時どき部屋から出て、バーに行った。もっと近くにあればと思うのだが、ない

のだった。行動半径ぎりぎりにあるバー。往復をいかに急いでも、落ち着いて飲むひまはほとんどなかった。なにもしらぬバーテンが声をかけてくる。

「なにか楽しそうなご様子ですね。お客さん。恋をなさっておいでなんでしょう……」

「まあね」

くわしく話すひまはないのだ。バーの壁にある鏡には、自分の顔がうつっている。恋の表情に輝いている顔だ。ここへ来る途中恋への衝動が高まりつづけ、ここで最も強くなる。グラスを急いであけ、酔いで衝動をごまかしながら、席を立ってあの地下室へと帰らなければならないのだった。

だれかが好奇心を持ってあとをつけてきてくれないかと思う。しかし、被写体をさがして血まなこになっている女性カメラマンらしいのが店にいたことはなかった。

また、無意味で残酷な恋の仕事をつづける。いったい、他人の恋が、おれにとってなんだというのだ。なんの価値もありゃしない。ばかばかしいしろもの。うぬぼれとエゴイズムのかたまり、この色きちがいのプレートどもめ。青年は時たま腹を立て、籠をひっくりかえす。だが、そんなことをしても役に立たず、ひと眠りするとすべてはもとに戻り、強い情欲で彼を仕事にかりたてるのだ。

思い出したように外出し、警察へ電話をしたりもした。だが、声をおぼえられており、話しはじめただけで、笑いを押えたいいかげんなあしらいになってしまう。バーへ寄った時に新聞をもらってきて読んだりもした。しかし、それもまもなくやめてしまった。恋だの愛だのの文字を見ると不快になる。いい気なものだ、おれがこれだけ苦しんでせわをしてやっているのに、やつらは自己の

力による成果と思いこんでいるのだ。

むかむかすると、わざとぞんざいに仕事をしたりする。右の籠にほうりこむとまもなく、プレートがはなれればなれになるのだ。そとの世界のどこかで、とたんに恋が終わるのだ。ざまあみろと思うが、そんな感情が当人たちに通じはしない。やつらは、やはり自己の判断で恋を終わらせたのだと思っているのだろう。そう想像するとばかばかしくなり、あらためてホッチキッスでしっかりとめなおしたりもするのだ。

すなおに仕事を進め、立腹し、ささやかな悪趣味を満足させ、また人びとの幸福を祈り、そんなくりかえしがつづいた。時どき心の底から叫ぶ。これが終わってほしいと。しかし、そんなことはないのだった。いかに数をこなしても、プレートはどこからともなく補充され、なくなることがない。そして、能率が落ちると、大ぜいの恋への欲求が彼を容赦なくむちうつ。

そのつらさに青年はなれることがなかった。なれるどころか、苦痛は徐々にふえていった。左の二つの籠のプレートのふえかたがしだいに大きくなってきたようだった。一方、彼の処理する能率の限界というものがあった。さばききれない。おれは人間なのだ。女神とはちがう。女神なら能率をあげ、なんとかする法だって知っているだろう。このような分工場をどこかに作れもするだろう。早く帰ってきてくれ。しかし、恋を楽しんでいる女神は、こっちのことを忘れているのだろう。依然として戻ってこなかった。

青年は外出もしなくなった。ほとんど眠らなくなった。特殊な空間にいるため体力はおとろえなかったが、それはいいことではなかった。倒れて気を失うこともできないのだ。機械がうらやましい。機械ならある限度以上はやらなくてもいい。

うつらうつらしても、すぐ情欲の嵐のむちでたたきおこされる。必死になってさばいても、プレートはふえつづけ、籠からあふれはじめている。数えきれぬプレートたちの要求は、すさまじい勢いだった。

青年のからだじゅうで、花火がはじけつづけ、熱湯があばれまわり、無数の虫がうごめき、なにかこまかく鋭いものがぶつかりあい、巨大なドラムが大きな音をたててふるえつづけた。すべては凶暴化し、にくしみとなり、爆発を求めて……。

狂うのではないかと青年は思った。いや、狂いたいと祈った。特殊な空間であり、体力のおとろえぬごとく、狂うこともできないのだろう。だからこそ祈ったのだ。

そして、ある時、彼はばったりと倒れた。なにもかも投げ捨てた眠り、しかし、その眠りも長くはつづかなかった。情欲のむちのためではない。あれだけつづいた情欲のむちを感じないことへの不審さのためだった。なぜだろう。

おそるおそる籠のほうを見る。あれだけあったプレートがからになっていた。どの籠もからだった。数分ののち、彼は思った。のろいから解放されたようだ。きっと、どこかよそでもっといいキューピッド役が作られ、工場がそっちへ移されたのだろう。すばらしいことだ。

青年は籠に近より、ひっくりかえしてみた。金色のプレートが一枚だけあった。それを拾いあげた時、彼はそれが自分のプレートだと直感した。そして、もうひとつの籠。そこにも銀色のプレートがあった。その感触も好ましいものだった。いままでいじったどの銀色のプレートよりも好まし

い。

　青年はそれを重ねあわせた。いつくしみながら、ていねいにホッチキスでとめる。そして右の籠に入れる。右の籠もからだったが、その一組を静かにうけとめた。これで終わったのだ。

　軽い足どりで、彼は階段をのぼる。口笛を吹きたくなるような気分だった。アパートの出入口。あかるい陽ざし。だが、そこで彼の足はとまり、口笛もやんだ。

　そとにはなにもなかった。廃虚がひろがっているばかり。すべてが崩れ、焼けこげ、むざんなながめがつづいている。

「ついにやりやがった」

　青年はつぶやき、気の抜けたように歩きはじめた。歩いたところで、行くあてはなにもないのだが。

　どこからともなく呼び声がする。近くの崩れたビルのかげから、女がひとり歩いてきた。弱りきった力をふりしぼり、やっと歩いているという感じだった。青年はかけより、倒れかかる女を抱きとめた。胸が高鳴る。恋なのだ。これが自分自身の恋なのだ。

「お会いしたかったわ」

　女が言った。青年を見つめる目。やはり恋にあふれていた。そして、それには見おぼえがあった。ずっとずっと昔、バーで会い、こんなはめになったきっかけの女。恋の女神だった。

「きみだったのか」

「あなたには悪いことをしたわね。でも、あたし、あなたのおかげでやっと、恋というものがどん

なものか知ることができたわ。あの長い年月の末に……」

　女の呼吸は弱くなった。青年は言う。

「おい、しっかりしてくれ。どんなに会いたかったことか。きみを忘れたことはなかった」

「でも、だめなの。人間の生活をつづけたためか、からだが弱くなってしまって、いままで生きのびたのがせい一杯なのよ」

「死んじゃだめだ。唯一の女。きみを愛している」

「あたしもよ……」

　しかし、彼女の声はそれで終わった。

　しばらくののち、青年は立ちあがり、ビルの地下へ戻ろうとした。

　いまとなると、あの作業もなつかしい。階段をおりる。地下二階への階段へ通じるドアを開く。しかし、そこにはコンクリートの壁があるばかり。階段もなく、ゆきどまりなのだ。地下二階のあの部屋は、もう存在の必要を失ったのだ。彼はたたずみ、目をつぶる。そこにはなつかしい室がみえる。右側の籠、そのなかで銀色のプレートが、いま消えてゆく。そしてただひとつ残ったもの、自分のである一枚の金色のプレートが、まもなく訪れる消える瞬間を待って……。

解説

豊田　有恒

最近では、SF小説も、たくさん読まれるようになりました。しかし、それでもときどき、とんでもない誤解にぶつかることがあります。SFとは、科学小説だと思っている人が、まだかなりいるようです。若い女の人のなかには、数式や理論がでてくる小説だと、はじめから思いこんでいて、「食わず嫌い」になっている人が、いるようです。

もちろん、そういうSFも、ないわけではありませんが、全体からみれば、ごく一部にすぎません。

誰が読んでも、よくわかるからこそ、SFがひろく読まれるようになったのでしょう。

このアンソロジーには、そういう短編ばかりを、入れさせていただきました。ロマンSFと銘うちましたが、SFというのは、もともとロマンなのですから、当然すぎるくらいです。

それでは、ひとつひとつの作品について、個別に説明していこうと思います。どの作品も、日本SFを代表する、良い作品ばかりですから、べつだん解説の必要もないくらいですが、蛇足のつもりで読んでください。

『人魚姫の昇天』　小松左京

SF作家は、ときどき、メルヘンやお伽話に、挑戦します。それを、SF的にうまく料理してしまうのです。といっても、西遊記の孫悟空が、光子ロケットに乗るというのでは、なにもかも、ぶちこわしです。

小松さんというと、『日本沈没』『エスパイ』など、百科辞典みたいな知識を駆使して、力業で読者をねじふせていく超大作作家のようなイメージが、つよいようです。しかし、それが、小松さんの作風のすべてではありません。小松さんの扱うテーマは、実に広大なものです。ドタバタSFを書くかと思うと、時代SFを書いたりします。女シリーズを書くかと思うと、未来SFを書いたりします。

小松さんには、たくさんのショートショート作品もあります。星さんとは違った意味で、どれも傑作といえます。そのなかで、お伽話や昔話をテーマとしたものが、いくつかあります。たとえば、羽衣伝説に題材をとったものなどです。この作品も、そういった系列に入ります。アンデルセンの人魚姫が、小松さんの手にかかると、こうなるという恰好のサンプルです。

『死を蒔く女』　平井和正

平井さんは、ぼくと同年の作家です。デビューした時期も、ほとんど同じでした。説明する必要もないくらい有名な、ウルフガイ・シリーズの人気のため、スーパー・バイオレンス小説の作家ということになっていますが、それだけが平井作品のすべてではありません。ハードボイルド作品というのは、男の世界のように思われがちですが、平井さんの場合には、繊細な感覚がついてまわり

ます。ウルフガイのファンに、女性が多いのは、そのためでしょう。
この作品は、かなり初期に発表されたものです。平井さんに、こういう方向を志向した時期があったことを、驚く読者もいるのではないでしょうか？

『世界樹の高みに』　田中光二

エーリアン・メモ、ジョン・エナリー、シリーズの一編として書かれた作品ですが、これだけは、ちょっと異質の作品として、独立しているので、この本に入れさせていただきました。
田中さんは、まさに、現代の作家という感じの人です。身長一九〇センチ、ハンサム。スキー、スキンダイビングの名手で、車の運転やマージャンは、プロ並みの実力です。
田中さんの作品の主力は、あくまで長編にあるようです。したがって、短編の作品数は、あまり多くはありません。そのなかから、ロマンチックな話を、ということで、この作品におちついたわけです。田中さんの作品をハードボイルドとみる人もいますが、それは、違うと思います。田中さん独得のムードのある小説なのです。長編小説『白熱』に描かれるような、田中さんの世界のなかに、一人の異邦人を放りこんだ、野心的な作品といえます。

『レモンのような二人』　筒井康隆

筒井さんの作品のなかでは、異色といえるものです。筒井さんは、いま、もっとも学生に人気のある作家の一人ですから、たいていの作品は、とっくに、読者の目にふれてしまっています。どの作品をいただくべきか、編者のぼくとしては、苦労させられました。もちろん、この作品も、単行本に収録されていますが、筒井作品のうちでは、知名度の低いほうといえます。たまたま、ロマン

チックＳＦというアンソロジーなので、わざと、ひねくれて、この作品をいただくことにしました。もちろん、筒井さんの作品のなかに、ほかにロマンチックな作品がないというわけではありませんが、いわゆる筒井作品とは、ちょっと毛色のちがった系列の作品だと思います。

『ラブレター作戦』　高斎　正

高斎さんという人は、ぼくと同郷、同学、同年、現在同業という作家です。こういう例は、他の小説のジャンルでも珍しいのではないかと思います。
おたがい、小学校、中学校などのエピソードを共有しているのですから、うっかりしたことは書けません。もし、ぼくが、高斎さんについてなにか悪いエピソードを紹介したりすれば、高斎さんのほうも、報復攻撃にでて、ぼくの悪業をさらけだすに決まっています。
高斎さんは、現在、カーＳＦの第一人者として、『ホンダがレースに復帰する時』というベストセラーをだしています。アンソロジーの編者としては、ここで、高斎さんのカーＳＦをいただくのは、当然すぎておもしろくありません。そこで、わざと意地悪に、自動車のまったくでてこない短編を、いただいたわけです。

『薫煙肉のなかの鉄』　山田正紀

山田さんは、ＳＦ界待望の大型新人です。雑誌の売り文句だけでなく、実力からみて、誰がなんといおうと、大型新人にまちがいありません。
戦後生まれの作家のエースです。ぼくより十二歳も若い、同じトラ年の作家がでてきたのですから、こちらも、うかうかしていられません。

山田さんが築きはじめている、ある世界があります。一見ハードボイルド・タッチですが、やはり、それは、ＳＦの世界です。結末で、主人公の男女は、現在の常識でない、ひとつの愛の形を、追っていくことになるのでしょう。その意味で、ＳＦらしいＳＦであり、ロマンチックな作品であるともいえます。

山田さんは、このさい関係ないけど独身で、もっとも有望な作家といえるでしょう。

『青白い月』　眉村　卓

眉村さんも、幅広い活躍をしている人です。ディスク・ジョッキーをはじめ、ジュベナイル物から、アダルト物まで、活動の範囲の広い人です。

しかも、それでいて、ＳＦ作家として、社会派ＳＦというジャンルを、開拓してきました。一般社会人が読んでくれるＳＦということで、経済学的な知識を駆使して、未来社会を描こうとしたわけです。

はじめ、ぼくは、眉村さんの作品のなかから、ある傾向のストーリイを、いただこうと決めていました。ある小説雑誌で連作されている「旅と女」をテーマにしたシリーズのうちの一編です。このシリーズは、好評で、今でも続いていますが、手許にある作品群を読んでいくうちに、このアンソロジーのために、あまりにも、ぴたりとはまりすぎているような気がしてきました。

そこで、皮肉な見方をして、ロマンチックな香りがあるという理由で、この『青白い月』を選ばせてもらいました。あしからず。

『スネーク』　荒巻義雄

先日、九州で、荒巻義雄という人が、殺人を犯してから、自殺しました。まったくの同姓同名であるため、こちらの荒巻さんは、たいへん気にしていました。

荒巻さんは、北海道に住んでいます。つまり、アリバイがあるわけです。なぜ、こんなことを書いたかというと、現役のＳＦ作家のうちで、京浜地帯、阪神地帯以外に住んでいる、ただ一人の作家だからです。

荒巻さんのデビューは、ぼくたちより、ちょっと遅れました。もしかしたら、それは、地理的環境のせいかもしれません。

東京の出版社とのつながりが少なかったため、荒巻さんは、作家としてデビューするには、不利だったようです。しかし、評論活動は、ずっと続けていました。

荒巻さんは、美術、歴史、文学、科学、海外旅行など、さまざまな分野の蓄積をもった作家です。それは、最新作『空白のムー大陸』を読めばわかります。

このショートショート『スネーク』は、荒巻さんの本領からすれば、あくまで余技にすぎませんが、傾向のかわった作品といえます。

『巨鳥モア』　河野典生

モアというのは、三百年くらいまえまで、ニュージーランドに住んでいた、大きな鳥です。恐鳥（恐竜＝ダイノサウルスに対して、ダイノオルニス）とも、呼ばれています。というようなシラけた解説からはじまると、小難しい作品のように、思われてしまいそうです。もし、ぼくだったら、ガチガチのハードＳＦタッチで、書いてしまっていたでしょう。

ところが、この作品は、河野さんの連作シリーズ『街の博物誌』のなかに、入っているのです。そこが、河野さんの作風のおもしろいところです。ジャズに詳しく、インドやバリ島を放浪したりした河野さんは、独得のムードをもった作家です。河野さんは、ほかにも、古生物をテーマにした作品では、『トリケラトプス』というのがありますが、この場合のモアもトリケラトプスも、街の博物誌というカンバスの上で料理され、ひとつのロマンチックなモチーフになってしまうから、ふしぎな才能というべきです。

『帰還者』　豊田有恒

ぼくの作品としては、かなり古いほうです。ハードSFタッチになっているので、このアンソロジーの雰囲気に、ふさわしくないかもしれません。しかし、本質は、やはり、ロマンチックだと、思っています。

『キューピッド』　星新一

星さんについては、今さら説明する必要もないでしょう。SF作家クラブの会長で、千編ちかいショートショートを書いている人です。この『キューピッド』も、そのなかのひとつです。星さんは、愛の神キューピッドをテーマにしたショートショートを、ほかにもいくつか書いています。福の神がでてくる作品もあります。神様が登場して、人間になにかをするというストーリィだけあつめても、ゆうに本一冊分くらいになるでしょう。そのなかでも、特に、この『キューピッド』は、どういう終わりになるかわからないところが、おもしろいとおもいます。ショートショートの場合、オチというのも、大切な要素です。あまり簡単にわかってしまってもおもしろくありませんし、か

といって、とんでもない結末になりすぎて、読者がついていけなくなっても困ります。星さんの作品の、あっという結末がおもしろいのは、最後のしめくくりの手際が、すぐれているからでしょう。

とよた・ありつね
昭和13年群馬県生まれ。慶応大学医学部中退，武蔵大学経済学部卒業。卒業後「虫プロダクション」に所属し，『鉄腕アトム』のシナリオ執筆で活躍しながら，ＳＦ作家としてデビュー。『倭王の末裔』『倭の女王・卑弥呼』等多数の著書がある。

ロマンチックＳＦ傑作選

COBALT-SERIES　0193-610091-3041

昭和52年4月10日　第1刷発行
昭和54年7月25日　第9刷発行

★定価はカバーに表示してあります

編　者　豊田有恒
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
〒101　東京都千代田区一ツ橋2—5—10
電話　東京　(238)　2781(販売)
　　　　　　(230)　6268(編集)

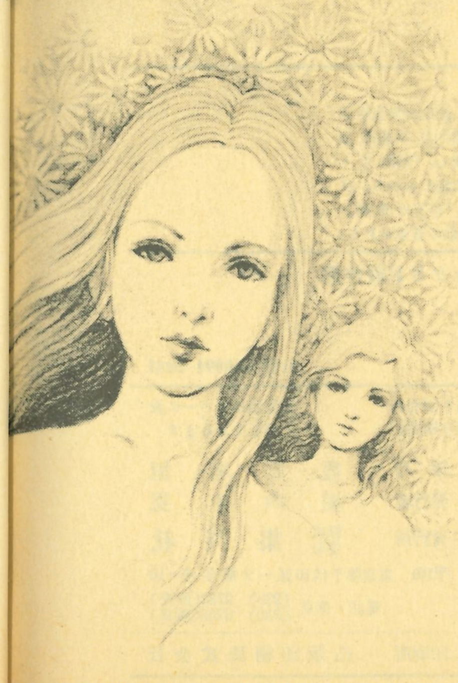
印刷所　凸版印刷株式会社

© ARITSUNE TOYOTA　1977 著者と了解のうえ検印を廃します

青春を考えるヴィヴィッドな文庫
《好評発売中》

集英社文庫 コバルトシリーズ

祭りの夜、ふたりの少女を待っていたものは……
かけがえのない青春を必死に生きる
若子と汐子の姿を描いた愛の長編ロマン！



春の祭り

吉田とし

高校一年の若子にとって、それははじめての港祭りだった。港祭りにくわしい汐子はいった。「男がどんなふうに太鼓を打つか、それを見た自分がどう感じたか、それが問題だと思うよ」…やがてその祭りの夜はきた——。けっぺきな若子と、情感ゆたかな汐子。対照的なふたりが青春をどう生きたか！

青春を考えるヴィヴィッドな文庫

《好評発売中》

集英社文庫 コバルトシリーズ

秘密はふたりのもの 富島健夫
たとえ傷ついても、自分の心の真実を確認しよう！限りない青春を描く感動作！

かりそめの恋 富島健夫
誤解されながらも、激しい恋をもとめて積極的に生きる少女雪枝の青春を描く！

吹雪のなかの少年 富島健夫
誘惑や弱気とたたかいながら、意志をつらぬきとおした少年の泥まみれの青春！

純愛一路 富島健夫
東京の大学に入学した信一を思い続ける順子！強引にお見合いをさせられて……

風にきいた旅 佐伯千秋
バレーに打ちこむ高2のオレの心の中でゆれる2人の少女…愛の光と影を描く！

青い恋の季節 佐伯千秋
学校中の人気者サリーに恋をした千春…本当の愛を見つけるまでの悩みを描く！

初恋教室 吉田とし
初恋は2度目がホンモノなり――意外な結論が出た由紀と青年の初恋教室物語！

潮がくるとき 吉田とし
喜びや悲しみに出会い、傷つき悩みながら愛の真実をさぐる若者たちを描く。

明日は会おうね 川上宗薫
食いしん坊で健康そのものの高校生初子。その恋も青春もダイナミックで……。

水色の愛の挽歌 川上宗薫
野添先生と大四郎が接吻を！ショックをうけた栄子は悲しい決意をした。